# 注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
東方日常日記

【作者名】
ｓａｍｅｒａｇｉ

【あらすじ】
普通の少年が、テンプレ通りに幻想郷へと転生。平凡に日常を送っていこうとする……なんて非凡で非日常的な物語。

プロローグ、テンプレ、普通はじまりってそういうもんじゃん？

気がついた時、白い空間に独りで居たらどうする？

まずは……驚くだろう。それから、その場所のことを調べようとしたり、突然のことへの恐怖で、叫び声を上げたり、泣き喚いたりするかもしれない。俗に言う、人夫々ってやつだ。

だが、そんなことは普通起こらない。現実でそんなことは起こりえない。

それが普通というものだ。

そんな奇特な出来事は、ゲームやアニメなんかの、物語の中だけで十分だ。多くの人がそういった奇特な出来事を夢見ながら、そんなことは起こりえない。というか実際起こったら困る――そう考えることだろうと思う。

俺だったらそう思うね、非日常は必要ないってな。

さて、何故俺が、冒頭からこんな意味無き例え話をしているかというと――――――

気がついたら独りで白い空間にいました。

ｗａｙ？一体、何がどうなっているんだ？何故、こんなところに俺は居る？さっきも言ったが、普通に日常を送っていれば、こんなことは起こらない。有り得ない筈、なんだ。

考えろ、考えるんだ。

非常識で、非凡で、非日常的なこの現状。
現状という、結界を破壊する為には、考え、理解し、解答を導き出すことだ。

まず、一に――――――

俺は自分の頬を思い切り強く抓った。

「痛ぇ！」

痛い、だと……
ということはつまり、だ。

「第一の可能性、『夢オチ』が潰れたか……」

誰が言ったか知らないが、夢の中では頬を抓っても痛みを感じないらしい。
本当かなんて、知るわけがないが……とりあえず、現実ということで話を進めていこう。

だが待て。実際、夢だと思ってたからもう考えとかねぇよ。
ＯＫ。ＧＡＭＥＯＶＥＲだ。電源ボタンはどこだ？ない？そりゃ大変だ。

――――じゃねぇよ!?

待て待て待て、夢じゃないとしたらここはどこだよ、おい!!!現実にこんな場所が在るわけねぇだろうが！
うん分かった、落ち着け俺、一旦クールダウンだ……この状況をど

うにかする名案を考えるんだ。

そ、そうだ！記憶を辿ればここがどこだか分かるかもしれないっ！

えっと、俺は普通の高校二年生だった。よし、ここまではＯＫ。

友達は多くもなく、だが少なくもなく、普通の家庭に誕生し、普通に生活してきた。何の変哲も無い。あぁ、平々凡々な環境だ。

それで確か俺は今日は……朝七時起床。朝飯はトースト。銜えて登校したりは、してないが。で、学校で教師から強力な睡眠呪文を受け、時間が過ぎて――えー、で？あっ、とそう。昼は購買のカツサンド――ってどうでもいいよ！

んで、そっから帰宅部の幽霊部員である俺は、一人で帰宅していき、家に……え？家に――帰ったか？俺、家に帰ったっけ？待て、ここだ。記憶が曖昧だ。よく、思い出せ？

俺は一人で帰宅して――その、途中で――

その時だった。俺の脳裏に一つの、ハッキリとした映像が流れ込んできた。

横断歩道がある。小学生低学年くらいか？少女が渡ろうとしている。

ビニール袋を持っているし、おつかいかな？微笑ましいもんだ。

ん？あれは――大型のトラックが突っ込んできた。ふと、トラックの運転席を見ると――居眠り運転⁉マズイ、このままだと、あの子が！

そう思った瞬間、少女の所に一人の男が……

あれは……俺……？

そう、その毎朝顔を洗うときに見る、見慣れた顔は……正しく俺だった。男、いや俺は少女を突き飛ばし、歩道へと逃がした。

少女は助かった。トラックに轢かれず、無事のようだった。いきなり突き飛ばされて、驚いてはいるが。

安心したのも束の間、少女を突き飛ばした俺は……

女の子の身代わりとして、トラックに潰された。

無残にも、惨めにも、滑稽にも――――――

とても、呆気なく、潰れた。

トラックが、横断歩道が、全てが赤に染まったころに、やっと運転手が降りて来た――

と、そこで映像は終わる。

「なんだったんだ、今のは……？」

自分が、トラックに潰される映像。

自分が――死ぬ瞬間。

「今のは、あなたの最後のきおくです」

俺が呟くと同時くらいに、突然後方から綺麗な声が聞こえた……

振り向くとそこには女性というにはまだ若すぎる……少女が立っていた。いや下手したらまだ、幼女という年齢かもしれない。顔立ちはとても整っていた……胸は、ないが。って、初対面で！しかも幼女とも言えるくらいの子に！なんてことを思ってやがるんだ、俺は！変態か？いや変態だよ！多数決とったら、満場一致で犯罪者だよ！自重しろ、落ち着け、俺。

と、とりあえずだ。

「君はだ「すいませんでしたっ！」

セリフを被らせてきた。
まぁ、俺も大人だ。高校生だが。こんなことで幼女に怒ったりしない。じゃ、気を取り直して。
「すいませんってい「本当にすいませんでしたっ！」
……またかよ。
「いやだか「本当に申し訳ありませんっ！」いい加減にしてくれ!!!
「ヒッ！」
流石に怒るよ?そんなに被らせてきたら。大人?んなもん知るか。
幼女は俺が突然叫んだのに驚き、またすいません、すいませんと謝っている。
「いや、大声出して悪かった……なぁ、なんでさっきから謝ってるの?」
そう聞くと、幼女は少し俯いてしまう。なんとなく、言いにくいことだというのは分かった。
「あの……さっきの映像はあなたのきおくだって言いましたよね」
「あぁ……そんなこと言ってたね」
でもあの映像が俺の記憶なら、俺はトラックに潰されたはずだ。でも今の俺は無傷。それと、ここがどこかの説明が欲しいところだが……
ん?でももし本当にさっきのが俺の記憶なら、一つだけ、この現状も、この空間も、この常識外の全てにも、常識を当てられる選択肢が在る。

だがそれは、ＢＡＤＥＮＤ突入用の、ただ一つの、どうしようもない選択肢だった。

「……あなたは……もう死んでいるんです……」

北斗神拳の使い手みたいなセリフだな、なんて場違いで空気に合わないことを思った。

で、なんだって？俺が死んでる？あぁ、ってことは、ここは死後の世界かなんかなのかね？

「って、ちょっと待って！」

幼女はビクッと肩を振るわせた。怖がっているのだろうか、普段の俺ならちょっとは気遣えたかもしれないが、今は頭に血がのぼっていて他人を気にしてはいられなかった。この図、客観的に見たら危ない図だな。

「俺が死んでいる？本当にか？」

「……はい、すいません……」

どうやら俺の耳が怪電波を拾ったわけじゃあないらしい。俺はもう一度、頬を抓るがやはり痛かった。だが普通こんなこと直ぐ「はいそうですか」なんて信じられるわけもない。生憎のところ、そんな凄まじい適応力は持ち合わせていない。

「ここは、死後の世界なのか？」

天国？地獄？

それとも、それ以外の『どこか』か？

「いえ、ここは死んだもののタマシイのゆくすえを決める場所です」

成程、じゃあこれから天国か地獄なんかに連れて行かれるのか……

「あの……すいませんっ！あなたが死んでしまったのは、私のミスなんですっ！」

「え？君の……ミス？」

どういうことだろう？普通な俺は状況に全く付いて来れていないので、分かるように教えていただきたい。

できれば、短い文章に纏めていただけると、大変分かりやすくていいですが。

「はい…本当は、あそこであのあなたが救った女の子が死ぬはずだったんです。でも私がしっかりと注意していなかったせいで、あなたがあの少女の運命に介入してしまった……」

「……」

「それで、本当はもっと生きるはずだったあなたを死なせてしまった……すいません……」

俺があの女の子の運命を変えて救った？有難う。簡単で分かりやすい説明だ。まぁ状況は把握したさ。

実際はまだ全然把握できていないが、そんなに小難しく考えても、こんなこと、一般高校生レベルである俺の頭が答えを導き出せるとはとても思わない。考えるだけ無駄、ってやつだ。

「それは良かった」

「……え？」

非難の言葉を又は、困惑や疑念といった感情を、予想していたのだろうか。

少女は心底不思議そうな顔をした。これがマンガとかだったら頭上に『？』マークが飛び交っていることだろう。

「だってさ、結果的にその少女を救えたわけだろ？なら良かったじゃないか」

「でも、それで、あなたが……」

「何言ってるんだ。テンプレ通りじゃないか。誰かを救って最期を飾る。最高じゃないか。誰もが一度くらいは憧れたことがあるんじゃないか？普通に。だけど俺がそれをやったと思うと、嬉しいもんだ。最高に「ハイ！」ってやつだアアアアアアハハハハハハハハハーッ、流石にWRYYYYとは言わないが」

「は、はぁ……で、でも」

「ノンノンノートルダム。でもじゃなくてさ。いいんじゃないか、自分を責めなくて。そんなことしてたら、精神的に参っちまうだろ？普通に楽観的に簡単に「相手がそう言うならいいか！」とか考えることも大事だと思うぜ？」

「……は、はぁ……？」

「分からないか？んーまぁ、俺も全く意味が分からん」

「……ぷっ、な、なんですかそれ……」

「いやぁ、なんだろうか、俺が聞きたいくらいだって」

「ふふ、アハッ、アハハハハ！」

幼女は笑った。思い切り、笑った。笑壷に入ったらしい。なかなかどうして。良い笑顔をするじゃないか。女の子は笑顔が一番だ。一番の化粧は笑顔って言うし。……まぁ、悟ったような台詞を言って格好つけたが、実際俺は今も焦っている。というか、この状況下で焦らない奴は普通いないと思うが。これから、俺はどうなるんだろう。天国行けるよな？

「というか、君はなんなんだ？」

「あっ、私は神の下っ端をやらせてもらってます、ランジェと言いますっ」

「ふぅん……神の下っ端ねぇ……」

神に下っ端とかいるのか？いや本人が言っているのだからいるのだろうが。

あれ、神の数え方は人でいいのだろうか。見た目人間だけど。

「あんまり驚かないんですね？」

「普通に考えてこんなところに一般人がいるわけないからな。そんなところだろう」

幼女、元いランジェは、俺の答えに驚いたように眉を顰めながらも、納得していた。

「で？これから俺はどうなるんだ？天国には行けるのか？」

「いえ、あなたには転生してもらいます」

その言葉に、少し無気力状態だった俺は敏感に反応する。

「転生……？次の、体にか？」

「いえ、記憶と体をそのままの状態で転生させます。こちらのミスですから」

「いや待てよ。俺は死んだことになってるんだろ？そこはどうするんだよ」

「はい、ですから本当にすいませんが……元の世界には戻せません」

元の……世界？

また、話がややこしくなってきた。

普通たる俺に、もっと優しくしてくれ。

「あなたはアニメとかゲームとかって見たりします？」

「あぁ、割と好きな方だが……？」

「そういう物語の世界が、本当にあったら……とは考えたことありませんか？」

「普通は誰もが一度は考える道だな」

断言は……出来ないが、考えたことが有る人は多いのではないかと思う。

一般人代表みたいな俺が言ってるんだ。そんなもんじゃないか？

「あるんですよ」

「え？」

一体なんだ。何が有るんだ？

「物語の世界は、あるんです」

「え？あれは人間の考えたフィクションだろ？」

「はい、そのフィクションの世界があるんです」

「……マジで？」

「マジです」

即答か。

「……でジマ？」

「でジマです」

やはり即答か。

あーもういい。今更だ。ここまで来たら、もう大抵のことには驚かない自信が有る。

「えーじゃあ。俺はその物語の世界に行くってことでいいのか？」

「はい、さっきもですけど、やけに冷静ですね」

「そんなことはない。困惑してる。格好つけだから、表に出さないだけだ」

それに面倒でもある。

後、その感じの設定は所謂『テンプレ』だからな。

「ところで、どこに行くんだ？」

出来れば、知っているものがいいが。

「えっと・・・東方Ｐｒｏｊｅｃｔっていう世界です」

「ふぅん、東方かぁ……」

東方というものは俺も知っている。確か弾幕シューティングゲーム、だっけか。友人が話していた。

その東方の世界に行くのか……ちゃんと生きていけるのか？実に心配だ。今からもう、胃が痛むぜ。

「では、転生するにあたって、なにか能力を授けます」

所謂、特殊能力？東方だったら「～程度の」ってのか。

「うん、別にいらねぇ」

ここは素直に断っておこう。

「えっ！なんでですか？」

あからさまに驚愕の色を顔に浮べるランジェ。さっきから思って

いたが、結構子供っぽい……というか、顔に出やすいやつだな。

「だってそんな能力とかあったら普通に生活していけなそうじゃないか」

「普通、ですか？」

「そう、俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを信条としてるんだよ」

「な、なるほど……でももらってくれないと私が怒られちゃいます。困ります」

「そうか？じゃ、適当に付けといてくれ」

「て、適当って……私が決めちゃっていいんですか⁉」

「ＯＫ、ＯＫ、大丈夫だ、問題ない」

「いいのかなぁ……？」

うんうん、無問題（モーマンタイ）。

「大丈夫、大丈夫。あ、後そんなに強くなくていいから、普通の能力でいいよ、普通ので」

関係ないけど『大丈夫』って便利な言葉だよな。

「普通……ですか。分かりました」

そう言い、ランジェはにっこりと微笑んだ。

どうやらやはり、最高の化粧は『笑顔』というのは本当のようだ。

「じゃあ、頑張ってきてください」

「あぁ分かったよ。まぁ楽しんでくる。飽くまで、普通にな」

「『普通』、ですか」

「そう普通。俺の一番好きな、いや大切な言葉だ」

普通で、平凡で――

飽くまで常識的に、飽くまで一般的に――

俺は、それが、そんなのが一番いいと思う。

「えっと後……本当にすみませんでした……」

「どうしたまた？」

「いえ、やっぱり……」

「やっぱり気にしないのは難しい、ってか？」

「……はい」

「ランジェ。御免で済んだら警察はいらない」

「え？」

「謝ることは大切だが、相手の気持ちを押し切ってまでの無理矢理な謝罪は、有難迷惑ですらないぞ？なら、その行動に意味なんて有るか？ＯＫ、答えは『無い』だ。文字通り、答えは無い。だってそんなの

価値観だし。だが、少なくとも俺はそう思ってる。だから――――」

今回のところは、俺ルールで。

「気にすんな」

俺はそう言い、ニヤリ、と口端を吊り上げた。

「それじゃ、もう……」

「はい、転生させます」

「……今度は、俺が先読みされたか」

そんな会話をしながら、なんとなく頭をかいた。

「じゃあ……さようなら」

「いやいやランジェ。別れっていうのはさ」

ランジェは首を傾げる。まぁ多分俺がランジェの立場でもそうなる。誰だってそーする。俺だってそーする。

「またな」

「……はい！また！」

ちょっと、格好つけちゃったか？まぁ、今までもだけど。年頃だから仕方がないよな。

ランジェが笑顔でそう言った瞬間、俺の立ってたところに穴が開い

て、俺は落ちていった。

……え？

「……う、うわあああああ!!!!!」

こういうところもテンプレかよっ!!!格好つけたのに！

こうして、俺の普通的転生ライフが幕を開けた……大丈夫！……なのか？

落ちてきて森だったら？身の危険以外なにを感じる

「痛ぇ……」

どうも、転生者です。

前回はテンプレ的に落とされたわけだが……痛い。当然ながら、落ちたら痛いよ。痛いで済んで良かったのかもしれないが、もう少し一般人である俺にも優しくしていただきたい。

「というか、ここどこだ……？」

落とされた先は鬱蒼とした『森』

風が強く、少し肌寒い。風で落ちた葉が辺りに舞う様子は正に『幻想的』で、見惚れてしまいそうだったが、直ぐに今現在の自分の状況を見直し、溜息を吐いた。

「こんなところもテンプレ通り、か……」

神様や運命というものは、とことんテンプレが好きらしい。だが、実際森の中に落とされるなんて、堪ったもんじゃない。下手したら死ぬぞ。転生直後に。

それがテンプレ、というものなのだが……如何せん納得出来ない。

というか、今はいつだ？何時代だ？人間もいないとか、止めてくれよ、おい。

「安心してください。人はちゃんといますから」

「ＨＥＹ!?な、なんだ？」

突然、背後から声が聞こえた。さっきまで、風の音、葉が擦れる音なんてものしかしていなかったのに。心臓に悪いってレベルじゃねーぞ！

ん……あれ？、今の声はもしかして……

「ランジェ、か？」

声のした方に体を向けるとやはりというか、そこにいたのは先程の件で異様に見慣れてしまった幼女の顔だった。

「はい、正解です！」

「なんだ、いやぁ驚いた……」

素でビビりました。

「あぁ、すいません。おどろかすつもりはなかったんですが……」

ランジェが申し訳なさそうに項垂れる。さっきもそうだったが、感情の変化が激しいやつである。

「いや大丈夫だ。突然だったから、少し驚いただけだ……で、どうしたんだ？」

ここにいる、ってことは何かしら俺に用件が有るんだろう。出来れば、時代や場所のことも教えてくれると有り難い。

「あ！そうでした！あなたのいる場所と能力について説明しにきたんですっ！」

やはりそんなところか。そういえば俺、能力手に入れたんだっけ。ついさっきの事だが……興味が無さ過ぎて忘れていた。

「あなたは今、幻想郷にいます」

ふむ、成程。では今の時代は少なくとも幻想郷が出来た後ってことか……ま、大昔に行くよりはいいけどな。普通に面倒だし、やっていける自信ないし。

「ですが、幻想郷といっても、まだ、東方の主人公である、博麗霊夢さんなどが生まれるより前になっています」

ふ～ん。まぁいいけどね、そんなの。原作キャラと関わったら俺の日常壊れそうだから関わる気ないし。もう壊れているかもしれないが。

とりあえず、こちらから干渉しなければどうとでもなるだろ。

「つぎに能力の説明です」

問題はこれだな。能力しだいでは物凄く有名になってしまったり、直ぐに妖怪とかに殺されたりするかもしれないしな。

俺が頼んだのは飽くまで『普通』の能力だから……大丈夫、だよな？

「あなたの能力は……」

おい、そこで溜めるって何だよ、どんな拷問だよ。生憎俺は、焦らしプレイには興味がないんだが？こんなにも気になってるんだから、というか不安なんだから早く言っちゃってくださいよランジェさん。某クイズ番組の司会者じゃないんだからさ。普通、溜められると余計に早く聞きたくなっちゃうもの何だが？

「あなたの能力は……」

「もういいよ早く言えよ」

そろそろ精神ももたなそうだ。俺は普通に豆腐メンタルなんでね。悪いが、突っ込ませてもらう。

「あなたの能力は、普通にする程度の能力です!!!」

そんなドヤ顔で、発表されても、普通に反応に困る。そんな自信満々し言われても困る。なんだ俺は、どうすればいいんだ。「キャー！すっごーい！」とか言えばいいのか？

「で、なんだ？普通にする程度の能力って？」

変な能力だ。何をどう、普通にするんだよ。普通の考え方なんて、地域、人によって全然違うし。

「この能力を使うと、まわりのものをあなたの思う普通の状態にすることができるんです！」

「俺の思う普通の状態？」

なんだそれ？と思った俺は多分普通だと思うな。

「たとえばですね、病気になった時とか、普通自分の病気はすぐなおる。とか思えば、そのとおり早く病気が完治したりするんですっ！」

ふ～ん……なるほどな。自分が普通だと思えばそれが普通に……って、え？

「なぁ、その能力って、たとえば普通自分はもっと身体能力が高いと思ったら、身体能力が上がったり、普通相手の攻撃が弱いものだと思ったら、相手の攻撃が弱くなったりすんの？」

「はいっ！あなたがそれを普通だと思えば、なんでも実現しますよっ！」

ランジェがとてもいい笑顔でそう言った。笑顔は一番の化粧？前言撤回。発言によっては、笑顔は笑顔でも、悪魔の笑顔になることが判明した。

純粋な気持ちで言っているで有ろうということが、想像できるのも精神的にきつい。

で、出来ちゃうんですか……あぁそうですか、はいそうですか……

「チートじゃねぇかぁあああ!!!」

「ヒッ、いきなり大声だしてどうしました？」

「いや、どうしましたでもこうしましたでもねぇよ！それ、チートじゃねぇか！最強じゃん！普通相手が俺に負ける、とか思ったら絶対に勝てるじゃん!!!」

俺が最も恐れていたチートじゃないすか！やだーー！

「はい！あなたに言われたとおり、普通の能力にしておきました！」

いやいやいやいや、ランジェさん？普通の意味が違いますから。チート能力なんかいらない、って言ったら、有り得ないチートが来ちゃいましたから！

そんな俺の考えも知らず、ランジェはとても純粋無垢な笑みをこち

らに向けている……

「ハァッ……」

「どうしました？」

「いや……なんでもない……」

もう諦めた。もういいよ、俺はこのチートで普通に生きていってやるよ！チートでとしてではなく、飽くまで普通にな！

「そうですか？では、能力については終わりで、最後に名前はどうします？」

「は、名前？って……今までの名前じゃ駄目なのか？」

俺は普通にそのつもりだったんだが……

「はい。転生する時は、もとのなまえは使えない決まりなんです」

「ふ～ん。変な決まりだな、誰が決めたんだよ……そっちがそう言うなら従うが……名前、か」

当然だが、全く、全然、考えていなかった。どうするかなぁ？

普通に常識的に平和的な日常を送っていくための名前……普通に日常を生きる為の……ん？そうだ。

「じゃ、日常生（にちづねしょう）で。日常を生きる、と書いて日常生だ。」

ぶっちゃけ、即興で考えた。なんとなくだ。語呂も悪いし、つくづ

く変な名前だと思う。
だが、思いついたんだから、仕方が無い。
ランジェはふふっ、と微笑み、俺を見上げた。
「日常を生きる、ですか。あなたらしいですね」
「まぁ、な」
軽く返したが、その言葉は誉められているのだろうか、貶されているのだろうか。
多分、どちらでもないのだろう。
「それじゃあ、その名前で。私はもういきます」
そう呟くいた瞬間、ランジェの体が薄くなっていった。
「そっか。もう失敗しないようにしろよ」
「はい！それじゃあ、第二の人生、楽しんでください！」
「おぉ、また、な！」
そう言って消えようとするランジェを見送る……って、ちょっと待て。
「おい、ランジェ！この森はなんだ！」
まだ肝心の詳しい場所を聞いていなかった。
「あぁ、ここは『魔法の森』です。しばらくいると瘴気で『死ぬ』ので気をつけて！それじゃまた！」

……行った、か。また失敗してこの世界に新たな転生者が来るとか、勘弁だぜ？

「……って瘴気で死ぬ!?」

なんでそんな大事なこと早く言わないの!?それじゃ、最終手段『野宿』も出来ねぇじゃん！

「と、とりあえず……歩く！」

そう言って俺は、足早に森を進んで行った……大丈夫、じゃねぇよ！

## スキマさんと　―出逢い―

やぁ、皆！俺だぜ、日常生だぜっ！

……うん、なんかごめん。あれだ、ノリでやった……反省はしているが、後悔もしている。

いやだが、こっちは今、パニック状態なんだ。だってさ。

「全ッ然、出られねぇ……」

瘴気にやられる前に、早く森から出ようと、歩き回り、時には走り、頑張っていたのだが……

出られなかった。それどころか、助けを求めたくても、人の気配もしない……歩けど、歩けど、森ばかりである。

ここ暫く、ずっと思っている様な気がするが、何故こんなにも転生者に対して優しくないシステムなのだろうか。神様達を呼んで、小一時間講義したい。が、今は悠長に出来るはずがないことを考えている場合ではない。

「ハァッ……疲れた」

どれだけ歩いただろう。１０キロくらいか？実際測ったわけじゃないから分からないが……自慢じゃないが、俺は運動が得意ではない。本当に自慢じゃないな。だからこんなにも疲れているが、本当はまだ１キロも歩いていないのかもしれない。流石にそれは無い！と断言出来ない自分が悲しい……

「『普通』この程度歩いただけじゃ疲れないものなんだろうが……」

そう呟いた、瞬間だった。

スッと、魔法でも使ったかのように体の疲れが取れた。どうなってるんだ？ラッキーだが。

歩きながら、考えていると俺は１つの結論に辿り着いた。

「もしかして……能力の効果か？」

いや、もしかしなくてもそうなのだろう。さっき普通疲れない、とか言ったから普通の状態、つまり疲れていない状態になったって感じだろう。

そう考えると、本当にチートじゃないか……普通なら喜ぶべきなのかもしれないが、俺はどうにも喜べなかった。何故だろうか、俺にも分からん。考えるのは面倒なので止めておこう。

まぁ、もらったものを有効活用しないのもあれだから、出来るだけ役立てていきたいものだが。

それから俺は、歩く、疲れる、能力。歩く、疲れる、能力。歩く、疲れる、能力……と繰り返し、進んでいったが…

やはりというかなんというか、森から出ることは出来なかった。

体力面をどうにかしても、瘴気が体を蝕んでいくのには変わりが無い。

「ハァッ……少し座るか……」

と、近くの岩に腰を下ろす。

本当はこんなことしている場合ではないし。疲れは取れるのだから、ドンドン歩いていけば良いのだが……体力が回復しようが、精神は回復しない。このままだと俺の豆腐メンタルがヤヴァイ、ヤバイではなく、ヤヴァイ。

これから、どうするかなぁ……そんなことを考えていると、後ろからなにかの気配を感じた気がした。
ん？なんだ？……って、もしやこれは死亡フラグ!?
夜で一人で後ろから気配……普通この状況下はどう考えても死亡フラグだよな？

よくよく考えれば、ここは東方の世界。妖怪なんて普通にいるだろう。逆によく今まで遭遇しなかったものだとも思える。
待て、落ち着け、冷静になれ。こんな時、普通はどうするべきだ？
普通Ｌｖしかない俺の脳をフル回転させる。そりゃもう、脳壊れちゃうってレベルで。ごめん嘘だ、そこまで考えてない。
考えた結果。俺が辿り着いた答えは……

「誰だ！」

普通に振り向くことでした。
いやだって俺、普通の高二ですよ？いや、元高二の方が正しいのか？いや、どっちでもいいが。
普通に振り向いた先には、金髪の女性が空間の裂け目のようなものから覗いていた。ってあれは……

「あら？ごめんなさい、驚かせてしまったかしら？」

こ、こいつは確か東方キャラの八雲紫じゃねーか!!!なんでいるんだよ、おかしいだろ!!!……いや取り乱した。謝罪する。
だが、実際に東方キャラを見ると、思うことがあるもんだ。
八雲紫を見て、胸でかいなぁ…とか思った俺は普通だと思う。誰がなんと言おうと、一般人を通すぞ。
というか、原作キャラには関わらない、とか言ってたのに、もう関わっちまった……
あぁ、俺の平和が崩れない間に、こいつとは離れ、さっさと脱出し

た方がいいかもしれん。

「どうかしたの？」

「え？あぁ、いえ、何でもありません」

「そう？それならいいのだけれど……」

「それより、貴女はは何者ですか？」

一応初対面設定だからな、普通はこういう反応だろう。いや、実際的にこっちが一方的知ってるだけであり、初対面ではあるのだが……

「人に名を聞くときは、普通自分から名乗るものじゃない？」

一瞬、いやお前は妖怪だろ。と、突っ込みそうになったが、頑張って堪えた。だが、俺は普通という言葉には弱いんだ。ここは平凡に名乗ってやろう。

「それは失礼しました。俺は日常生、と言います。以後、お見知り置きを」

俺だって、一応初対面の相手には畏まる。というか、それが普通だろう。え、ランジェ？あぁ、あの時はパニックだったし、見た目がどうにも幼かったからな……つい、ってやつだ。

「私はこの幻想郷の管理者である、妖怪の八雲紫よ。よろしくね」

自己紹介ありがとう。知ってます。とは言えなかった。話がややこしくなるだけである。

「これはご丁寧にどうも」

「あまり驚かないのね？私は妖怪よ？」

「いえ、見た目と……気配がどうにも人間離れしていたので、そんなところだと」

いやだから既に知っていることを聞いて驚くわけないだろ。なんて台詞はやはり言えない。というか言わない。

だが、気配の事は本当だ。妖力ってやつだろうか？何か、怪しげで強い力が紫から漏れ出しているように感じた。

「ふふ、でも私が実は猫をかぶっていて、いきなり貴方を食べちゃうかもしれないわよ？」

「その時は、そういう運命だったんだと、普通に受け入れますよ」

「ふふ、貴方、面白いわね」

「褒め言葉だと受け取って置きます」

「えぇ……そうして頂戴」

「というか、貴女は僕に危害を加える気なんてないでしょう？」

「あら？どうしてそう思うの？」

紫は、少し嬉しそうに口端を吊り上げる。ランジェの笑顔とは違い、紫の微笑はとても胡散臭かった。

「危害を加えるだけなら、こんな雑談する必要ありませんし……それ

に、さっきから漏れている『力』わざと、でしょう?俺を怯ませる為かは分かりませんが。貴女ほどの妖怪が、不用意に、力を漏らすなんて考え辛いですしね」

もしかしたら俺は、試されていたのかもしれない。俺が「危害を加える気はないだろう」と質問した時、普通ならば少しくらい雰囲気が怪訝的で警戒的なものに変わるだろうが、紫は寧ろ嬉しそうだった。言い当てるのを待っていたように。

「ふふっ……貴方、本当に面白いわねぇ。そして『変わってる』」

紫は扇子を口の前まで持っていき、本当に可笑しそうに微笑んだ。

「有難うございます。ですが俺は、別に変わってなどいませんよ。極々普通の、人間です」

「……まぁいいわ。それより私は世間話をしにきたわけじゃないのよ」

普通の世間話をしていたとは、とても言えないがな。

「さっきも言ったけど、私はここの管理者なのよ。貴方、ここに来たばかりでしょう?」

「おや、ストーキングですか?貴女の様な美しい方に興味を持っていただけるとは光栄です」

「ストーキング、じゃないわよ?私が管理しているんだから、変化が起きたりしたら分かるわ。まぁ貴方に興味が有るっていうのは、間違ってないけどね」

「成程、失礼しました」

まぁ、良く考えれば、俺が大妖怪にストーカーされる理由なんて、どこにもない。

「それで、ここがどこかは分かってる？」

「幻想郷でしょう？」

「あら？ここにきてから私に会うまで誰とも会っていなかったのに、どうして知っているのかしら？」

ミスった！選択肢をミスしました。やり直しを要求する！だが現実は非情である。無理なものは無理だ。

「おや、貴女と出逢ったのはここが初めての筈ですが……何故そんなことを知っているんですか？」

やっぱりストーカー？

「貴方を、つけていたからねぇ」

「それは一般的にはストーキングと言うんですよ」

少し溜息を吐いた。俺は間違ったこと言ってないよな？

「だから違うわよ。それより貴方を元の世界に……」

「待ってください！この小説終わっちゃいますから！」

「何の話？」

「いえ、失礼しました。俺の脳が怪電波を受信してしまったようです」

作者からのな。

「貴方戻りたくないの？」

今更戻っても俺死んでるし、転生直後に元の世界に帰るとか聞いたことがない。

「そうですね。観光でもしようかと」

というか、戻っても行くとこ無いし。

「そう、じゃあもう終わりでいいわ」

え？早くね？あっさりＯＫ出しすぎじゃね？

「もう、宜しいんですか？」

「えぇ、貴方、悪い人には見えないしね」

褒められているのだろうが、随分と適当な人、いや妖怪だ。管理者がこんなので大丈夫なのか？

まぁ、俺としては長々と面倒くさい話をするよりは全然いいが。

「それよりも、貴方、住むところはあるの？」

「いいえ、これから探そうと思っていたところですが……」

その前に瘴気の事もあるし、早く森から出なければならないわけだ

が。

「そう。じゃあ、私の家に来ない？」

「え？……貴女の家に、ですか？」

「えぇ、貴方気に入ったわ。それに、外は危険な妖怪も多いわよ？」

確かに、妖怪に襲われるのは勘弁だしな。それにそろそろ、瘴気で正気がなくなりそうだ。

なにより大妖怪の家。平和的な日常を送るためにはいいかもしれん。

「貴女が良いと仰るのでしたら、俺としては飛びつきたいような話ですねぇ」

「交渉成立ね」

「交渉と言えるんですか？今のは」

「それより、その敬語、止めてくれないかしら？」

「えぇっと……宜しいんですか？」

「これから家にも招くっていうのに、いつまでもそんなんじゃ参っちゃうわ」

それは、こちらとしても有り難い。いつまでも敬語なんて普通に疲れるからな。

「じゃあよろしくな、八雲さん」

「紫」

「え？」

「紫でいいわ」

まぁ、その方が呼びやすいかな。俺的には。

「じゃあ、俺の事も呼び捨てでいいよ。よろしくな紫」

「えぇ、よろしくね生……というか貴方、雰囲気が少し変わったわね？そっちが素なのかしら」

「あぁ、こっちが素だよ」

「ふぅん……」

紫は、何か考えるように顎に手を置いた。

瞬間だった――

いきなり俺の立っていた地面に穴が開いた

「うぉおおお!!?」

そう叫んで俺は眼が沢山浮いた、異様な空間に落ちていった。

へぇ、スキマの中ってこんな感じなのか。

あぁ、俺、一日の間に二回も落ちてるってなんだよ。普通こんな体験しねぇよ。

いや、転生した時点で普通じゃないんだが……

「って暢気に考えてる場合じゃねぇええ!!!」

だが、俺の叫び声は、スキマの中に虚しく消えていった――

一方その頃、俺が落ちた場所では。

「ふふっ、よろしくね。生」

一人のスキマ妖怪が不敵な笑みを浮かべていたという……もう大丈夫からはかけ離れたな。

突撃！隣の八雲家！

「ん、うぅん……」

何かゲームの世界に転生するとかいう意味が分からない夢を見ていた気がする。

中々に、面白い夢だったが……夢は夢だ。現実とは違う。

流石に俺は、そんなことも分からない程に、普段から夢見がちな純粋少年というわけではない。

俺は普通の少年だからな。

今日もいつもと変わらぬ日常が始まる――ことはなかった。

「目が、覚めましたか？」

「へ？」

横から女の声が聞こえた。

どういうことだ？俺の母さんと妹はこんな声ではないぞ？まさか――父さん!?……いやいやないないない。うん、分かってる。というかもし仮に父さんが俺が起きるまで横にいて、こんな声を出していた――なんてことが発覚したら家庭崩壊ってレベルじゃない。

待てよ、じゃあ今の声は誰の声だ？

考える。考える。考える。

よし、分からん。

俺は普通の人間だぞ？

起きた直後に聞こえた、聞きなれぬ声の主が誰か？そんなことが分かるわけがない。

ならば――――――

普通に声が聞こえた方を向こうか。

なんて、結局どうしようもなく普通な結論に至ってしまった。これが最善の策だということは、もう随分も前に分かっていたことだと言うのに。俺は回りくどく考えるのが好きらしい。

俺は極普通に寝返りをして横を見る。

そこには、いた。

何が？何かがだ。

一瞬、理解が出来なかった。

そこにいたのが見知らぬ女だということは理解が出来た。

だが――――――

「なんで……尻尾!?」

その女には、尻尾があった。

いや普通尻尾って動物に付いてるものじゃないの？。

俺にはない。皆無い……筈。

一体、何の尻尾だ？俺の脳内バンクに検索をかける。

出てきたのは……狐、かな？

多分、狐。尻尾は。

あんれー？俺さっきまで「純粋少年じゃない」なんてこと言ってたけど、実は夢見がちだった？
いやいや、そんな筈はない。俺はいたって正常だ。
つまり、目に映っている光景だけが、真実だ。
「どうか、されましたか？」
「へっ!?あぁ、いや、えっと」
我ながら、どもりすぎだ。
「……どちらさまでしょうか？」
見知らぬ人とは、まず自己紹介をしよう。
普通な世界の、常識だ。
この常識が『見知らぬ狐みたいな人』にも適用されるかは分からないが。
この場合もっと気にすることがあるだろうが……うん、置いておこう。
いやいやいや、あんたらね？置いておく、諦める。そんなことも大事なんですよ？
だから俺は、面倒事はとりあえず投げ捨てていく。
「あぁ、申し訳ありません。私は、八雲紫様の式神で、藍と申します。」
「藍……さん？」

「呼び捨てで構いません」

「そ、そうですか？じゃあ、藍で」

へぇ、この人（みたいなの）は藍というのか、覚えておこう。人の名前を覚えるということは、社会的常識だからな。

「ん？待って下さい。八雲……紫？」

「はい、私は紫様の式神です」

八雲、紫。八雲紫。ゆかりん……じゃなくて、紫？

「あ、あぁ何か……思い出してきた」

八雲紫。東方Ｐｒｏｊｅｃｔに登場するスキマ妖怪……俺は、そいつに出会って、それで、泊めてもらえることになって……ん、ん？

「あぁ!!!」

「え？」

「……夢じゃ、ない？」

夢じゃなかった。現実だった。俺、死んでランジェに転生させてもらったんじゃん！

「貴女は、八雲藍、ですか？」

「え？あ、あぁ、はい」

藍は戸惑っているようだった。当然だ。俺だって目の前でいきなり変な男が叫んで「……夢じゃ、ない？」なんて言っていたら、黄色い救急車を呼ぶだろう。普通の反応だ。
誰だってそーする。
俺だってそーする。

だが、普通夢だと思っちゃうだろ？あんなの。

「え、ってかちょっと待って下さい、ここ八雲紫の家」

「はい」

「あぁ、さいですか……」

道理で……見覚えがないと思った。俺の部屋、和室じゃないし。
いやーうっかり、うっかり。
もっと前に気がついて置くべきだったが。

「あ！待ってくれ、藍！」

「え、え、はい？」

付いて来れていないようだな。だが俺にはやるべきことがある！
さっきまで使っていた敬語を忘れる程には、緊急的な。

「ここ八雲家なんだよな？」

「は、はい」

「俺、ここに入るの、初めてだよな？」

「えっと、はい」

「あー……ちょっともう一回させてくれないか」

「え？」

「最初の……俺が目を覚ますところから」

「えぇ？」

「じゃ、俺寝るから」

「は、はぁ……」

俺はもう一度布団に潜る。
察しの良い人なら、気がついているかもしれない。
分かるわけない？まぁ、そうか。

いやなに、俺は普通にやりたいことがあったんだ。
それじゃあ……テイク２！

「ん、うぅん……」

俺は目を覚ます。
体が、少し重かった。
ここは……

「知らない天「目が覚めましたか？」……台詞、被っちゃった」

折角、折角、人生の中で言いたい台詞ベスト５に入るかな、くらいのこの台詞を言えると思ったのに……

「ハァッ……」

「あの……」

「ん？あぁ、すまん。付き合わせて」

流石に、もう一度リベンジ！なんてする気にはなれなかった。
俺は諦めが悪いが、諦めはいい方なんだ。
ま、要するに……普通なんだ。

「もう、宜しいんですか？」

「あぁ、よろしいですよー。よろしすぎて困っちゃうね」

「困ってるんですか？」

「え？あ、あぁ……いや別に」

しまった。藍にはどうやら、冗談が通じないらしい。
だが、そういう人を見ると、なんか冗談を言いたくなるのが、一般人の性！ロマンシング！そっちじゃない！

「なぁ、藍」

「はい？」

「アルミ缶の上にあるミカン!!!」

「……？」

なん……だと……

そ、そんな、俺の渾身のギャグにピクリともしないなんて……

「あの、申し訳ありません、『アルミ缶』とは、なんでしょうか？」

「へ？」

へ？

「あ、あぁ～そっか、アルミ缶知らないか……」

そ、そうか！アルミ缶が知らないんじゃ、仕方がないよな！

「それじゃ、次こそ！」

「は、はい……」

「猫がねころぶ！」

「……？」

「同じ反応!?」

そ、そんな……

俺の渾身の一撃が、効かない!?

「あの、どういう意味でしょう？」

「ガハッ！」

痛恨の一撃！生に９９９９のダメージ！

「クッ、やるな……藍」

「え？」

「次だ！……お金はおっかねぇ！」

「お金がないと生きていけませんが？」

「ある日のアヒル！」

「この辺りにアヒルはいませんが……」

「惰性はダセー！」

「働いているほうがいいですね」

「イルカは要るか？」

「要りません」

「猿が去る！」

「さようなら～」

「専用にはせんよ！」

「私のことは、遊びだったんですね！」

「苦心の屈伸！」
「運動しないから……」
「椅子はいいっす！」
「私は座布団派です」
「漫画は我慢！」
「漫画の代わりにこの小説を読みましょう！」
「停電してんでぇ！」
「ブレーカーが落ちました」
「出口で愚痴る！」
「迷惑ってレベルじゃないですね」
「コンニャクは今夜食う！」
「コンニャクご飯、コンニャクサラダ、コンニャクの炒め物ｅｔｃ…」
「アラスカを荒らすか！」
「アラスカ避難警報です！」
「ハリウッドで針売るど！」
「どなたか針、針は要りませんかー！」

「カレーは辛ぇ！」
「水！水プリーズ！」
「象だぞう！」
「狐だぞー」
「妖怪に用かい！」
「はい、何の御用でしょう」

＊

「お隣、に、お泊……り……は、はぁっ、はぁっ……」

全然、効かない……
一体どれだけポーカーフェイスなんだ。おかしいだろ。
普通の人間の面白さは、式神には通じないのか？

「んぅ～……ど、どうすれば……このままじゃショックで失踪しそう、んむぅ……仏像をぶつぞう！いや駄目だ。クッ、どうすれば藍を笑わせることが出来るんだ!!!」

俺が1人ブツブツと念仏の様にギャグを考えていると突然、藍が下を向いた。

「……藍？」

「ふふっ、ふふふ……」

藍は、笑っていた。

だが何故だ？さっきまで鉄壁の表情だった藍が……俺、なんもしてないぞ？

「す、すいません。日常さんが必死になってるのが、面白くて……」

「そんなのが、か？」

でも、藍は笑った。俺は何かしたつもりはないが。

「じゃ、俺の勝ちだな！」

「これ、勝負だったんですか？」

「……さぁ？」

「ふっ、ふふ……アハハハハ！」

「ハハ、随分と大声で笑ってくれるな……」

何故皆、俺の意図しないことで笑うんだ？不思議で仕方ない。

「も、申し訳ありません」

「いや、いいよ。楽でいい。話し方も、無理に敬語じゃなくてもいいぞ？」

「ですが、日常さんは大事なお客様と……」
「俺は普通の人間だ。大したもんじゃないよ」
「はぁ……」
「それに……」
「それに？」
「俺はここに泊まるわけだ。そこで一緒にいる奴から、敬語で話されるとかどんな拷問だよ」
「拷問？」
「だって、普通じゃないだろ？そういう堅苦しいの」
「普通、ですか？」
そう、普通。俺が、最も好きな言葉。
「俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを信条としてるんだよ」
「ふふっ、そうなんですか」
「笑わないでくれよ。結構真面目に言ってんだ。後、敬語じゃなくていいって」
「あぁ、申し訳、いや……すまない」

結構、凛々しい喋り方だった。
八雲藍ってこんな喋り方なのか。

「どうした？」

「いや、なんでもない」

「そうか……じゃあ、改めてよろしく、生」

「よろしく、藍」

絆っぽいものが、出来たのかもしれない。

「なぁ、そういえば……紫は、どこだ？」

「ん？あぁ紫様なら違う部屋だが……」

「そうか、じゃあ案内してくれよ、挨拶する」

「分かった、こっちだ」

「あぁ……そうだ、藍」

「ん？」

「喋り方、そっちの方がいいと思うぞ？」

仕上げに格好つけとこう。

＊

「――あら？生、気がついたのね」

「お蔭様でな」

「いや～いきなり気を失うんだもの、死んだかと思ったわよ」

「死んでないが……そうか、心配を……ん？」

待てよ？俺は何故気絶してたんだっけ？

確か、紫と出会って、泊めて貰うことになって、家に連れて……ん？記憶が曖昧だ。

「だって貴方、スキマに落ちた程度で気を失うんだから！」

瞬間。俺は固まった。

否――幻想郷、全ての時が止まったようだった。

そんな能力を持つ奴がいるのだろうか？

それは凄く気になるが、今はその話ではない。

思い出した。全てだ。

そう、俺はこいつに……紫に突然、スキマに落とされたのだ。

非常識にも、非凡にも、俺は、普通から逸脱した行為をされた。

落とされる。

人間のすることじゃねぇ。

いや、妖怪か。

妖怪は皆、こんななのか？

何か、理不尽なことへの怒りが込み上げてきた。
この怒り、どうすればいいんだ。

よし、こういう時は普通に――――

「なぁ、紫。突然落とすなんて酷くないか？」

本人に、言ってやる。

「ん～そうかしら？」

のらりくらり、とかわすつもりだな。だが、甘い。

「いや、酷い」

「そんなこと「お仕置きを受けてもらいたいくらいだな」……お仕置き？へぇ……どんな？」

食いついた。
針に食いついた魚は逃がしたくない。いや、逃がさない。
それが、普通だ。

「そうだな……『普通』自分がしたことをそのまま返されるだろ？」

「そ、え？キ、キャァァァァァ!!!!」

落ちた。

八雲紫は、落ちた。

どこに？
自分の下に突如発生した、スキマにだ。

何かしたら、返される。
これぞ――普通。

「ゆ、紫様!?生、今のは」

「藍」

「え？」

「これは、俺の能力だ」

「や、やりすぎでは」

「藍……」

「え？」

「これは、自業自得だ」

俺はそう言って、ニヤリ、と笑った。

さぁ、今日から八雲家での楽しい楽しい新生活だ。ん？あぁ紫なら大丈夫だろ……多分。

こんな八雲家的日常、どうでしょう？

「生、今日の御夕食は何かしら？」

「今日はカレーを作ろうと思っている。晩飯の定番だろ？」

「カレー？なぁ、カレーとはなんだ？」

「あぁー……まぁ食べれば分かる。ちゃっちゃと作るからそれまで待っててくれ」

「分かったわ。楽しみにしてるわね♪」

「じゃあ、私は掃除の方をしておくよ。紫様、部屋まで」

「おう、そんじゃ後でな」

八雲家に住み始めてから約1週間が経った。

今ではもう紫とも藍とも、随分と打ち解けたものだ。

……まぁ、紫は最初から異様に馴れ馴れしかったような気もするが……

それは置いといて、いやむしろもう思い出さないようにどこかに捨てる勢いで。

ここに住み始めて直ぐ、「居候なんだからなにか家事でもやらせてくれ」と申し込んで、俺はとりあえず料理係に任命された。

任命された――のだが、俺はいざキッチンに行って絶句した。

ここは幻想郷。炊飯器もオーブンも無く、全て歴史の教科書にでも

出てきそうな釜戸なんかしか無かった。
当然、俺はこんなもので料理をしたことは無い。
だが、自分からやると言ったのだから何とかしないといけない。というか、何とか出来なければ滅茶苦茶格好悪い。

といっても、どうしようも出来ない。悲しきかな、それが現実である。
どこをどう見ても、使い方など分かるはずも無く、そもそも考えることもそんなにしなかった。無駄だと思ったから。

恥を忍んで、藍とかに聞くか？いや、だがそれは……
そんなことを考え、無駄すぎる時間を消費しながらなんとなく、

「『普通』、炊飯器くらいあるだろ……」

と半分冗談でぼやくと、俺の目の前に炊飯器が出てきた。

……え？一瞬状況が理解できなかった。だが少しして、一つの結論に辿りつく。その間、３２秒。

「あ、能力が発動したのか！」

俺の能力は『普通にする程度の能力』世界を自分の思う普通、常識に作り変える能力だ。

そうか、今の呟きが現実になったんだ。というか、この能力無意識で発動することが多い気がする。便利のような不便なような……微妙な感じだ。
本当にチートだなぁ、とりあえずランジェに感謝して置こう。なんて思いながら俺はそこにあった食材で料理をはじめた。

その日、得意料理であるハンバーグを作って出したら二人（妖怪とその式神だが）はハンバーグを知らなかったらしく、食べたらとても美味しいと言われた。
それから、俺は美味しい料理を知っているということで、正式にちゃんとした料理係に任命された。

と、回想終えて現在――

「ふんふ～ん♪」

俺は鼻唄を奏でながら、サクサクとカレーを作っていく。
転生前でも、家の料理を担当していたからこのぐらいは余裕だ。
いや、カレーぐらいなら普通に誰でも作れるが。

「よしっ！そろそろ完成だな」

キッチンにはカレーのいい匂いがただよっていた。
スパイスの香りとは、実に空腹を増加させるものだ。俺は思わず、唾を飲み込んだ。

「おぉ、いい香りだ」

突然の声に振り返ると、そこには藍が笑顔で立っていた。

「よ、藍、掃除は終わったのか？」

「まぁね。それにしてもおなかが空いてきたな」

「後少しだから、待っててくれ」

そう言って、俺はカレーをよそって口に入れる。

「よし！いい味だ！」

「あら、いい香り。もう夕食はできたの？」

そこには、カレーの匂いに釣られてきたのか、紫が居た。

「あぁ、完成だ。二人とも皿を持ってこい」

二人は頷くと自分用の皿を持って俺のもとへとやってくる。

その皿にカレーを装ってやると、二人は目を輝かせていた。

子供みたいだなぁ、そんな風に思った。でも実際は有り得ないくらいに俺の方が年下なんだけどな。

俺はそんな二人を見て、苦笑しながら自分の分をよそって椅子に座る。

「お前ら、ちゃんと手は洗ったか？」

「洗った」

「失礼ね、ちゃんと洗ったわよ」

「ＯＫ、じゃ、手を合わせて」

三人同時に手を合わせる。パチン、といい音がなった。

「「いただきます」」

その言葉と、ほぼ同時に皆が食べ始める。お腹が空いていたんだろう。さっきも言ったが、スパイスの匂いを空腹を増加させるしな。

カレーを一口頬張る。
おぉ、自分で言うのもなんだが、結構うまい。
色々なスパイスを使ったのが良かったのだろう。心地よいとも言える絶妙の辛さが口の中に広がる。

「どうだ？二人とも」

どうだ？というのは味の感想だ。二人は始めてのカレーらしいから、口に合うといいのだが……
二人は俯いていた、口に合わなかったか……
そう思った瞬間、二人がハッ、と顔を上げた。

「うッうまい…！芳醇な香りが口の中に入れた途端に広がってくる」

「スパイスの香りか？」

「ウンまあ～いっ！こっこれは～っ！この味わあぁ～っ！ハーモニーっつーんですかあ～、味の調和っつーんですか～っ！」

「で、結局？」

「「美味しい!!!」」

「……そりゃ、良かったよ」

確かにカレーは美味しかった、が。こいつらと食べたからかもっと美味しく感じた……誰かとの食事は良いものだ。疲れたけど。物凄く疲れたけど。

＊

「平和だなぁ～……」

食事も終わり、縁側で夜空を眺めながら、のんびりとお茶を啜る。東方の世界に行く、って時はどうなるかと思ったが、随分と平和的な日常を過ごしている。

「そうねぇ。平和だわ……でも、その感じちょっとおじさんぽいわよ？」

横にいる紫がいきなり話しかけてきた。ってか、一人でお茶飲んでたはずなのにいつのまに隣にいたんだ？全く気づかなかった。

「いつから居たんだお前は。ってか俺をおじさんというならまず自分を見な「何か言った？」いや何も言ってません。すいません」

物凄い殺気が隣から伝わってきた。うわぁ、凄い、凄い笑顔だよ紫さん。笑顔が一番怖いみたいなことを聞いたことがあるけど本当だったんだな……

「それにしても、少し平和すぎてつまらないわ」

「いいじゃないか。平和な日常ってものは何よりもいいものだぞ？」

特に俺はそう思うね。一度死んだ身だしな。

「貴方はそれがいいでしょうけど、刺激が全く無いのもつまらないものよ？」

刺激、ねぇ……確かに刺激を求めることは人として普通のことだろう。俺だって少しぐらいは変わったことが有った方がいい。

「そうか、刺激かぁ……」

少しでもいい、なんかいい感じのことは無いだろうか？

そうやって考えていると、掃除が終わったのか藍が縁側にやってくる。

「おぉ、藍いいところにきてくれた」

「何やってるんですか？」

「まぁ、座りなさいよ藍」

「あ、はい。それじゃあ失礼します」

と、藍が俺の横に座る。それによって俺は必然的に両手に花状態になってしまう。

「こんな美少女二人に挟まれて嬉しいかしら？生」

「お前、美少女って、少女とか「何かしら？」イエ、トテモウレシイデス」

「片言になってるぞ……」

藍が呆れ顔でこちらを見てくる。だって！殺気ヤバイんですよ！俺はまだこの年で死にたくない！ってか、せっかく転生したんだし！

「そ、それよりだ、藍。突然だが、何か刺激的なこととか、暇じゃなく

なることは無いか？」

「ん？刺激的で暇潰しになること……うぅん……何か遊び道具でも用意する？」

「遊び道具なんてあったかしら？」

「それは……無いですね」

「いや、無いのかよ」

ハァッ、と溜息を吐く。遊び道具……前の世界では暇だったらゲームとかがあったんだが……こっちはそんなもの無いからなぁ……

「ん？あ、そうだ！」

俺は一つの選択肢を思いつく。これが漫画だったら俺の頭の上にはピコーン！と『！』マークが出ていることだろうと思う。

「えっと、『普通』一家庭に一つくらいゲーム機とか、有るんじゃないか」

そう言うと、突然出現するゲーム機。機種はP○2だ。うん、これぞチートの有効活用。物がいきなり出現するのは普通なのか？なんてのは無粋な突っ込みだ。

「凄いわね……で、これどうやってやるの？」

「ん、まずはテレビを……いやテレビねーじゃん！」

「どうするのよ……」

「うぅむ……じゃ、もう一回。今度は携帯ゲーム機でも……」

そう思い、さっきの台詞をもう一度言うが……

「あれ？出ない」

どういうことだ？

「生、さっき一家庭に一つって言ってたじゃないか」

「え!?だからなの？もうP○2が有るから、出してくれないってことか!?」

何このチート！融通が利かないんですけど！

「どうするのよ！」

紫はさっきと同じ台詞を、今度は呆れ気味ではなく、怒り気味に言う。

「うぅー……そ、そうだ！『普通』一家庭にゲームくらい有るだろ！」

そう叫ぶと、目の前にカードの束が出現した。

「……トランプ？」

「あれ、知ってるのか？藍」

「あぁ、まぁ見たことくらいはある」

これは意外。トランプは有るのか、幻想郷。

「でも、なんで出てきたの？」

紫が首を傾げる。まぁ、これは俺も賭けだった。

「さっきはゲーム『機』って言ったからな。電子ゲームじゃなければ出せるだろうと」

「成程、ね……だからトランプ。ま、そんなのはいいわ。早くやりましょう」

「ＯＫ、まずは、紫抜き、ならぬババ抜きでも――」

＊

「どうして勝てないんだ！」

あれから一時間。
勝てない。
藍にも、紫にも。

「なんかイカサマとかしてるだろ、おい！」

「あら？してないわよぉ？ねぇ、藍」

「はい」

二人は飽くまでそれ以上を口にしない。

「つ、次だ！普通に初めてやる奴に負けるとか、プライドが許さん！」

「いいわよ、やりましょうか」

「手加減無用だ！いくぞ！」

ババ抜き神経衰弱七並べポーカーブラックジャックダウト大富豪etc…

＊

鳥の鳴き声が聞こえる。

朝日が異様に眩しかった。

先程まで悪魔のように見えていた二人の顔も、眠っていると、天使のように見える。

あれから続けた結果――――

２４１敗２勝。

俺はもう、暫くトランプはしないと誓った――大丈夫な、わけが無かった。

偶には世間話でも。

「いい、天気だな……」

縁側でお茶を啜りながら呟く。
とても、晴れ晴れとした空だったのだ。
そんな空を見ていると、無意識に、綺麗だと思ってしまう。

「隣、いいか？」

突然、背後から声がした。
落ち着きの有る、綺麗な声。

「おぉ、大歓迎だ」

「有難う」

藍は、少し頭を下げ、俺の直ぐ横に腰掛ける。

「……そういや、紫は？」

「朝早くに出かけた」

朝早くから、ねぇ……
変な事してなければいいが。
まぁ、紫の行動に対し、一々心配などしていたら、精神が磨り減るだけだ。それは、この一週間程の間に、痛いほど思い知らされている。
元の世界で初めて紫を見た時は、もっと大人びているキャラだと思ったが……実際、大人びた、悟ったような時も有れば、見た目にも、

実年齢にも反した、子供っぽい時も有る。

要するに、面倒な奴だ。

もっと普通に平凡に、俺の様になってくれないかねぇ。

……無理だな。紫と俺の知る常識が相容れる様には、とても思えん。

「平和って、いいよな……」

「そう、だな」

藍のことを、元の世界で初めて見た時は、従者、厳密には式神か。そんな設定や、狐という動物のイメージから、小動物系の愛らしいキャラだと思ったものだが、実際は、凛々しく、頼もしい奴だった。

だが、一つだけ俺の予想通り。ピッタリだったところは、可愛らしい、というところだろうか。

そんなことを考えながら、横目で藍を見る。妙にお茶を飲む姿が合っていた。

だが、「ふぅ…」と、息を漏らす姿はやはり、女の子らしいものに見えた。

そこでふと、思う。

俺って、東方のこと何にも知らなかったんだな……

ランジェから聞いた時は、知っている作品だと、安堵したものだが……

「どうした？」

俺が少し真剣な顔付きになったのを感じたのだろうか。藍が、少し心配げに、不思議そうに訊ねてくる。

「いや……やっぱり、平和っていいなーと思ってさ」

嘘ではない。素直な気持ちだ。
平和的な日常――いつもどこかには有るけど、中々、感じられるものではない。
それが、普通ってやつだ。

「……そうか」

それ以上、藍が聞いてくることはなかった。
それは、俺にとってはとても有り難いことだった。

「なぁ、何かしないか？」

俺はタイミングを見計らって、そんなことを言う。

「トランプでもするか？」

藍は意地の悪い顔で、微笑む。からかっているのだろう。

「人のトラウマを……」

不満な顔で返すと「ははっ」と笑われた。トラウマになっている、というのは本当だが……なんとなく、釣られて笑みを零す。

藍が笑うと、変な形の帽子が揺れた。
つくづく思っていたのだが、なんであんな変な形なのだろう。
東方キャラの帽子はどの画像なんかで見ても変な帽子を被っているやつが多かった気がする。
少し気になるが……「なんでその帽子変な形なの？」なんて非常識なことを訊ねるわけにもいかないので、胸の中に潜めて置く事にしよ

う。

疑問を振り払うため、帽子から視線を外して下を見ると、こんどは揺れる尻尾が目に入った。

「……ごくっ」

生唾を、飲み込む。

「どうした？生」

そんな俺に、藍が怪訝そうな瞳でこちらを見つめた。

「いや……怒らないか？」

「言わないと怒る」

なんとも、意地悪な返し方だ。

俺は少し考える素振りした後、観念したように項垂れ、口を開ける。

「その……お前の、藍の、尻尾さぁ……」

「尻尾がどうかしたのか？」

藍は不思議そうに自分の尻尾に目を向ける。が、特に異常はない。

「その、尻尾を、さぁ……」

「尻尾を？」

「尻尾を――もふもふさせてくれないか！」

「……は？」

藍が呆けたような声を出す。

「いやだから！もふもふさせてくれないか！その柔らかそうな、ふわふわな尻尾を！」

前々からずっと思っていたことだ。

この度、思い切ってしまった。

「いや、だがそれは……」

「頼む！一生のお願いだ！」

俺は土下座をして頼み込む。

「一生のお願い安すぎるだろ！絶対こんなところで使うものではない！」

「お願いします、藍様！」

「プライドというものはないのか!?」

「無い!!!」

「即答!?酷すぎる！」

そのくらいに触りたいんだ、撫でたいんだ、もふりたいんだよ！

「お願いだ！この通り！」

俺が何度も頭を下げていると、今度は藍が、諦めたように項垂れた。

「……顔を上げろ」

「もふらせてくれるまで上げない！」

「その……やらせてやるから、上げろと言ってるんだ」

「本当ですか！藍様！」

「その話し方止めろ、気持ち悪い」

罵られてしまった。生憎俺にマゾヒストの気はないので、言われたままに、止める事にしよう。

「あ、あんまり痛くするなよ？」

「勿論！丁寧に扱う！扱っちゃう！そ、それじゃいただきます！」

パンッ、と手を合わせ感謝の気持ちを表す。

藍は頬を朱に染めながら、尻尾をこちらに向ける。

俺はまず、優しく尻尾を撫でる。

「ひ、ひうっ」

「あ、悪い。強いか？」

「い、いや。ちょっと緊張してしまったいただけだ……別に、もっと強くても大丈夫だ」

「そ、そうか……じゃ、失礼して……」

今度は根元の方から、ゆっくりと撫でていく。

「ひゅっ、ひっ……ひゃぁん！」

藍がそんな声を上げると、なんとなく、気持ちが昂った。

少し調子に乗って、力を込める。

「きゃっ、ちょ、ちょっと生……」

「ご、ごめん」

藍の声を聞き、また力を弱め、撫でていく。

根元から、先端まで、しっかりと撫で回す。

「じゃ、じゃあ……揉むぞ？もふるぞ？」

「あ、あぁ……来い！」

もふっ、とても、柔らかかった。

その柔らかさは、まるで、親の母乳を飲んでいる時の赤ん坊の様な感覚にさせた。

その温かさは、まるで、母親のお腹の中にいるような、母性を、愛を感じさせた。

その感覚は、病み付きになるもので……俺はついつい、力を強めてしまう。

「しょ、生……きゃっ、つ、強いって……はぁん！」

俺は両手を使い、優しくもふもふしていく。
藍の声を、心地よいＢＧＭの様に思い、余計にヒートアップしていくのを感じる。
「うっ、ひゅぅん！きゃっ、あっ、あっ」
藍はもう、言葉を返すことも、きつそうなくらいになっていた。
だが、この機会に楽しまなければ、次がいつになるかは分からない。
一生のお願いに、土下座まで使ったんだ。とことんやってやる。
「あぁっ、生、生！強い、強い」
「両手をっ、使ってるからな！」
何故かこちらも、息が荒くなり、体が熱くなる。
「あっ、あっ生！生！」
「ど、どんどんいくぞ！藍！」
「ひゃあん！そんなに強くしたら、む、無理！」
息を荒げる。
手の力を強くし、全てを感じる為にスパートをかける。
「い、いくぞ、藍！」
「あ、あっ！む、無理！ひゃぅん！あ、あぁぁぁぁぁん!!!」
藍の叫びが、八雲家に響いた。

＊

「すいませんでしたー!!!!!」

本日二度目の、土下座。

俺の前では、藍が仁王立ちしている。

「た、確かに……私もいいとは言ったが」

「はい」

「だが、限度と、遠慮ってものが有る」

「仰るとおりでございます」

「強い、とも言ったが、止めなかったよな？」

「反論の余地もございません」

説教。

とことん説教。

確かに、あれはやりすぎた……反省しよう。

自分でも、普通からは逸脱した行為だと思う。

「分かったか？」

「はい」

聞いてなかったけど。

「反省は？」
「そりゃもう物凄くしてます」
「……後悔は」
「していない」
「ハァッ……とても素直だな」
だって、もふもふ出来たし、反省はしても後悔する要素なんて１ミクロンもない。
話が一通り終了し、また俺達は隣通しに座る。
だが、先程までとは違い、二人の間に微妙に気まずい雰囲気が流れる。
沈黙が俺と藍を蝕む。
それを破ったのは、藍だった。
「話、でもしようか」
「そ、そうだな」
その言葉は凄く曖昧なもので、何を話していいものか迷ってしまう。
「なぁ……？」
「どうした、藍？」

「今度は私が、聞いていいか？」
「お、おう！どんどん聞いてくれ！お詫びってわけじゃないが、俺に出来ることなら何でもするし！」
その言葉を聞いて、藍はふふっ、と微笑む。
そして、また少し沈黙の時間が流れ――タイミングを見計らい、藍がこちらを見る。
「なんだ？」
「生って、外来人なんだよね」
「んーまぁ、少し違うけど……そんなところだ」
「外って、どんな感じ？」
「どんな感じ、か……」
これはまた、曖昧で、難しい質問が来たもんだ。藍なりに空気を破ろうとしてくれたんだろうが、考えれば考える程、難しい。
俺は少し考えるように、顎に手を置く。
「……普通、かな」
「……その言葉、好きだなぁ」
「あぁ、大好きだ」

「でも、普通って、どういう意味だ？」

「だから、なんていうか普通なんだよ。弱い人もいれば、強い人もいる。金持ちがいれば、貧乏な人もいる。平和な所が有れば、殺伐とした所も有る。そんな感じ」

藍は、良く分からない。といった表情をする。そりゃそうだ。俺だって分からん。普通なんて基準や、思い込みや、設定でしかない。俺は自分が普通だと思い込んで、信じ込んでいるが、別に普通なわけではないだろう。俺が勝手に、そう言っているんだ。普通なんてそんなものだ。

「……楽しいところか？」

藍は突然聞いてくる。やっと出てきた言葉がそれ、か。だが、大事なことでもある。

「賑やかな、ところかな？」

楽しいとは、言えなかった。

楽しいと断言出来ないところが、俺の弱いところなんだろう。

外……いや、元の世界は争いが絶えない。

平和も絶えない。笑顔が絶えないが、涙も――絶えない。

それを考えると、幻想郷の方がいいのかも、なんて考えて、直ぐに浅はかな考えだと否定する。

「外は……人間だけなんだろ？」

「動物もいるが……人間と会話が成立するのは人間だけだな」

「それは……平和なのか？」

「知らん」

「知らん、か」

知るわけない。

幻想郷で、妖怪が人間一人喰らっている間に――

あっちでは、人間が人間一人殺しているんだ。

馬鹿みたいだな、と思った。

「馬鹿みたいに――」

「馬鹿みたいに、普通ね」

背後からの声。

誰と言わずも分かるだろう。この全てを見下し、悟り、愛したような――胡散臭い声。

「紫……帰ったのか」

「少し前にね」

「どこからだ？」

「貴方が藍の尻尾を触らせてくれと土下座してるところから」

ほぼ、最初からじゃねぇか。

「駄目よぉ？人の式神に――私の藍に手を出しちゃ」

紫は悪戯っぽく微笑むと、藍の隣に座り、尻尾を撫でる。

「ひぅっ！ゆ、紫様？」

「あら？私には触らせてくれないの？」

わざとらしく、哀しげな雰囲気を出す紫。
藍は「い、いえ」と言って尻尾を差し出す。
紫はとても嬉しそうに、尻尾を揉んでいた。

微笑ましいな、と思った。
とてもとてもとても。
平和だと感じた。

少なくとも今は。
少なくとも俺は。

「馬鹿みたいに――普通だねぇ」

そう呟いて、とても晴れ晴れとした空を見上げた。

今日も幻想郷は異常だらけに異常なしの様だ。大丈夫では――ないんだろうが。

日常……だよね？そうだよね？

「刺激が――足りないわ」

昼食を食べ終わり、皿洗いをしている時の事だった。

「……またか」

俺は皿を洗う手を止めずに、足をバタバタと子供の様に揺らす紫を横目で一瞥した。

「トランプはやらないぞ」

紫が言い出す前に釘を刺す。

高がトランプに負けた程度で、何をいつまでも引き摺っているのだと思うかもしれない。というか、思うだろう。

だが、考えてみてくれ。

初めてトランプをやる相手に、トランプは慣れている自分が相手をし、２４１回も敗北した。という事実が、どれだけ重いことかということを。

……な、悔しいだろ？リベンジする気も失せるくらいに。

「トランプはもう飽きたわ」

ああそうかい。

「刺激、ねぇ……」

洗い終わった皿をしまい、手をゆっくりと拭いてから、紫の方へ向

きなおす。
因みに、藍は今ここにはいない。今の時間だったら、この家の掃除をしている頃だろう。
「どっか行って来れば？」
息を漏らしながら、紫の前に座り提案する。
「どこへ？」
「知るか」
考える気もない。何故他人が刺激を求める為に出かける場所を、俺が決めなくてはならんのだ。
「無責任ねぇ」
「無責任だろうが無根拠だろうが構わん」
というか、俺は別に悪くないよな？
「生の能力で何か出来ないの？」
無茶言ってんじゃねぇ。俺の能力は暇潰し用じゃないんだ。
「普通に生きるのに、普通以外いらないんだよ」
「でも、刺激が何も無いところで、ただ平凡に生きるなんて、虚しいだけでしょう？」
中々に、真理を突いたことを言ってきやがる。成程、これが年の

功ってやつか。

「いいんだよ、普通なら普通で。普通という刺激が有るだろ？」

平凡は、退屈ではない。
日常は、無ではない。
だからこそ、普通が一番なんだ。

「つまらないわねぇ……」

「畳の目でも数えてろ」

冗談の様にそう言うと、紫は本当に数え始める。
俺は驚き半分呆れ半分といった表情になり、ボーッ、と空を見上げる。

「飽きたわ」

「いくつまで数えた？」

「１６」

「どういうことだ」

飽き性でも面倒臭がりでも、もうちょっと数えるぞ。まぁ、数えないのが一番普通なんだが。

「他は？」

「他？……素数でも数えてろ」

ぶっきらぼうにそう言って、俺はお茶を淹れに行く。

少しして、渋いお茶を片手に戻ってくると同時に、紫が俺を睨む。

「飽きたわ」

「……いくつまで数えた？」

「13」

「6桁目じゃねぇか」

もっと頑張れよ大妖怪。

「他には？」

「もう無い、勝手にしてくれ」

俺は、不満そうな紫の視線を無視して座り、お茶を啜る。

何故、平和な日常の中、空を見ながら飲むお茶というのは、ここまで美味しく感じるのだろうか？

恐らく、雰囲気的なものだろう。祭りで食べるわたがしや、海の家の焼きそばと同じである。

お茶の湯気をまたボーッ、と眺めていると、黙っていた紫が唐突に口を開ける。

「刺激が足りないわ」

「……」

無視。

こういう面倒な奴は無視に限る。

「生、おっさん臭いわよ？」

「お前には言われ――何でもありません」

少女的な見た目に反した大妖怪の怖すぎる笑みに、俺は言葉を改める。

「そんなに、刺激が欲しいのか？」

「欲しいんじゃないの。求めてるのよ」

あっそ。

「あー、霊夢のところにでも行ったらどうだ？」

投げやりに、紫の友人であろう人物の名を上げる。

「れいむ……？」

だが、紫はまるでそんな名は初めて聞いた、とでもいうように首を傾げる。

あ、やば！霊夢はまだいないんだったか！

大分前、ランジェに聞いた言葉を思い出し、自分の失言を後悔する。

「ねぇ生。霊夢って「何でもない。怪電波を拾っただけだ。気にするな」……そう？」

あ、危なかった……これからは、軽率な発言は控えなければいけな

いな。まぁ、実際問題バレたらどうなる、とかは無いと思うが。

「まぁ、生が怪電波を拾うのはいつものことね」

「おい待て。お前の中で俺はどんなキャラ設定にされているんだ？」

俺がジト目で紫を睨む。紫はホホ、と優雅に笑い扇子で口元を隠す。クソッ……かわされた。

「……ハァッ」

俺は諦めたように溜息を吐くと、いつの間にか空になった湯呑を卓袱台に置き、立ち上がる。

「生？」

紫が怪訝そうな瞳で俺を見る。

「じゃ、何か――するか！」

＊

＊ここからは、天の声がお届けします＊

「と、いう訳で」

辺り一面、鬱蒼と生い茂るここは――『魔法の森』である。

そこに生達はいた。

「どういう訳？」

紫の無粋な突っ込みを無視して、生は手を広げる。

「第一回！チキチキきのこ狩り大会ー!!」

ドンドンパフパフ、なんて陽気な効果音が欲しくなる勢いで叫ぶ。

「きのこ狩り？」

「ルールは簡単！俺と紫で別々に、今夜の晩飯のおかず『きのこ』を採るだけ！採ったきのこ一つ、一ポイント！実際食べてみて美味しかったら、更にプラスポイント！毒きのこを採ってきてしまった場合はマイナスポイントだー!!!」

「美味しかったらって……誰がどうやって判断するのよ」

まぁ、当然の疑問だ。だが、生は怪しくニヤリ、と微笑を浮べる。こいつ、絶対普通じゃない。

「そこは、きのこ評論家として名高い、私八雲藍が勤めさせていただきます！」

どこからともなく現れた藍が手を上げ説明する。

「いつから私の式神はきのこ評論家になったの!?」

「いやぁ、藍さん。今日は忙しい中、有難うございます！」

「いえいえ、そこにきのこが有れば――どこへでも、ね」

「なんか良く分からないけど格好良いわ、藍！」

「美味しいきのこ、バンバン採ってきますので！」

「実はそんなにきのこ好きじゃない」

「きのこ評論家として最悪のカミングアウトしてるわよ⁉さっきの発言台無し！」

「成程、『きのことは、愛』ですか！深いお言葉、有難うございます！」

「えぇ⁉そんなこと微塵も言ってなかったけど⁉」

「紫さんも、やる気まんまんまんのすけ、ってことで！」

「今の発言のどこからやる気を感じ取ったの⁉後、ギャグが異様に寒いわ！」

「あぁ……？ギャグが寒い、だと？」

「そこに怒るの⁉絶対今のスルーするところ！」

「……ハァッ。全く、我儘も程々にしてくださいよ、紫さん……貴女も、大人でしょう？」

「私の今までの突っ込みに、そこまで言われる程の悪いところ有ったかしら⁉」

「誰が、平成の親父ギャグ製造マシーンだ!!!」

「そんなこと言ってない！」

「有難うございます」

「え!?褒め言葉として捉えてたの？『平成の親父ギャグ製造マシーン』、貴方にとっての褒め言葉なの!?」

「焼肉食べたい」

「ちょっと！きのこ評論家のやる気が皆無なんだけど！というか、せめてきのこ食べたいって言いなさいよ！」

「いや、きのこと焼肉だったら……ねぇ？」

「『ねぇ？』じゃないでしょ！というか藍？キャラが完全崩壊してるけど!?」

「『きのことは、人生』ですか。深い言葉です」

「だから言ってないって！」

「頑張ってくださーい」

「もう評論家、完全に投げやり状態！」

「ではでは、位置について、よーい――」

「え、始めるの？こんなグダグダ状態で？」

「よーい――きのこ!!!」

「語呂悪っ！」

かくして、第一回チキチキきのこ狩り大会は、幕を開けたのだった。

「あぁ、もういいわ！とりあえずきのこを……」

紫は辺りを見回す。すると、視界に入ったのは見るからに毒々しい、色鮮やかなきのこ。

「あ、ラッキー！綺麗なきのこ発見！さっそく持っていきましょう！」

だが、常識が乏しい紫は、まるで気にせずきのこを採取。

『色鮮やかなきのこ』を手に入れた！

どこかで、ファンファーレが鳴った気がした。

「ん？あれは……」

次に紫が見つけたのは、茶色い傘のきのこ――松茸だった。

貴重な松茸を、こんなに簡単に見つけられたのは、紫の大妖怪としての、桁外れの運の良さだろう。

紫は、松茸を手に取り、暫し凝視してから……

「あんまり美味しそうじゃないわね」

ポイッ、と投げ捨ててしまった。おいおい。もったいないってレベルじゃねーぞ！

「おい紫、それ松茸じゃないか？」

そこにやってきたのは、自称常識的な少年。日常生だった。
そうだ、読者も忘れているかも知れないが、これは生と紫の勝負なのだ。当然、生もきのこ狩りをしている。

「まつ……たけ？」

「超貴重なきのこ。人によるけど、物凄く旨い」

「本当!?じゃ、採取しとかなきゃ！」

紫は掌を返したようにバッ、と先程自らが投げ捨てたきのこを拾い、頬ずりをする。正直気持ち悪い。

「後、お前がさっき採った色鮮やかなきのこ、あれ毒きのこだぞ？」

生が紫の籠の中に有る禍々しいきのこを指差しながら言う。紫は慌ててそれを捨てる。勝負といっても、どうやら生に勝つ気は無いようだ。

「ふふっ、甘いわね生！敵に情けをかけるなんて！」

尤も、紫の方は勝負に勝つ気満々らしいが。

「あ、おい！ちょっと待て！」

颯爽と立ち去ろうとする紫を生が静止する。

「何？命乞い？」

命をかけたきのこ狩りってなんだ。

「命をかけたきのこ狩りってなんだ」

しまった、生と被ってしまった。

「お前、何かほっとくと毒きのこばっか採りそうだからな……これ、使え」

生は何も無い掌を差し出す。

「……って何も無いじゃない！」

「『普通』きのこ狩りにはこれが付き物だ」

生がそう呟くと、生の掌の上に、一冊の本が現れる。

本の表紙には大きな文字で、『写真付き　きのこ大百科』と書かれていた。

「いいの？」

「おうよ！」

生は無理矢理に大百科を紫に渡す。紳士的というよりは、これが当然の行動だ。

「勝負っていうか、とりあえず、刺激的に、そして飽くまで普通に、楽しもうぜ？」

飽くまで普通に、という文の必要性は有るのだろうか。恐らく、ない。

紫は大百科を受け取り、ふふっ、と笑い声を零す。

「そうね……楽しみましょう？」

二人、微笑みあう。性格には一人と一妖か？

ここがもっと雰囲気なある場所だったら良かったかもしれないが、如何せん、ここは怪しげな匂いがプンプンするような森の中である。

「じゃ、俺はあっち探すよ」

「じゃあ、私はあっちを」

二人は別々に歩いていく。紫は、戦意こそ喪失しているようだが、その分、楽しもうという気持ちで埋め尽くされたのか、満足そうな顔をしていた。

＊

夕焼けが眩しい。

一体どれだけの間、きのこ狩りをしていただろう。

「ん？あれは……」

森の中、延々と待たされていた、自称きのこ評論家、八雲藍が見る森の先には、人影。

「藍！お待たせ！」

籠一杯のきのこを持った、紫がいた。

「そろそろ、時間でしょう？」

「えぇ……それにしても、よくこんなに採りましたね」

暫くはきのこオンパレードのご飯だろうなぁ……などと考え、藍は苦笑しながら紫を見る。

紫はまるで子供のように胸張っていた。その姿に、思わず藍は微笑んでしまう。

そこで、タイマーが鳴り響いた。この第一回チキチキきのこ狩り大会、終了の合図である。

森中全てに響くのではないかという程の大きな音だった。

普通なら、妖怪が気づくかも知れないが……ここにいるのは大妖怪、八雲紫である。そうそう近づく馬鹿な者もいない。

「そろそろ生も戻ってくるかしら？」

「そうですね……待ちましょうか」

二人はボーッ、と、今日の献立の想像をしながら生を待つ。美味しそうなきのこ料理を思い、思わず、唾を飲み込んでしまう。

「食べすぎちゃいそうねぇ……」

「食べ過ぎて、お腹壊したりしないでくださいよ？」

「大丈夫よぉ――」

一方その頃、生はというと――――

「……迷った」

とても大丈夫な状況では――なかった。

人は常に迷ってるよ……人生という道に、な

ここは、『魔法の森』

鬱蒼とした森からは、人の気配どころか、モノの気配すら感じさせない。

見えないが、感覚でハッキリと分かる、禍々しく、怪しい雰囲気……

これが、瘴気というものだろう。

まるで、全てを喰らわんとする様な瘴気に、俺は身震いする。

今はまだいいが……暫くすれば、瘴気が体に充満し、正気を失うだろう。因みに今のは洒落である。

そんな深い、深い森の中心に俺はいた。

「どこだよ、ここ……」

意図してここにいるわけではない。

意図せずにここで、迷っていた。

何故だ――

どうして、こんなことに――

戻ったら紫に散々文句を言ってやろうと思った。

だからこそ、こんなところで力尽きるわけにはいかない。

俺は、生き延びなければならない。

一度捨てた命を、再度手に入れるなどということは、本来、生への侮辱でしかない。

俺は今、全ての命を、生を、侮辱しながら生きているのである。

まだ、手に入れてから一ヶ月すら経過していない人生。

手放すわけにはいかない。そう決意し、俺は深い森をただ歩いた。

「あれ？ここさっきも通ったような……」

森というのは、余り景色が変化しないのが普通だ。

ここが普通の森ではなく、魔法の森であったとしても、その最低限の森としての常識はあるようだ。

自分がどこにいるのか分からない――

同じところで、足踏みをしているだけのような錯覚に陥る。

そんな筈はない。確かに進んでいる筈だ。それは分かっている。理解しているのだが……

焦っているのかもしれない。

こういった時に、最も恐れなくてはならないのは、冷静さや、判断力の欠如である。

分からなければ、考えればいいのだ。それが普通の発想というものだ。

だが、そんな普通を、除外してしまう。恐怖から、焦りから、淋しさから……

それは、駄目だ。飽くまで普通にいろ。常識を信じろ。平凡に向かえ。

大丈夫だ、紫達も、俺がいつまでも戻ってこなければ、何か有ったのではと思うだろう。

あいつらなら、俺をきっと見つけてくれる。

だからそれまで俺がすべき事は――

「絶対的に死なないことだ」

生きるとは、随分と大変なことかもしれない。
だが死なないのは、案外簡単で単純なものだ。
生きるためには、生きなければならない。
だが、死にたくなければ、死ななければいいのだ。
どんなに逃げ惑おうが、無様になろうが、不必要なことをしようが、嘘を吐こうが――

死ななければ、安いものだ。

「飽くまで普通に」

深呼吸をする。
空気を吸うという行為が、こんなに気持ちの良いものだと感じれたのは、恐らく、この危機的状況を味わえたお蔭だ。
どんなに非凡で、現実離れした状況でも、心はいつでも平凡に。
それさえ忘れなければ、それから逃げなければ、大丈夫だ。

「まずは……森からの脱出が先決だな」

紫達と、いつ遭遇出来るかは分からない。
もう少し待てば遭遇出来るならいい。が、確信が持てない以上、こんな瘴気に塗れた空間にいるのは大変危険である。
闇雲に歩くのが危険ではないのか、といえば嘘になるが……ここでじっとしているよりは、幾分マシである。
俺はとりあえず、歩くという選択を選ぶことにした。
もう、空も暗くなってきたな……

＊

「ハァッ……」

溜息を吐くと、人の幸せというのは何故だか逃げていくらしい。
幸福というモノは、溜息が大嫌いなのだろう。というか、今なんとなく思ったが、このルール妖怪にも適用されるものなのだろうか？

「行けども行けども森ばかり……」

当然である、まだ森の中なんだから。
そんな暢気なことを考えながらも俺は随分と焦っているのだ。
だって、息苦しい。気持ちが悪い。
もう長い間この状態だ。冷や汗は頬をつたり、苔の生えた地面に落ちる。
本気で、ヤバイかも。そう思った。
ここは普通の一般的男子高校生が、居ていい場所ではない。

「月が綺麗だな……」

暢気過ぎるだろ！という突っ込みは分かる。すまない、ただの現実逃避だ。もう諦めたくなってきた。
もう、死のうかな。死んで閻魔様にでも逢ってこようかな……
ああいかん、完全なマイナス思考になっている。
駄目だ駄目だ、紫達なら、きっと助けに来てくれる。それまで、精神が持ちますように……

＊

「――紫様、やはりおかしいです」

私は八雲紫。周りにはスキマ妖怪と呼ばれたりしている。
私は今、式神である藍と共に、『魔法の森』という場所にいる。
普段なら、こんなところに用事はないし、藍といる理由も無い。
だけど今日は、同居人の日常生の要望で、ここにいる。

生の要望というか……私の我儘なのだけれど。
私の暇潰しを求める要望に対し、生が『きのこ狩り』という案を出したのだ。
初めは余り乗気ではなかったけれど……
やってみると、中々楽しかった。
私は、満足していた。だから生にお礼を言おうと思っていたのだけれど……

「そうね、余りにも……遅すぎる」

肝心の生が帰ってこない。
偶然などと言うには……時間が掛かりすぎている。

「もしや、何か有ったのでは……」

その可能性は十二分に有る。
この魔法の森にも、少なからず妖怪がいる。
私も細心の注意をしていたけれど……
私の妖気を捉えぬ、身の程知らずな者がいる可能性も零(ゼロ)ではない。

「紫様」

藍が焦ったように私に声をかける。

そうだ、暢気に考案なんてしている場合ではない。
私は、手を翳し、瞬時にスキマを――
「――!?」
驚愕する。
「ど、どうしたのですか？紫様」
藍が心配したような声をかけてくる。
「開かないの……」
「え？」
「スキマが、開かない……！」
スキマが開かなかった。
「え!?それでは帰ることすら――」
「違うわ」
スキマが開けなくなった。というのは少し違った。
「生のところへだけ、スキマが開かないの……」
それどころか。
「生がどこにいるのか、それを探知することさえ――出来ない」

初めての、ことだった。私は完全に驚愕していた。

「生に能力が通じない――!?」

それは、紛れもない、最強の能力を持ってしても分からない――

現実だった。

＊

「ハァッ……クッ」

体が、とてつもなく重い。

早く、早く、早く――

最早、助けを待つなどという、悠長な選択肢は完全に除外された。

一刻も早く、森から出なくてはならない……

重い現実。

受け止められるかではなく、受け止めなければならない状況だった――

「寒い……」

確かに、風は冷たいものだが……この寒さは、そんなものではない。

紛れもない、悪寒。

それは、体が衰弱していっているということを、分からせた。

疲れは能力で除外している為、感じることはない。

悪寒も取り除きたいのは山々だが、瘴気というのは自然現象的な『普通』であり、この悪寒も、それから来た普通のことなのだ。

俺の能力は、普通にし、普通から逃げさせない能力ではあるが……

普通を操り、普通を拒む能力ではない。
依って、疲れ以外を取ることは出来ていなかった。

呼吸が、荒くなる。
深呼吸を歩きながら繰り返した。
大丈夫だ、冷静に、平静に。

どれだけ、歩いただろう。
もう限界点を突破したのか、不思議とさっきよりも楽な気がする。
だがそれは、どう考えても良いものではなく、寧ろ根性だけで歩いているような状態――つまり、やばいです。

ただ右足と左足を交互に出すだけの、簡単な作業を続けていると、不意にどこからともなく、音が聞こえた。
風の音や、葉の擦れる音といった、自然の音ではない。

明らかに人為的というか……これは……

「足音!?」

足音。つまり近くに人がいるという事。
ここでその人を逃がせば、俺の二度目の人生はゲームーオーバー確定。
俺は考えるより早く、その足音のする方に向かった。

「いた……!」

視界に入ったのは、独りの少女。
とても綺麗な紅のリボンで、金髪を結び、服装はまるで闇に紛れるかのような黒。

「……ん？」

見覚えがあった。

逢った覚えはない、が――見覚えはあった。

前の世界ならば、転生なんてことをしていなければ、偶然だと思ったであろう。単純な思考。

だが俺には、偶然だとは思えない根拠を持っていた。

幻想郷という、根拠を。

俺は反射的に、頭に浮かんだ言葉を発する。

「――ルーミア!!!」

少し掠れた声だった。体調の不具合が、声に混じれていた。

数拍の間……沈黙が、二人の間を駆け抜けた。

沈黙を破ったのは――

「……ん？」

少女、ルーミアだった。

「私のこと、呼んだかしら？」

ルーミア。

俺の知る、東方Ｐｒｏｊｅｃｔのキャラクターの一人。いや妖怪だが。

「そーなのかー」と、良く言っていた気がした。良く笑うような、元気な妖怪少女、というイメージだった。

俺のイメージが正しいのか、正しくないのかは分からない、が。一つだけ、確信を持って言える、とても大事なことが有る。

「貴方は――」

ルーミアは――

「貴方は、食べてもいい人類？」

人を喰う。

危ない。普通たる俺すら、直感で分かる。そのくらいの殺気。大きな殺気か、小さな殺気か……言わなくても分かるよな？

普段の俺なら、恐怖で失神してしまってもおかしくはないかもしれない――

だが。

「今の俺は、死ぬことは出来ない……」

そう決めたのだ。諦めかけていたが。

「何か言ったかしら？」

ルーミアが、首を傾げる。

俺はルーミアの目をじっと見てから、スゥッと息を吸って……

「いえ、何も言っていませよ」

と言って、わざとらしく肩を竦めた。

「そう――で、食べてもいいの？」

ルーミアは目を細めた。

その姿は、仇気ない子供そのものだが、その表情は獲物に狙いを定めた、獣の様に感じた。

「いやぁ、困りましたねぇ」

死ななければいい。

俺が今すべきはただ、それだけである。

俺は体をスッ、と立たせ、口端を吊り上げた。

大丈夫だ、飽くまで普通に――そう思って。

# 死亡フラグとは普通なのか？

深い森の奥――

「いやぁ困りましたねぇ」

森の中、人喰いと対峙しながら、俺は笑っていた。

「お腹が、空いていらっしゃるのですか？」

俺はまた、わざとらしく訊ねた。

「えぇ、とってもね……もう面倒だから、食べてもいい？」

子供が夕食の味見をしてもいいか、親に訊ねる。

彼女からしたら、それと何ら変わらない行為なのだろう。

俺の背筋に冷や汗が垂れた。

それは、体調的なものと、精神的なもの。どちらもの所為だ。

要するに俺は今、身体と精神のWパンチを喰らっている様なもの――それと同義である。あぁ、なんという非情。

「お腹が空いていらっしゃるというのならば……自らを捧げたいのは山々というか、直ぐにでもそうしたいのですが……」

「あらそう？じゃあまず右腕からね？」

怖い怖い怖い。雰囲気が怖過ぎる！

というか、俺が知る「なのかー」口調のルーミアは何処へ!?「そーなのかー」とか、一回も言ってくれないじゃん！どういうことだよ！

「いえいえ、そうしたいのですが――」

俺は眼前に手を翳す。そしてそのまま「やれやれ困った」といったような、芝居がかった動き。

「それをしてしまうと、貴女が困ってしまう」

「私が困る？寧ろ私は喜ぶのだけれど？」

当然の反応だ。

「唐突ですがルーミアさん……境界、ってご存知ですか？」

俺は手でチャックを開けるような、何かを開くような動きをしながら、ルーミアに問う。

「境界って……境界？」

「そう『境界』です」

「言葉は分かるわよ」

ルーミアは、だからどうした、といった表情だ。妖怪でも、反応は人間と変わらないな。

「境界とは実に曖昧で恐ろしいものですよねぇ……」

「そーかもねー」

おしい、ちょっと違う。

「そんな境界を操れるなら、実に愉快なことでしょう。ですがそんなことは……おや、一人だけいました」

ここまで言えば、いくら察しが悪くても気づくだろう。

「八雲紫のことね？」

「おぉそうでした！私の『友人』の紫さん」

友人をわざと強調しながら言う。

その言葉を聞き逃さなかった、ルーミアが質問してくる。

「友人？貴方、八雲紫と知り合いなの？」

「えぇ、そうなんですよ。彼女とは昔からの結構な仲でしてねぇ」

約一週間程の昔からな。

「今でも俺が呼べば、来てくれるくらいにはねぇ」

嘘だ。そんなことが出来たなら、すぐに帰っている。

「……え!?」

ルーミアが、表情を歪ませる。

「もし俺に何かあれば、駆けつけてくれるかもしれません」

「八雲紫が、駆けつけて……？」

ルーミアの表情は、困惑や疑念が入り混じったものだ。

まぁ普通に考えて、極平凡な人間である俺と、大妖怪が友人なんてことを信じろと言われ、信じるかというと否である。

「えぇ。ですから、貴女には考えて頂きたいです。よく、ね」

俺はルーミアを指差しながら言う。自分のことながら、よくペラペラと言葉が出てくるものだ。

「……」

「沈黙は反抗と見なしますが？」

「！……どうせ、ハッタリだわ」

うんうん、当たってる当たってる。

「貴女がそう思うならそうなんだろう、貴女ん中ではね」

居心地の悪い沈黙が俺とルーミアを包む。

あーヤバイ。何がヤバイって、主に体調的にヤバイ。

「これは――忠告なんですよ？」

「忠告？」

「そう、貴女への最後の忠告」

選択肢は二択なのだ。後は決めるだけ。

ゲームのように待っていれば、時間で正解の選択肢が出てくるなんてことは、ない。

「あんまり、嘗めないで」

「いえいえ、嘗めているなんて。そんな」

俺は飽くまで道化を演じる。

今は、相手から疑念を取り払うなんて無謀なことを考える時ではない。

自身の、態度で、不安を作れ。

「まぁ、じっくり決めてください。最後なんですからね」

俺はそう呟いて、姿勢を崩す。

「そういう態度が嘗めてるっていうの！」

姿勢を崩した隙をルーミアが一気に俺に詰め寄る。

ハァッ……結局そういう選択か。

俺はスッ、と左手を掲げる。

そのまま不敵に笑顔を作る。

「この指を俺が鳴らした瞬間。八雲紫が現れる」

「――!?」

俺の眼前でルーミアが止まる。

その間は、僅か数センチ。状況が状況なら、とてもドキドキする距離だが、今はそういう雰囲気ではない。

「おや？止まるんですか？まぁこちらとしてはどうでもいいのですが」

神経を逆撫でするように言う。

「どうしますか？」

「……戯言ね」

皮肉っぽく言い放つルーミア。

声色や表情から察するに、俺の言葉にはまだ半信半疑といったところか。

「いいですよ」

「え？」

「いいですよ。貴女が戯言と、ハッタリと、嘘と認識しようが――俺は嘘などいっていない。そう断言するだけですから。自信を持ってね」

俺は自信まんまんまんのすけ、という表情でルーミアに目を向ける。

「最期の忠告です」

最期の忠告。

「『最後』ではなく、『最期』」

「……！」

「俺を――喰らいますか？」

重みの有る、低い声で告げる。
『最期』の忠告。
実に意地悪な言葉である。
俺は今、選べといっているのだ。
『死ぬ』か『生きる』か。
普通に考えれば、五分五分か。
俺が紫を呼べるか、呼べないか。結論的には呼べないのだが。
甘めに、贔屓目に、偶然も考慮しながら、ルーミアが紫に勝てる確立を、可能性を考える。
これは、限りなく0に近い。
俺が紫を呼べた場合、俺が賭けに勝利した場合、ルーミアは命を失う。
何よりも重い結果だ。
では、ルーミアが賭けに勝利した場合は？俺が嘘を吐いていた場合。
ルーミアが獲られるものは、一人の人間。食料でしかない人間。それだけなのだ。
簡単に言えば、『晩飯を我慢』するか、『死ぬ』か選べ。である。
そんな選択肢を突きつけられた者は、どちらを選ぶ？
賭けに出る者も、勿論いるだろう。
根拠が有る者と、馬鹿である。
ルーミアが俺を睨む。
俺は覇気も邪気もない、嘘偽りのない笑顔をルーミアへ向ける。
実際的には、俺が紫を呼べるかと言われると、呼べないであると考

えるものだ。
だが、０じゃない。
もし呼べたら、そう考えれば、考えてしまえば、根拠がなければ、自信に騙されれば――
――次の台詞は、決まる。
「私は……」
「貴女は？」
「――諦めるわ」
それは極普通の、当たり前過ぎる判断だ。
「頭のいい人で、よかったですよ」
知能がなければ、話し合いなんて出来なかったし。
知能を使いこなせていない⑨なら、こうはいかなかった。
馬鹿は深追いするから後悔をする。
ルーミアは、遠くに逃げすぎた獲物を諦めることが出来るようでよかった。
「あんなに自信有り気な顔を見せられれば、信じざるを得ない」
「えぇ、信じてください。これでも俺は嘘を吐いたことがないんです」
その台詞が嘘だ。
人は生きていれば必ず嘘を吐く生き物である。それは普通のことだ。

一生、嘘を吐かない人間がいるとするならそれは――ただの化物だ。

だが俺にはまだ問題が残っている、体調的に考えて。

「あぁ！困った！」

「!?」

「あぁ、どうしよう……」

「ど、どうした？」

「あぁ！聞いてくださいルーミアさん！俺今、この森から出たいんですよ！」

「そーなのかー」

「！ル、ルーミアさん！」

「え？」

「今の台詞もう一回言ってくれません？」

「え？そ、そーなのかー」

静かな森に、機械独特のイントネーションで『録音しました』という音が響く。

「録音!?」

「うわっ、感激！着信音にしよう、誰からもかかってこないけど」

俺はケータイを握り締める。

何故ケータイを持っているのかという突っ込みは、携帯だから携帯している。と答えよう。誰からもかかってこないけど、なんとなく携帯しておくと落ち着く。え？よく分からない？貴方も転生したら分かるさ。

「あ、すいません」

「い、いや」

「で、困ってるんですよ！誰か優しい人が案内してくれないかなぁ？人じゃなくてもいいんだけど！」

「じゃ、私はこの辺で……」

「そんな優しい人が、いたら『友人』に話そう！きっとそんな人はあいつも気に入るよね！」

また、友人を強調する。

「……！」

「あーでも、そんな優しい人はいないかぁ……」

わざとらしい落胆。胡散臭い胡散臭い。紫のが移ったか？

「八雲紫に恩が売れるなら……」

「え？何か言いましたか、ルーミアさん」

「……私が、案内するわ」
「え、本当ですか！」
「えぇ、気前がいいのよ、これでもね」
「それは、有難いです」
「……貴方、八雲紫と結構な仲というのは本当なんでしょう？」
「えぇ、彼女には良くしてもらっています」
「そう。いいわ……行きましょう」
「有難うございます！お礼もキチンと用意しますので」
「楽しみにしてる」
結構素直だな。
「ではでは、行きましょう」
俺とルーミアはゆっくり歩き始めた。
あ、もうちょっと速く歩いてくれないかな、ちょっと気分が……

＊

「――着いた」

歩くこと――

「3分!?」

徒歩3分。カップラーメンが作れる時間である。3分と聞いてカップラーメンを想像してしまうのは、日本人としての性か……5分待つものも有るが。

「で」

「で？」

「お礼は？」

直球ドストレート。

あーそういえば言いましたねそんなこと。

「おやおや、ルーミアさん。確かに俺はお礼を『用意する』とは言いましたが、お礼を『する』なんて一言も言っていませんよ？それに、お礼をいつ用意するかも指定はしていません」

二年後か、三年後か……はたまた十年後か。用意すれば、嘘は吐いていない。

ルーミアは口を開けて呆然としている。俺悪いこと言ったか？まぁいいが。

「ハァッ……もういい」

まぁ、今日のことは家に帰って、きちんと紫に話すことにしよう。
夕飯時にでも……ん？
「家？」
「どうしたの？」
「家？家家家……」
んー。なんか違和感が……
「あー!!!家！」
「どっ、どうした」
「あれ、まだいたの」
「酷い言い様!?」
「いやね、何でもないんですけど……」
紫が来ない。何故来ないんだ？スキマ使えよ……何か有ったのか？
確認したい、が。する方法がない。
ということはとりあえず、今日は帰れないことを考えなければいかん。
まだ完全に体調が治ったわけじゃない。そんなわけないが……
「野宿は覚悟か……」

「ねぇ、どうしたの？」

「あぁ、もう用ないから、帰っていいよ」

「いくらなんでも！……あぁ、もういいや。じゃ私はもう行くから……」

「んじゃー」

軽く手を振る。敬語？今そんな場合じゃないよ。

「バイバーイ」

あー、どうするかなぁ？人里とか行けば宿が……金がない。そもそも人里ってどこだよ。

「んー……あぁ！」

俺は唐突に有ることを思い、ルーミアを追いかける。

「おーいルーミアさん！」

「んー？」

運良く、遠くには行っていなかった。飛んだりしてなくてよかった。

「やっぱり、感謝を示したいから、お礼渡しますよ」

「ん？なに？」

俺は徐にルーミアの手を取る。

そして、ギュッ、と握手をした。

妖怪とは言うが、体温は極普通のものだった。

「……なに？」

「俺と仲良くなる権利をあげます！」

「え？」

「だから俺と仲良くしてください」

「押し付けじゃない！」

「いいじゃないですか。別に悪い話ではないでしょう？」

「そうだけど……」

おー戸惑ってる戸惑ってる。反撃が来ないと分かっている相手を弄ぶのはとても楽しいものだが、今は止めて置こう。

「じゃ、決まりな！敬語もめんど……堅苦しいからやめる！」

「今、面倒って言わなかった？」

「言ってない言ってない」

言いかけたけど。

「まぁ、分かった。それじゃ……」

ルーミアは疲れたように去ろうとする。

「ちょい待ち！」

「今度はなに？」

「友達の誼で――この辺の建物とか人がいるところ教えてくれ！」

＊

「ここか……」

ルーミアに連れてきてもらったところは、先程の場所から徒歩１分。カップラーメンで例えると、硬い。

そこは、雑貨屋か古道具屋のような雰囲気の店だった。確かにここなら人がいそうだ。

看板のようなものを見ると、そこに書かれていた文字は。

「香霖堂……？」

どこかで聞いたことがある名前だと思った。

いるのは普通の人だよな？大丈夫だよな？

アイテムゲット！君の心もゲットだぜ！

「香霖堂……？」

それは、森の入口に、ひっそりと建っていた――

こんな所に、態々来る物好きはいるのだろうか？いや、幻想郷の住人の価値観は俺が思う一般的価値観ではないかもしれないので、一概にどうだ、とは言えないが。

俺がここに来た理由は一つ。寝床を調達する為だ。

野宿するのは最終手段。紫が来るのを信じて、人がいそうな場所で泊めてもらおうって魂胆だ。

「それはいいが、本当に中に人がいるのか？」

外から見える明かりは、点いているのか、いないのか。それすらも微妙なくらいしか漏れておらず、辺りの静けさが、何故か店を不気味に見せる。

中にいるのが、人ならざるもの……なんてオチは、求めてないぞ？

「と、とりあえず……」

俺は古風な扉に手を掛ける。

店だよね？勝手に入っても大丈夫だよね？

「すみませーん」

返事がない。ただの留守中のようだ。

「って、凄い散らかりようだな……」

本やら家具やら、なんでも揃っている。これ全て売り物だろうか？
用途の分からない奇妙な道具をぐるっと見回す。

「ん、これは……？」

俺は一つのものに目を止める。

「パソコン!?」

なんでそんなもんが幻想郷に!?

「あれ？これは……同人誌にブルマ!?……ってこれは、せが○いじり!?」

同人誌とブルマも気になるが、何故せがれい○りが……プレ○テは!!……ないじゃないか!!どういうことだよ！

「まぁ有っても出来ないしな……それより、何故こんなものが有るんだ？」

呟いた瞬間、不意に背後から気配を感じた。

「――誰だ！」

「誰って……香霖堂の、店主だけど？」

「へ？」

変な声が出てしまった。

というか、店主？人の気配は感じなかったけど……

「ん？……アッー!!!」

俺の目の前にいたのは、眼鏡を掛けた銀か白のような髪色の若い男性――

「か、数少ない男性キャラ！」

「……？」

変なものを見る目で見られた。酷い。

だが、俺はそんなことは気にしなかった。何故ならそのキャラ、今俺の目の前にいるこの男性の名前を思い出すことに必死だったからだ。

「えっと、確か、こ、こーりん！……さん？」

「僕は森近霖之助だけど？」

「にょろ？」

また変な声が……っておい待てちょっと待て。今のは変な声ってレベルじゃなかったぞ。

「あ、あぁ……森近、さんでしたか。すいません知り合いと似ていたもので……」

嘘じゃない、嘘じゃないぞ。

画面の中で知り合ったんだよ。その時とちょっと雰囲気が違うけど。

「いや、別に構わないけど……お客さんかな？」

「あ、まぁ……客です」

「そうか。出てくるのが遅くてすまなかったね」

「い、いえいえ！」

ヤバイ、この人礼儀正しい！いや、店でお客とタメ口って時点で、外、いや元の世界では駄目だけど。

だが！こっちの人でこんなに礼儀正しい人に逢ったの初めてじゃないか？男性に逢ったのも。

「そ、それで……ちょっと聞きたいことがありまして……」

忘れていた。俺の目的はなんだ？答えは簡単、寝床の調達だ。

その為には……

「すみませんが、道に迷ってしまいまして……泊めてもらえませんかね？」

直球に相手に言う。これ大事。これ真理。

「あぁ、ごめん。そういうことは……」

おやなにかが建築されようとしているぞ？なんだろう、これは……

断られるフ・ラ・グ！

「くっ、ハァッ、ハッ……」

「ど、どうしたんだい？」

「す、すみません……さっき森で吸った瘴気が体に侵蝕し始めた、ようです……」

いきなり過ぎる展開だ。せめて伏線くらい用意しておけよ。

「え……本当かい？」

ヤバイ、信じていない！

クッ、このままではいかん。使いたくはなかったが、最終手段だ！

『普通』一瞬で疲れが取れるなんて有り得ない」

「え？今なんて」

森近さんの言葉を聞き終えぬまま、俺はゆっくりと曲線を描くように倒れていく。

「え、だ、大丈夫――」

フッ、と。蝋燭の火が消えるように、簡単に――

俺の意識が途絶えた。

＊

「――ん、んぅん」

目を開ける。体がだるい。

そこは見慣れない場所だった。

「ハッ」

そ、そうだ。こんな時は。

「知らない天「目が覚めた?」なんで皆、妨害するのっ!?」

ランジェは非情である。どうしても俺にこの台詞を言わせない気だな。

どこからか、「私のせいじゃありません!」なんて怪電波を受信した気がしたが――無視した。

「いきなり、倒れたから驚いたよ」

安堵したような表情でそこにいたのは、香霖堂店主、森近霖之助さんである。

どうも、さっきぶりです。

「いえ、申し訳ありません。疲れが溜まっていたようです……」

先程のことの解説をしよう。

俺は今まで能力で疲れを失くして来た。

だが、さっきの台詞により、能力で能力の否定――つまり、上書き保存をしたのだ。

その結果、今まで排除してきた疲れが、一気に体に襲ってきて――ショックで倒れた、というわけだ。

だが、これはマジで最終手段だった。

下手すると、そのショックで死、なんてことも有り得るからな。

さすが俺!皆にできない事を平然とやってのけるッ!

そこにシビれる！あこがれるゥ！

なんか、虚しくなってきたな……

「あ、直ぐに……クッ」

本当はもう、動けるくらいには回復しているが、わざとらしく体調が悪いという様子を見せ付ける。

俺のそんな様子を見て森近さんは諦めたように溜息をした。幸せが逃げていきますよ？

「一日だけなら、ここにいてもいいよ」

「え？それは願ってもないことですが……いいんですか？」

「僕にも人並の罪悪感が有るしね……動けない君を、無理矢理追い出す、なんてことは出来ない」

「そ、それはそれは。有難うございます！」

俺は心からお礼を言う。

いやぁ、常識的な対応してくれる人で良かった。

まぁ、いきなり行って、「泊めてください！」なんて言うのがまず、常識的ではないから、その返答に常識もなにも有ったもんじゃないけども。

「いやいや、別に」

森近さんが言い終わる前に、俺は「どっこいしょういち」と、おっさん臭く声を漏らして立ち上がる。

「え？」

「いやぁ、疲れた疲れたー」

そう呟きながら、手をぶんぶん、と振り回す。肩が痛い。

「き、君、動けるじゃないか！」

ん？何を言ってるんだ、この人。

「俺、一言でも『動けない』とか『元気がない』とか言いました？」

疲れが溜まっていたとかは言ったが、そんな直接的表現を使った覚えはない。

「だ、だが僕は……動けないんだろうと思って、許可したんだ！君だって、動けないと――」

「だから言ってませんって。俺は自分から『動けない』なんて言ってませんし、貴方の動けないという発言への肯定もしていません。貴方が勝手に思い込んだ、だけでしょう？」

「う、動けるならもう」

「出て行きませんよ。貴方が勘違いしていたとか、そんなものはどうでもいいんです。大事なのは、貴方が泊めると、許可した事実だけ」

だって、そうだろう？普段から、人と人っていうのは、何を考えているか分からずに話すものなんだ。

結果話が成立している――ように、見えるだけ。実際は、全く噛み

合ってないのかもしれない。
だが心のうちが見えずとも、人は人と共存する――それが、普通だ。
「俺は嘘は言っていません。疲れたのも本当ですし、道に迷ったのも本当ですし、森を来たから、瘴気が体に侵蝕していたのも本当です」
まぁ、実際はそこまで侵蝕しなかったわけだけども。
「貴方がそれだけの言葉から、勝手に推測し、勝手に許可を出したんです。なら俺は、勝手に貴方からの許可を有難く頂戴します」
「……ハァッ」
嘆息。森近さんの幸せがどんどん逃げていく。
「君、変わってるね」
「俺は一般人ですよ」
変わってなんかないし、変わろうともしていない。
「俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを信条としてるんですよ」
久しぶりに言ったな、この台詞。
「そうか……いや、言いたいことはまだ有るが、いいよ。泊まって。許可、したんだからね」
森近さんの表情は、諦め、悲しみ、疑念が入り混じってはいるが、吹っ切れたような……満足気な表情だった。

＊

「――何ですか？これ」

「あぁ。そのお札？それには霊力が篭っていてね、力同士を反発させることで……まぁ、簡単に言うと、相手の攻撃を相殺出来る優れものだよ」

まるで、出来のいい子供を自慢する父親のようである。

それで？相手の攻撃を相殺、だっけ？

「これって、誰でも使用できるんですか？」

「あぁ、誰でも使用可能だよ。人間でも、妖怪でも、使おうと思えば、零歳でも、百歳でもね」

流石に零歳には無理だと思う。

だが随分と便利な品物だということには違いない。大量に余ってはいるが。

「これ売れないんですか？」

「そうだね、売れることはないかな……まぁ、売れたら売れたで寂しいんだけどさ」

商売人らしからぬ発言を聞いた気がする。

「言っておくけど、商品までただで渡すことは出来ないからね？」

「それは流石に……気が引けますし」

逆に遠慮してしまって受け取れなさそうだ。

それにしても便利だよなぁ、欲しいなぁ……ハッ、衝動買いする人って、こんな気持ちなのだろうか？

欲しい、が。金がない。

俺の今の持ち物は『きのこ』、『写真付き　きのこ大百科』――

「後は、このケータイだけか……」

電子マネーでも使えればいいが……流石に無理だろう。

「ん？な、なぁ君。ちょっとそれを見せてくれないか？」

森近さんが指差したのは、俺のケータイだった。

今からルーミアの「そーなのかー」ボイスをリピートして楽しもうと思っていたんだが……ま、いっか。

「はい、どうぞ」

俺は特になにも考えず、森近さんに手渡す。

「……電話、か」

分かるんだろうか？幻想郷にもケータイとか有るのかな？

森近さんがケータイを凝視している様を横目で見ながら、俺は大きな欠伸をした。

「今、何時だ？」

辺りを見回すと、時計があった。それが指す時刻は、十二時。

もうこんな時間だったのか。えっと、昼飯を食べてから暫くしてきのこ狩りへ行って……で、迷って……ルーミアと遭遇……なんとかやり過ごし……香霖堂に来て……泊めてもらえることになって……描写はないけど飯を食べて……それから暫く、ってあぁ、今日は色々なことが有ったんだな。そりゃあ時間も遅いわ。

「――ねぇ」

不意に森近さんが話しかけてきた。

「はい？」

「お願いが有るんだ。この、携帯電話を、僕に譲ってくれないか？」

「しょにょ？」

変な声が……絶対おかしい。今のは誰がなんと言おうとおかしい。

「ですが、それは大事なもので……」

「お願いだ、僕に出来ることならするから！」

近づいてこないでください、顔が近い。男とのこんなイベントいらない。

「そんなに欲しいんですか？」

「あぁ」

直球。幻想郷の生物は、直球発言が大好きなようで。

「仕方がありませんね……」

「譲ってくれるのかい？」

「えぇ。そんなに欲しいんでしたら」

「あぁ、ありがと「ただし！」……？」

「条件が有ります。それを呑んでくれたら……ですけどねぇ」

「それは、なんだい？」

「はい。ここに有るものの中から、三品！俺に譲ってくれないでしょうか？」

俺は手を広げ、店の商品たちを指差しながら言う。

「こっちがこれ一つなのにそれに対して、三つもかい？」

「えぇ。先程も言いましたが……それはとても大事なものなんです。とても、ね」

特にルーミアの「そーなのかー」ボイスとか。

「ですから、これでも妥協に妥協を重ねたのですよ？僕のとても大切なものを渡すというのですから、三品くらいいいではないですか」

「いやしかし……うぅむ……」

森近さんは顎に手を置き、考え始める。

「――三つ、だね？」

「えぇ。三品。それ以上は要求しません」

「……分かった。好きなものを言ってくれ」

「――有難うございます」

優しい人である。

「ではまず……このパソコンを」

俺は店に有った中から、なるべく最新の方のものを指差して言う。

森近さんは少し複雑そうな表情をした後――

「分かった。一つ目はそれね」

承諾した。

「では、二品目はこのお札を――」

「あぁ、やはり来たか」

来るだろうと思っていたのだろう。先程まで俺は、この札を凝視していたからな。

「この札を――これだけ」

そう言って俺は、札を一気に掴む。

「えぇ!?ちょ、ちょっと。明らかにオーバーしてるって！」

森近さんは慌てて言う、が。しかし。

「森近さん。この札、数えてください――」

俺は徐に自分が取った札を森近さんに渡し、数えさせる。

「……十枚、十一枚、……全部で十二枚、だね」

完全にオーバーしているじゃないかというように森近さんは告げる。

「はい、一品でしょう？」

「え？」

「十二枚で一ダース。一品です」

俺はバッ、と森近さんの手から札を取って言う。

「な!?」

「俺は、一品と言ったんですよ？一枚で、とか言ったわけじゃない。一ダースだって『一品』ですよね？」

「そんなのは屁理屈だろう！」

「屁理屈が、理屈じゃないとでも？」

森近さんはそれ以上言ってこなかった。何を言っても、屁理屈で返されると分かったのだろう。

それでも、断固反対すれば、なんとかなったかもしれないが……面倒になったのかもしれない。

「三品目、選んでくれ」

「はい、どうも」

俺はお辞儀をして、既に決めていた三品目を指差す。

「最後は――それで」

俺が指差した先に有った物は。

「な、携帯電話!?」

俺が森近さんに譲った、ケータイだった。

「はい、最後はそれで」

「いやいや、渡せるわけないだろう」

「何故ですか？」

「これはさっき君に貰ったもので……」

「ハァッ……森近さん。話聞いてました？」

「な、何をだい？」

「俺は別に『商品の中から三品』なんて言ってません。『ここに有るものの中から三品』と言ったんです。俺があげたとか、非売品とか、関係ない。それはここに有るものですから、俺には貰う権利が有る。違いますか？」

「な、な……」

驚愕。呆れからくる驚愕の表情をしていた。

「屁理屈だね……」

「それは俺もよく分かってますよ」

森近さんは、やられたという表情で、俺にケータイを渡す。

「どうも」

軽くお辞儀をして受け取り、中からメモリーを取り出す。

「それではどうぞ」

「え？」

俺はメモリーカードを抜いたケータイを森近さんに渡した。

「え、え？」

「森近さん……俺、ケータイを貰います。なんて言いましたか？」

森近さんは記憶を辿るように頭を抑える。暫くして。

「言ってないね……」

「でしょう？」

「でも、それだけで、どうするつもりだい？」

そんなの決まっている。

俺は最初に貰ったパソコンを持つ。

「『普通』電源が点かなければパソコンなんて意味がないでしょう」

そう言うと、パソコンの電源がピッ、という効果音と共に入った。

俺はパソコンの横の挿入口にメモリーを差し込む。

「はい、これでＯＫです」

平然とそう告げる。森近さんは口を開けて呆然としていた。クールな感じの人が呆然としている様は中々に面白い。

「君は変わって……いいや、君はなんなんだい？」

呆れた様な苦笑を浮べながら聞いてくる。

「俺は――普通の人間ですよ」

そう呟いて、笑みを零した。

次回！一体どうなる！……大丈夫どこいった。

# 普通過ぎる番外編

『八雲家のその後』

「――まさか、生の身に何か」

森の中。大妖怪である『八雲紫』とその式『八雲藍』は、一人の人間を心配していた。

強大な存在である二人が心配するような人間――その話だけで、一体どんな恐ろしい人間なんだと、普通なら身震いしてしまう程だろう。

だが恐らく、その本人に聞けば「俺は恐ろしくなんかない、普通の人間だ」なんて、回答が返ってくるだろう。

「その可能性は……有るわ」

「……」

二人が何故その人間を心配しているか――

その人間、日常生は、行方知らずになっていたのだ。

普段ならば、普通ならば。紫の能力『境界を操る程度の能力』で見つけ出すことは、容易い。

だが――

「駄目だわ……反応がない」

日常生がどこにいるか、分からない。

それはやはり……二人とも考えるのは避けている様だが。

それはやはり、日常生の『死』を現している可能性が高かった。

「一度、家に帰りましょう」

提案をしたのは、藍だった。

「……そうね」

紫には拒む理由もなかった。

それは、受け入れてしまったからかもしれない。

もう、日常生が見つかることはないと……受け入れたから。

＊

トントン、と。包丁で刻む音が響く。

それ以外の音がない空間が、暫く続く。

「――どうぞ」

藍は先程採ったきのこで作った料理を、主人の前に出す。

藍は虚勢を張っていた。

出逢ってからの期間は短いが、その中で、とても濃厚な日々を過ごして来た仲間、というよりは家族になってきていた存在。

それが、余りにも突然に、忽然と、姿を消したのだ。

悲しく、寂しいに決まっていた。

だが、主人の前で、弱い自分を出すわけには行かなかった。

紫だって、悲しくない筈はないのだ。

どんなに長生きをしていても、どんなに精神力が強くても――

他者の『死』というものは、途轍もなく重い。

「紫様、冷めますよ？」

わざと大きな声で言う。

紫は、その声を聞いて、一拍置いてから、食べ始める。

「美味しい、わね……」

藍はとても料理が上手だものね。と誉めて上げることは、今の紫には出来なかった。

「紫様が、頑張って採ったものですから。尚更です」

自分で収穫したものは美味しく感じるという通説が有る。

それはやはり、気分の問題であるだろう。

気分が重い今は、その通説は、意味を成さなかった。

「えぇ、そうね……」

空返事。上の空。

紫が本気を出しても見つからなかった日常生。

本当なら、そんなことは有り得ることではない。

何故なら紫の能力というのは、冥界だろうが、天界だろうが届く筈のものなのだ。

だが、見つからない。

それは、『死』という感覚より、文字通り『消えた』という方が近い気もした。

「きっと、大丈夫ですよ！」

藍の心無い、根拠ない励まし。

それがどんなに無意味なものかは、紫も、言った本人である藍も、分かっていた。

分かっていたからこそ――

「えぇ、きっと大丈夫よね」

励ましあった。

嘘の励まし。

その嘘は、とても、とても、温かいもので。

目から温かい雫が零れ落ちそうになったが、必死に堪えた。

大丈夫だと、信じていたから――

別れ、そして新たなる出会い！……なんか終わりみたいだな。

「――なんでいるの？」

その言葉は、唐突だった。

「別に唐突でもないと思うけど……」

「心読むな。で、なんでいるの、とは？」

「いや、だってもう――君、三日もここにいるよね？」

「今日もお客来ませんねぇ」

「そうだね……って、話の逸らし方が露骨過ぎる！」

オマケに、店に対しての台詞としては失礼だ！と、喚く霖之助さんを見て、欠伸をする。

「暢気だなぁ……」

「暢気じゃないと、生きていけませんよ。日常はね」

呆れ気味の霖之助さんに、素気なく返す。

それにしても、眠い。退屈だ。

――あれから三日。

進展なし。紫にも藍にも逢えず、帰る場所が無い。

「仕方がないでしょう？来る筈の迎えが来ないんですって」

あいつらは、仮にも大妖怪なので、具体的な名前は避けておく。

「それでも……ここに泊まるのは一日だった筈だろう？」

「おやおや、霖之助さん。そんな台詞「言ったよ」……あれ？」

記憶を辿る。

「一日だけなら、ここにいてもいいよ」――あー、ちゃっかり言っている。

こうなると、弱い。もう反論の余地はない。全面的に悪いのはこちらになってしまった。

反論の余地が無い時は――

「暇ですねぇ……」

「また話を……」

――反論しない。

俺は無駄なことはしない性質だからな。

「そもそも、その迎えっていうのは、本当にここに来るのかい？」

香霖堂の緑茶を勝手に淹れ、啜っている俺を半眼で睨みながら聞いてくる。

「それは、どういう意味ですか？」

「だから、迎えが来る場所を間違えているんじゃあないか？」

――残念だが、それはない。
奴の能力が有れば、どこへでも来ることが出来る筈だ。
まぁ、そうなると、今ここに紫が迎えに来ていない理由が分からなくなるけどな、普通は。

「若しくは――迎えに何か有ったか」

「それこそ、有り得ません」

あいつ等に何か有った？
そんなことが起こる筈が無い。たった、1週間程の仲だが分かる。殺したって死なないような奴らだ。何かしら強力な能力を持つ者なら、別だが。

「信頼しているのかい？」

「畏敬の念を抱いているのかも知れません」

若しくは、崇拝とか。

「君が畏敬の念？」

「俺だって、誰かを敬うことくらいしますよ？」

力が完全に上のものには、しっかりと、従順なのさ、俺は。
いやまぁ、俺でなくても、殆どの人間はそうだろうけどね。逆らわず生きる。これだけで、意外と全うな人生が送れるものだ。楽しい、とかは別物として。

「それはもう神様のように！」

俺は大袈裟に腕を広げた後、神に祈るように手を合わせる。

「ふぅん……」

「おや、信じてないんですか？」

「いや、君って神とか信じてなさそうだから」

「信じてますよ。少なくとも存在は」

ランジェとか、間近で見ちゃったしね。

というか、この幻想郷には神が存在するんだろう。確か。

「まぁ、『信仰』とは別ですが」

居ると分かっているのであって、居ると信じているわけではない。

その二つは、全く別物だ。

「――――――で？」

「で？」

「元々、そんな話はしていなかっただろう！」

あぁ、バレテーラ。

「どんな話でしたっけ？」

俺はわざとらしく肩を竦める。

「早く出てけって話」

あるぇー？何か表現きつくなってませんか？

「……今日もいい天気ですねぇ」

「話を逸らさないでくれ」

「嫌です」

「即答!?」

いつも直球ドストレートやられてるからね。偶にはこっちからも投げさせてもらわないと。

「全く……融通の利かない方ですねぇ」

「随分と利かせた方だと思うんだけど」

俺はか弱い一般人なんだから、もっと大事にしてくれてもいいんじゃないか？

「ハァッ……全く我儘……いや、いいですよ。もう」

「何故僕が悪いみたいな雰囲気に？」

「出て行きます。俺は大人ですから」

「僕が大人じゃないみたいな!?」

いやぁ、一々突っ込むとは律儀な人だ。

「――って、出て行く？」

「はい。俺、嘘吐いたこと一度もないんですよ」

どの口が言う。俺の口か。

だが、出ていくというのは本心で言ったものだ。

「本当？」

「信じてくださいって。霖之助さん――俺としても、いつまでもここに居るわけにもいかないし」

霖之助さんは安堵したような呆れたような悲しそうな微妙な表情を――

って、『悲しそう』？

「――もしかして、霖之助さん……俺が居なくなるのが寂しいんですか？」

俺はニヤけ、からかうように言う。

「なっ、そんな訳無いだろう！」

「男のツンデレとか、誰得ですか」

俺は鼻で笑って、口端を吊り上げた。

霖之助さんは不満そうな顔で、立ち上がった俺を見上げた。

「霖之助さん」

「……何だい」

少し苛立ったような声を出す霖之助さん。

「もし、迎えが来たら――俺は人里に行ったと言ってください。多分来ませんが」

「人里へ向かうのか？」

「じゃ、俺はもう行きますね」

俺はサッ、と後ろ向いて呟く。

霖之助さんが後ろで何か言っているような気がするが――無視した。

「ちょっと、生！」

「霖之助さん」

「……？」

「有難うございました」

霖之助さんは少し驚いたような顔をしていた。

「……君もお礼を言うのか」

「そこっ!?俺も人並には他者に感謝を示しますよ」

失礼な。お礼はちゃんとしましょう！って、小学生でも知ってるぞ。

俺の常識は小学生以下と思われていたのか。

「こちらこそ、楽しかったよ」

「その台詞、物凄く恥ずかしいですよ」

「なっ!?」

本当に反応がいいな。この人は。

「それじゃあ。また」

「あぁ……また」

俺はゆっくりと歩を進めていった。一度も振り向くことはない。

「――随分と静かになるなぁ」

そんな声が、どこからか聞こえた気がした。

＊

「さて、と……」

俺は今、魔法の森にいた。

人里に行く為に、ここを通る必要性はない。遠回りというか、寧ろ逆方向だ。

「別れは済んだの？」

突如、背後からの声。
普通なら驚くが――身構えていたので、そこまで驚きもしなかった。
俺が振り向いた先に居たのは、つい先日『お友達』になった――
「よ、ルーミア」
「別れが長いわ」
手厳しい。別れを惜しむ心くらい誰しもが持っているのだから、長引くのは寧ろ当然というものだろう。
「あんたがそんな心を？」
「……何故、幻想郷の住人は心を読むんだ？」
というか、鼻で笑ったよこいつ。
なんだ？霖之助さんといい、失礼な奴らしかいないな。
「じゃあ、行きましょうか」
「どこにだ？」
俺は首を傾げ、手を肩の横で平行に広げながら訊ねる。
「あんたの行きたい所」
「――――解った」
少し間を置いた後、返答する。

ルーミアは俺の返答と同時に、森の中を歩き始める。
俺も付いて行こう――と思い、再度香霖堂を向く。
「有難うございました」
そして、すいません。
届きもしない言葉を吐いた。
直ぐに、風に飲まれていった。

＊

「着いたわよ」
俺とルーミアがいたのは、大きな池。
近くにはまた大きい山。
「これが――妖怪の山か」
俺達は『妖怪の山』にいた。
「あんた、瘴気は？」
到着の感慨に浸る暇も無く、ルーミアが問う。
「あぁ……『普通』長い時間森にいたんだ。耐性が付いてるだろ」
「随分適当ね……」

「平凡と言ってくれ」
呆れた様なルーミアに、笑みを零しながら返す。
「じゃ、私はもう行くわ」
「おや？もう行くのかよ」
「暇人じゃないのよ」
そりゃ、暇『人』じゃないだろう。お前は。
「そっか……綺麗な景色を眺めながら、俺と愛を語り合ったりはしてくれないか」
「あ、愛!?」
「冗談だ」
ルーミアは怒ったように俺を睨む。
だが俺は、自分には関係ない。というように、その目線をスルーした。
「私は、あんたが怖いわ」
「俺、じゃなくて『八雲紫』だろ？」
「いえ、あんたもよ」
何を言ってるんだ、こいつ？

俺のような一般人、ルーミアにとっては、取るに足らない存在だろう。

「妖怪の私に冗談を言ったり、妖怪の山で暢気に景色のことを言えたり、ね」

その行為は、怖がられるようなものなのか？

単なる、友人とのスキンシップと、新たな地へ来た瞬間の感想じゃないか。

「あんた……本当に人間？」

挙句の果てに、人外を疑われるって……

「俺は極普通の人間だ」

もう、この台詞を使うのも慣れてきたな。

「嘘ね。少なくとも『普通』ではない」

これ以上何を言っても、納得してくれそうにないので、俺はルーミアの言葉を無視した。

「ハァッ……じゃあね」

「じゃ、な」

素気ない別れの挨拶。このくらいが、程々で良い。

ルーミアの気配が無くなるまで、俺はその場から動かなかった。

徐々に、徐々に薄れていく気配。俺はその変わり行くものを、のん

びりと楽しみながら、空を見上げた。

――どれくらい時間が経ったか？

そんなには、経っていないんだろう。

ルーミアの気配が完全に消えたところで、俺は歩を進め、山を登っていく。

「おーい」

どこからか声が聞こえた気がした。

「おーい」

気がした、じゃない。どこからか、声が聞こえている。

「おーい」

……ポルターガイスト？

本当にそうだったら、どうしよう。

返事をしたら、どこかに連れて行かれるとか……

「おーいおーい」

増えた。

「おーいおーいおーい」

トリプル入りましたー

と、ふざけていても、状況は進まないので、俺は声のする方、気配

の有る方を向いた。

「はーい」

投げやりな感じに返事をすると、何も無かった、空間に、いきなり女の子が出現した。

ウェーブのかかった青い髪を、結んでいる。そして……出たよ帽子。何故か東方キャラが被っていることが多い帽子。

「……幽霊？」

「誰が幽霊だっ！」

幽霊も、突っ込みをするものなんだな。勉強になった。多分、普通に生きていくには全然必要ない知識だが。

「だから幽霊じゃないって」

「だから心読むなって」

なんなんだよ、この天丼ネタ。もういいよ、流行ってんのか。

「私は谷カッパの……」

「あ、待ってください。河童？」

どこかで見覚えが有る。つまり、こいつは原作キャラだ。

何故、こうも悉く原作キャラに出逢うんだ。確立おかしいだろ。

「あー少し待ってください」

えっと……河童、河童。思い出せ。誰だっけこいつ――

「そうだ。お、値段以上！」

「にとり♪」

そう、彼女の名前は『にとり』だ。

思い出した。確か、河童というとお値段以上、だと覚えていたんだ。

「私のこと知ってるの？」

「えぇ、御噂は兼兼」

「そう？照れるなー」

よし。こいつちょろい！

「それで、何の御用でしょうか、にとりさん？」

「うん。単刀直入に。帰ったほうがいいよ？」

……は？

何言ってんだこいつ。

「申し訳ありませんが、俺は帰るわけには……」

「なら力付くでも！」

おおい！おいおい、待て待て！

何なんだ、いきなり!?

「俺も、ここに用事が有るんですって！」

「問答無用！」

「話聞いてくださいよ河童さぁん!!!」

クソッ！今日は大丈夫で終われると思ったのに！

お値段異常な河童物語。

「――――――問答無用！」

「話聞いてくださいよ河童さぁん!!!」

いきなり戦意を出してきた河童から逃げるため、俺は山の木々の中を走って潜り抜けていく。

「な、何故突然……」

俺を喰う為に、か？

いや違う。にとりは俺を帰そうとしていた。俺が目的ではなく、俺が山に入ろうとする――その行為の妨害が目的。

何の為に？その目的を彼女が達成するメリットはなんだ？……駄目だ。分からん。情報が少な過ぎる。

木々の中を暫く走ってから、俺は巨大な樹木の裏に腰掛け、情報の整理を始めることにする。

にとりが俺を発見するのも、時間の問題。

彼女は妖怪だ。攻撃を受ければ――少なくとも、大怪我は免れないと推測される。

それは……当然だが、困る。

「そ、そうだ」

俺は霖之助さんに貰った鞄の中から、携帯と取引で貰った『アレ』を取り出す。

「御札。一ダース……」

素手だろうが、能力を使ったものだろうが、ロボットのビームだろうが――
『力』というものには、絶対的反発をする。それがこの、札の効果である。

「いざという時はこれを……」

使うしか、無いだろう。
だが出来ることなら、それは避けたい。
完全な安全を確保するまでに、どれだけの時間が掛かるか分からない。
それまでに、妖怪に襲われることも少なくないだろう。
だが、御札は無限ではない。十二枚しか無いのだ。
そう、安易に使えるものか。まぁ、死んだら本末転倒なので、本当に使わなくてはいけない、という時までだ。

「近づいて来てるか……？」

先程、間近で目撃してしまった。
彼女――にとりは、どんな手段を使っているのかは知らないが、姿を消すことが出来るのだ。
先程は気配や音は有ったが――それだって、消せる可能性が有る。
周囲に強い注意をしながら、俺は鞄から、もう一つのアイテムを取り出した。

「ＯＫ。頼むぜ、パーソナルコンピューター……！」

パソコン。
俺の能力に依って、立ち上げる事は出来る。
無駄に強力なこの能力のお蔭で、充電しなくても、年中起動出来る

というおまけ付きだ。

後は――

「『普通』パソコンなんだからネットに繋げるもんだろ？」

そう呟いて、インターネットというカーソルをクリックする。

すると、パソコンは大型検索サイトｇ○○ｇｌｅに繋がる。

俺はどちらかと言うなら、ｙａｈ○○派なのだが……まぁ、繋がったんだから良しとしよう。

慣れた手付きで『東方　にとり』と検索する。

「出てきた！」

フルネームは『河城にとり』というらしい。苗字有ったんだな。

「えっと何々……？きゅうりを渡して開放された例が有る？きゅうりなんか持ってないから！」

もっと、有益な情報は無いのか……？

なんか、どうでもいいことしか出てこないんだが。

「『水を操る程度の能力』？」

どこが『程度』だ、どこが。という突っ込みは今更か。

待て。水を操るって、最強じゃないか？どこまで操れるんだ？

血液だって操れるし、空気だって操れるじゃないか。制限が有るなら良いが……

「一体どういう……」

呟いた瞬間。俺の腰掛けていた樹木の直ぐ隣の木に、弾丸が撃ち込まれた。

「は……？」

穴の開いた木を触ってみる。

「濡れてる……」

「見つけた！」

水弾丸が発砲された方を見ると、そこには仁王立ちをするにとりの姿が有った。

「やばっ！」

俺は鞄を持ち、パソコンを抱えながらさらに逃げていった。

「あ、待て！」

「誰が待つんですか！」

俺が見ていたパソコンのページには『実際にどこまで出来るかは不明』と、能力の詳細が書いてあった。

「今分かったよ。少なくとも弱くないってことがな！」

誰に言う訳ではないが。鬱憤を晴らすように叫ぶ。

「もっと、もっと情報は！」

走りながらパソコンを使うのがこんなに大変だったとは。普段こんなことしないから知らなかった。
いやまぁ、しないのが普通なんだが……
「下にスク水を着てる説が有る？え、マジで――――――って、とことんどうでもいいわ!!!」
一瞬興味を引かれかけたが、直ぐに吹っ飛ぶ。詳しい情報は後でゆっくり出来る時に調べるから、今は、現在。必要な情報が出てくればいいんだ！
――だが。ネットというのは、どうでもいい情報の宝庫である。旨く行かないものだ。
「検索、検索、検索、検索!!!」
有益な情報、有益な情報。
やはり、きゅうりを渡すしかないのか……？
「だから待ってぇ！」
「だから待ちません！」
流し読みしていた河城にとりの情報の中から、俺は一つの情報に目を止める。
「人間の盟友？」
どこがだ。なんで盟友を攻撃してるんだよ。

――いや、実際どうなんだ？

俺、攻撃されてるのか？

実際、彼女が本気を出せば、俺なんか取るに足らない存在なのだろう。

だが――俺は無事だ。

更に彼女は、透明になれる技術を持ちながら、それをしようとしない。

本当に彼女は、俺を狙っているのか？

いや違うだろう。俺を狙っていないことは、最初から分かっていた筈だ。

彼女が潰したいのは俺じゃなく、俺を森に入れさせること。

それをする、メリットが不明だったが――人間のことを、盟友と思っているなら――

それなら、説明をすれば大丈夫、か？

「ま、待てー!!!」

駄目だ。彼女はもう完全に躍起になって動いている。

彼女の気を完全に引くことが出来れば――

「よし！」

目的変更。

逃げるでもなく、攻撃されるでもなく――

話をするだけでいい。

「……説得、か」

俺はデスクトップに表示された彼女の情報の一部を見て――

――ニヤリと笑った。

＊

「――待てって！」

疲れたような声が聞こえた。彼女が近づいてきている。
まず、説得というのは『入り』が大事なのだ。
その入りの状況を作る為のチャンスは、一瞬。

「はっ、はぁっ……くっ！」

彼女が俺に先程の水弾丸を放つ。
俺は眼前にそれが来るまで、ジッと体を止め、直撃の直前。
一瞬。

御札を一枚。弾丸へ放った。

力と力がぶつかり合い――激しい音と、煙が辺りに広がった。

「――え？あ、当たった⁉」

攻撃したのは自分だというのに、驚き過ぎである。

「……って、いない？」

煙が晴れたそこには――何も、なかった。

「ま、まさか全部吹っ飛んで……いや、そこまで強い攻撃じゃなかった」

意外と、冷静に分析出来る人、いや河童のようだ。

「じゃ、じゃあ――」

「お見事です」

「ひゅい!?」

これまた、みょんな奇声を上げるな。

「おや。驚かせてしまいましたか。申し訳ありません」

「あ、貴方……!」

驚いたように目を見開くにとり。

今だ。話す隙は与えない。

「このパソコン」

「え?」

「俺のパソコンは少々特殊でして……幻想郷の『外』の情報を得ることが出来るのです」

「外の情報!?」

あぁ、にとりの情報もね。

神様製能力の賜物だ。

「どうですか、にとりさん？パソコンを、とは言えませんが……これを使って情報を得る、なんてことは、許可しても良いですよ？」

「ほ、本当!?」

先程から、よく驚くなぁ。

「本当です。ですが、勿論条件は有りますがね」

「な、なに？」

目がキラキラしてやがる。

「俺を、見逃して貰えませんかねぇ？」

「！そ、それは……」

「出来ません、か。仕方が無いですね。この件は無しで」

「え！えっと……」

「では追いかけっこの続きと行きましょうか。俺、逃げますんで」

「ちょ、ちょっと！」

「じゃあ、よーい、ドン!!!」

「ま、待ったぁー!!!」

「……どうしました？」

「その条件、呑もうじゃないか」

ＯＫ。落ちた。いや寧ろ堕ちた、と言った方が正しいな、これは。

だが――

「いえ。いいです。無理させるつもりはないので」

「え⁉」

「それじゃ」

「待って待って待ちんしゃい！無理してないから！」

「嫌です」

「何故⁉」

「気分が変わりました」

「えぇ⁉」

俺はつい、少し噴出してしまう。

運よくばれなかった様だ。危ない危ない。

手に入りそうなのに、後少しで手に入るのに――

どうしても、手に入らない。

そんな限定感のようなもの……感情や意思有るものは、それに弱い。

押しても引いても駄目なら――

押しと引きを同時に。

要するに――相手を掌中で弄べ。
それにはまってしまった者は――玩具となんら変わりない。同じ感覚に支配される。
先程、河城にとりの情報に書かれていたのはこうだ。
『技術者として、好奇心や探究心が強い』
好奇心と探究心というのは、抑えるのが途轍もなく困難だ。
皮肉なことに、彼女は溺れた。
水を操れる能力を持ち、河童という存在で有る彼女は――
俺の掌中の中で、『自分』という底無し沼に――
溺れていった。

＊

「俺を、助けようとしていたんでしょう？」
「え？」
無邪気にパソコンを触る彼女に、俺は既に解決済みの疑問を問う。
「河童は人間の盟友だから――危険な山の中に、俺を入れることを止めようとした」
なんと不器用なことだろう。

攻撃で止めてくるとは。もっと方法が有っただろう。

「それが――好奇心に負ける程の心配ですか」

「うっ」

にとりは胸を押さえた。俺の言葉が突き刺さったようだ。

「ま、いいですけどね……」

申し訳無さそうなにとりに、俺は何でもないように笑う。

「この程度、気にしてたら普通に生きるなんて出来ませんよ」

「……普通？」

「俺は普通に平凡に常識的に一般的に平和な日常を送ることを信条としてるんです」

これでも、割と寛容な心を持ってるんだ、俺は。

「そ、そういえば！」

「はい？」

「妖怪の山に用が有る、って言ってたけど……何なの？」

「あぁ、それですか……」

そういえばそうだった。

さっきからドタバタしていて、忘れてしまっていた。

「いえ、ね……とある方に、用がありまして……」

「へぇー」

「興味なさそう！」

もう彼女は完全なるパソコンの虜だ。

「ハァッ……」

ゆっくりと溜息を吐くと、体がとても疲れていることに気付いた。

途轍もなく、長い時間走った気がする。

「ハァッ……」

あぁ、幸福が逃げる……

この疲労で、『これから』大丈夫だろうか……？

## 鴉天狗と普通の少年。

――無邪気。
邪な気が無い。と書いて無邪気である。

人間、または人間の様な『知恵』を持つ者は、皆少なからず邪な心を持つ。
それが普通だ。

逆に、長く生きていて、邪な心が無い――俗に言う、『聖人君子』の様な人間は普通ではない。
妖怪なんてチャチな物でもない。化物だ。

例え話。もし、化物が目の前に居たら、どうする？

困る？泣く？逃げる？戸惑う？叫ぶ？

化物は恐ろしいものだ。
そんな化物が化物染みた感情の者が――――――

「なぁ、これ分解していいか？」

「駄目に決まってるでしょう」

いま、俺の前にいた。
敵意を持たない分、本物より厄介である。
あぁ、そんなに落胆しないでくれ。俺は悪くない筈なのに、無意味過ぎる罪悪感に襲われるだろう。

「俺、この後用事が有るんですよ」

飽くまでにこやかに、話しかける。

「へぇー……」

無関心。

こんなあからさまな無関心は、寧ろレアもの。Ｓレアである。

「ここは、良い景色ですねぇ」

「へぇー……」

「最近良い事有りました？」

「へぇー……」

「……胡瓜食べます」

「有るの！」

何故、そこは異様に喰い付くんだよ。

「……『普通』、初対面の相手には御近付の印を、ね」

俺はにとりの掌中に胡瓜を出現させる。

にとりは、俺の能力に驚くこともなく、即座に胡瓜を口に放り込んだ。

「……って、一口⁉」

「これだけ？」

しかもおかわり要求してきやがった。

「俺もう行っていいですか」

「行ってらっしゃーい」

「いや、俺が言いたいのはそうではなく……」

「ん？……あぁ！」

やっと気がついたか。そうそう、俺が言いたいのは。

「お土産は胡瓜でいいよ!!」

「おい」

そうじゃねぇよ。誰が態々お土産買って来るんだ。というか、さっき食べただろ。

「そうじゃなくて、パソコン返してくれって言ってるの！」

読者には伝わってないけど、もう軽く一時間以上はあれから経ってるんだよ。

俺は敬語も忘れて、にとりに要求する。

「後五分ー！」

「寝起きの学生じゃないんだから」

しかもそれフラグだよ。少なくとも俺は、その台詞を言って五分で

済んだ奴見たこと無いよ。

「解った。じゃあ、少しだけでいい。パソコン貸してくれ」

「えぇー。しょうがないなぁ。少しだけね？」

「図々しい、って言葉しってる？今のあんたの状態だよ」

俺はにとりから渡されたパソコンをネットに繋ぎ、調べたいワードをタイピングしていく。

ＯＫ。勿論ブラインドタッチだ。俺の密かな特技の一つ。え、誰でも出来る？失礼しました。

俺は調べた結果の中から、必要な部分だけを覚え、にとりに返す。

「じゃ、俺が戻ってくるまでは使っといていいから」

「おぉー！太もも！」

それを言うなら太っ腹だ。

「腹が太いね！」

良い笑顔で言うな。貶してんのか。

にとりってこんなキャラだっけ？まぁ、良く知らないんだが。

疲れてきた……こいつと話していたからか。久しぶりの突っ込み担当だからか。

俺は一つ溜息を吐いてから、ゆっくり歩いていった――

「お土産、忘れないでねー！」

「買って来ねぇよ！」

振り返らずにそう叫び、後ろから聞こえてきた不満の声を無視して、今度は足早に進んでいった。

＊

右足を出して、次に左足を出す。

歩く。それだけなのだが、体が重い。

「山登りなんて、久しぶりだしなぁ……」

そう、山を登る機会なんて有るものか。ただでさえ、運動は得意じゃあないのに。

どれくらい、登っただろう？多分まだ全然なのに、先程から、気にしてしまう。

つまり。もう歩きたくないのだ。

「ちょっとここら辺で休憩ＴＩＭＥ！」

近くの岩に腰掛、空を見上げる。

「いやぁ……山から見る太陽は綺麗だな。サンだけに」

暫し見つめていたいが、目が痛いので止めて置く。
それにしても……登って来たは良いものの……一体全体どこにいるんだよ、おい。

あぁ、駄目だ。このままでは干からびる。干からびて最悪の場合死に至るよこれ。

これからどうするかを考え、苦悩していた時である。
ふと、どこかから、音が聞こえた気がした。

「……誰かいるんですか？」

音が聞こえた方に話かけてみる。
――返事がない。ただの気のせい

「待ちなさい」

――気のせいのようだ。では、済ませられなかった。

「貴方、侵入は――ってあれ？」

「……ん？何だ。射命丸か」

俺の目の前にいた少女に、俺は見覚えが有った。

――射命丸文。
鴉天狗という妖怪であり、東方Ｐｒｏｊｅｃｔのキャラクターの一人である。

「あやややや。何だ、生さんでしたか」

彼女と俺は、面識が有る。
出逢ったのは、香霖堂で、だ。
あれは、確か――

＊

「――ん？これ……新聞ですか？」

店の中を漁っていると、一枚の新聞を見つけた。
この世界にも、こんなものが有るのか――いや、新聞くらい有るか。
江戸時代にも、瓦版とか有ったんだし。

「あぁ、それは僕が取っている新聞でね」

「へぇ……ふみあや。新聞？」

変な名前の新聞だな。

「文々（ぶんぶんまる）。新聞、だよ」

「どっちにしろ、変な名前ですね」

「変な名前とは何ですかー！」

「え？」

背後から声が――
と、振り向いた瞬間。俺の腹にとても綺麗なキックが極まる。
「ゲ、ハァッ！」
思わず変な声を出して、吹き飛ぶ俺。
「噂をすれば、か」
「号外ですよ！号外！」
「有難う」
「ちょっと待てや、ゴラァ！」
人に強烈な蹴り咬ましといて、何、暢気に話し続けてるんだよこいつら！
「あやや？お客さんですか？私、射命丸文と言います！」
「あ、ご丁寧にどうも。俺はここに泊めて貰ってる日常生と――って、待て待て待て！」
何、ご丁寧な自己紹介してるんだよ！つい返しちゃったじゃねぇか！
「何で俺のこと蹴ったの!?」
「私、生さんのこと蹴りましたっけ？」

「覚えてない!?鳥頭か！」

というか、もう名前呼びかよ。

「私、鴉天狗ですから！」

「本当に鳥だったー!!!」

皮肉も嫌味も機能しなくなっちゃったよ！

「冗談ですよ。私の新聞の名前を悪く言ったから――」

「あ……それは、ごめん」

思い入れが有る新聞だったんだな。俺が軽はずみなこと言ったから……

「まぁ、それは関係ないんですけど」

「関係ないの!?」

今のシリアスな雰囲気返せよ！

「ぶっちゃけ、なんとなくです!!!」

「元気いっぱい何を理不尽ほざいてるんだあんた!?」

「まぁまぁ。それよりも、ウチの新聞取りません？」

「何故この流れから商売をはじめるんだ!?」

「今ならペットボトルのジュース――――――の、『キャップ』も付けますよ♪」

「全力でいらないよ！寧ろ何故その特典で釣れると思ったのかなぁ!?」

「生さんなら、或いは――」

「いや、有りませんからぁ!?」

初対面の奴に変な期待を抱いてるんじゃないよ！

「へぇー。今度人里で祭りかぁ。まぁ、行かないけど」

「霖之助さん!?貴方は話に絡んで来ないと思ったら、何、暢気に新聞読んでるの!?」

「……え、何か言ったかい？」

「駄目だこいつ……早くなんとかしないと……」

「そうですよ！この清く正しい射命丸を見習って！」

「どこが清く正しいだ、どこが。あんたはもう俺の中で子供に見せたくない奴『Ｎｏ．１』だよ」

「そんな、生さんの中で『Ｎｏ．１』だなんて……ポッ」

「誤解を招く部分だけ切り取るな」

頬を赤らめるな。自分で擬音を口にするな。気色悪い。

「生さん」

こんどは何だ。

「責任取って、私と結婚してください！」

「何の責任だよ！」

「おめでとう」

霖之助さん!?何でこんな時だけ混じってくるの!?

「おめでとう」

「何で射命丸までやってんだ！」

「おめでとう」

「おめでとう」

「おめでとう」

「……有難う」

幻想に、ありがとう。

現実に、さようなら。

そして全ての一般人に――――

おめでとう

＊

「――というのが、ファーストコンタクトでしたね！」

「おい待て。捏造すんな」

先程の回想はフィクションだ。

厳密に言うと、最後の部分は全て。

「あ、あれー。そうでしたっけ？」

「わざとだろ」

「ふ、ひゅー、ひゅー♪」

「口笛、吹けてないけど」

全く、と。一度嘆息して、文を見直す。

「射命丸。少し、話が有るんだけど」

「何ですか？……！まさか」

まさか……？何を思って。

「やめて！私に乱暴する気でしょう？エ〇同人みたいに！エ〇同人み

たいに！」

「……違う。少し、頼みが有るんだ」

俺のシリアスな雰囲気を感じ取ったのか、文は、真剣な顔になって俺を見つめる。

「頼み、って？」

「実は――――――――」

「それは……私にも、沽券とか、ポリシーが」

「解ってる。分かってて、頼んでるんだ」

全て『調べた』からな。

「何故、理由を聞いてもいいかしら？」

それは、記者としての好奇心や探究心。そして、長年生きる妖怪としての、義務も込めた――

そんな詰問だった。

「単純なことだ」

「単純？」

「俺には信条が有るんだよ」

決して破ることの無い、信条が。

「どんなものか聞いても？」

「あぁ、勿論。隠す道理も見つからない」

決して変わることの無い、信条。

変えることの出来ない信条。

「俺は、普通に平凡に常識的に一般的に平和的な日常を送ることを、信条としてるんだ」

「……普通、ね」

普通以外に、何が要るんだ？

生きることに、普通でなくなる必要が、有るのか？

そんな俺の、俺自身への問いは、俺の心の中で――――――

渦巻いて、消えた。

＊

「――へっくしょん！」

「おー。大きいくしゃみだなぁ。全く」

「ん？あ、帰ってきたの？」

俺の声を聞き、にとりが振り返る。

「一つ、頼みが有る」

俺はにとりがこちらを見るのを確認して、頭を下げる。

「ど、どうしたんだ？突然」

「そのパソコン。暫くは貸してやる」

「本当!?」

その姿は、まさに今にも飛び跳ねそう――

というか、飛び跳ねていた。

「あぁ、だから一つ」

「一つ？」

「寝床を――提供してくれないか？」

大丈夫だ。事は順調に――進んでいる。

物欲には好物を。

「――――ホームレス？」

「……まぁ、そんなところだ」

遠慮しない奴……今更か。

「苦労してたんだなぁ」

まぁね。実はまだ、幻想郷に来てから、二週間も経ってないんだが。期間なんて関係ないさ。大切なのは、苦労した、事実だろう？

「そうかそうか、頑張ったんだな！」

んー……苦労したってだけで、努力した訳ではないんだがな。まぁ、話が有利に進みそうだし、黙っておこう。

「それで寝床、というか家を……」

「えー……」

無理難題を言っているのは分かるが。何とかならないか？

「うぅん……」

物凄く、渋い顔してるよこの方。

「用事はもう終わったのか？」

話逸らされた。

「一応、ね」

まぁ、射命丸には逢えたし、成果としては充分過ぎるほどだ。
っと。そういえば――

「はい、これ」

俺は、大きな紙袋をにとりに手渡す。

「何これ？」

中を見ろよ。中を。

「見たらいきなり『ウワァー!!!』とか」

その『ウワァー!!!』が何なのかは分からないが……
まぁ、にとりが考えているものは、変なことだということは分かる。

にとりは俺の視線から否定を読み取ったのか、そろり、と袋を覗き込む。

「こ、これは――!?」

そう、察しの良い人なら――いや、そんなに良くない人でも気付いているだろう。
中身は。

「胡瓜だよ」

「いただきます！」

間髪容れろよ、もう少し。

「食い意地の張った奴だ……」

「ひゃっへぇ……ひゅきはからすぁ」

物を口に入れて喋るんじゃありません。

「……ごっくん。だって、好きなんだよ！」

「……胡瓜、物凄く好きなんだな」

「それはもう!!!!!」

予想通りの解答どうも。

「料理して食べたりとかはしないのか？」

「するけど……やっぱり丸齧りが一番だね！」

まぁ、分からなくはないな。味噌とか付けたりして食べると、凄く美味しいし。

後は――そうだな。漬物が好きかな。

浅漬けでも、糠漬けでもいいが……やはり、日本人と言ったら、漬物だろう。

昨今は、若者の漬物離れがドンドン進んでいるらしい。

全く、嘆かわしいことだ。

知らないのか、ご飯と、漬物の絶妙の相性の良さを。

ご飯と漬物は、嫌う人もいるが、俺は好きだ。

そこに味噌汁なんか有ると正に『日本に生まれて良かった！』と染み染み思う。

漬物というのは、誇れる文化なのだ。

誇りは、称え、大事にするものだ。

蔑ろにするものでは、決してない。

無理に食べろとは言わないが……今の若者、まぁ俺も若いんだが。

そういった人達は、それ以前の気がするんだよな。

『漬物』という存在自体を敬遠してるというか……

嫌悪感は抱いていないんだろうが。やはり、『古いもの』という感覚が有るんだろうな。

そう、何と言うか――自分達の文化として認識出来ていないというか――――――もしかして、家で糠漬け作ったりしてないのかなぁ？作者の家は、まだまだ現役で作ってるのに。

あぁ、こんなことを考えていたら漬物食べたくなってきた。

「なぁ、その胡瓜漬物にしたり――」

「もう全部いただきました！」

「嘘っ!?」

バカな……早すぎる……

「え、というか本気(マジ)で早いな」

「えっへん！」

誉めとらん誉めとらん。

まぁ……早く終わったならいいか。

「美味しかったか？」

「とっても美味でした！」

殴りたい、この笑顔。

「――あぁ!?」

「ひゅい!?」

その驚き方しか出来ない呪いにでも掛かっているのだろうか。

いや、どうでもいいんだが。

「何てことだ、河童さん！」

「……何がだ？」

「大切な胡瓜食べてくれちゃって！」

「え？いや、お土産でくれたから――」

お土産？何を言っているのだろうか？

「――――誰が、そんなこと言った？」
「いやお前が」
「言ってないよ？」
何を勘違いしているのだろう？
何を思っているのだろう？
何を履き違えているんだろう？
「俺は言ってないよ。ただ、紙袋を渡しただけ」
「あれはお土産じゃあ――」
「違う。あれは、俺のものだ」
窃盗だ。強奪だ。食い逃げだー！ってね。
「お土産だとも、食べていいとも、一言も口にはしていないのに。河童さん……お前が勝手に食べただけだ」
「いや、あの渡され方だったら勘違いするだろ！」
おや、挙句の果てに言い訳ですか。河童というのは随分と卑怯で卑劣なんだね。おぉ、怖い怖い。
「俺もねぇ……胡瓜好きなんだよ」
「そ、そうなのか」
「同じ胡瓜好きである河童さんなら分かるでしょう？今の、俺の、気持

ち」

好きなものを目の前で盗られたんだぜ、俺？
しかも笑顔で『美味でした！』とか言われるし。

「俺は全く悪くないよ？ただ、胡瓜の入った袋を渡しただけ。それだけなのに、中身全部食べられちゃったんだぜ？」

もし、そっちが俺の立場だったらどうだろう。
好きなものを手に入れて、ウキウキ気分で帰ってきて。
その後、少し持っててもらったら、全部食べられました――――

信じられないし、耐えられないよな。

「うぅ……ごめん」

追い込まれたか。素直っていいよな。簡単で。

「いや、今回の件は、俺の説明不足にも非が有った」

俺はにこり、と笑い。

「今度は、一緒に胡瓜食べようぜ！」

と、手を出した。

「あ、あぁ！」

にとりも笑って、俺の手を握る。
所謂、仲直りの握手ってやつか？

「ま、それはそれ」
「ひゅい？」
「ごめんで済んだら、警察はいらんわ！」
「えぇ!?」
関係の修復と、関係の改善が別物のように――
仲直りは、謝罪の気持ちを求めないってことじゃないんだ。
「ど、どうすれば……」
「お嬢さん！」
「お嬢さん!?」
「ここに一つ耳寄りな情報が」
にとりは、戸惑いながらも、受けの姿勢でこちらの話に耳を傾けている。
そんなにとりに、屈託の無い笑顔を浮べた後。
「こちらの、好きなものを盗られた不憫な少年！」
まぁ俺なんだが。
「とても困って――助けを求めているのです」

「助け……？」

よし、釣れた。

「Ｅｘａｃｔｌｙ（そのとおりでございます）」

「へ？何て言った？」

気にするなよ。突っかかるなよ。

「この少年！今！家が無い！」

「うっ。それはもしかして……」

頭の良い河童さんなら、もう気付いてるくせに！

「ＯＫ！寝床でもいいから欲しいなぁーなんて！」

「そ、それは……」

「あぁ！お腹減ったな！誰かさんの所為で！」

実際胡瓜食べても、空腹が紛れるのかは微妙だが。

「――――――うぅ」

小さく、呻き声のようなものを上げるにとり。

「分かった、分かったよ！負けた！寝床を探せばいいんでしょ？」

「おや、宜しいので？いやぁ、お優しい方で助かりましたよ」

「よく言うね……」

口だけはよく回るのでね。

力も、経験も、妖怪には程遠い人間だが――

「知恵は中々だろう？」

「良くない知恵はね」

悪知恵ね。まぁ、そちらの方がよく働くって人間の方が、普通に考えて圧倒的に多いのだろう。多分、俺もその部類だしな。

「まぁ、頼みますよ。河童さん」

「一度言ったしなぁ。河童に二言はない！」

おぉ、元気がいいことだ。

「それじゃ、景気付けにどうぞ」

俺は後ろに置いてあった、もう一つの紙袋を渡す。

「何だこれ？」

「胡瓜だが」

そう、中身は胡瓜。それも、十本二十本なんてものじゃなく――

「こ、この数……私が食べたものより圧倒的に多い！どうしたの、これ？」

「言ってなかったか？俺、能力で胡瓜出すことなんて容易いんで」

「え、えぇ!?それじゃ、別に私が食べても良かったんじゃないか！」

何を言ってるんだ。

「許可を取ってなかっただろう？」

「そ、それにしたって」

「河童さん」

にとりは、俺の言葉で文句を言おうとしていた口を閉ざす。

「河童に二言はない――だろう？さっさと寝床用意してくれ」

にとりは「なっ」と、不満を漏らそうとしたであろう口を閉ざし、代わりに溜息を吐いてトボトボと歩いていった。

暫く歩いていったところで、遠くから振り返り、俺を見つめる。

付いて来い……ってことか？

俺は、ゆっくりと、にとりの後を付いて行くのだった――――――

ＯＫ、大丈夫！妖怪の山での寝床ゲットまで後少しだ！

# 小猫と小耳と迷った小物。

「――――迷った」

人は迷いながら成長していくのだと、偉い誰かが言っていた気がする。

だが、きっとその偉い誰かは元より天才的で、迷わず、前に、進んで行けたのだろう。

そう考えるだけでどうだ？全く、良い言葉とは思えなくなってきたな。

まぁその程度の先入観で崩壊するような言葉は、元々、良い言葉とは掛け離れた、無責任なだけの言葉だったのだろう。

「どうでもいいよ」

独り。自分で自分に突っ込みを入れる人間とは、実に虚しく、寂しく、最悪的だとは思わないか？

そんなことを幻想（リアル）でやる元高校生の姿がそこにはあった。

というか、俺だった。

「それより、まずは戻ることが先決だな」

迷った時は、焦らず慌てず後ろ向き――

来た道を戻れば良い。変に進むから、変なイベントが起こるんだ。

と、ここまで語ったはいいのだが……肝心な解説。そう、何故俺が突然、前振り無く、道なんぞに迷っているのか言っていなかったな。

何、簡単単純明解だ。

にとりに付いて行った俺は。

「暫く待っててくれ。寝床は、用意するから」

という命令を受けた。

寝床を用意してもらう身で、どうこう言う事も無いので、当然普通に許諾した。

した――ところまでは良かったのだが。

ただ待っているのも暇。

ということで、妖怪の山を散策することにした。

「――――その結果がこれだよ！」

どうやら俺は、道に迷うという、厄介な運命のレッテルを貼られているようである。

全く迷惑だ。今直ぐ神に抗議したい、『呼びましたか？』呼んでない、帰れ。

知り合いの神もあんななので、神には碌な奴がいないのだろう、と。どこかの誰かに怒られそうな事を勝手に考え、俺は道を戻ってい――

――かなかった。

理由は恐ろしく解り易いものである。

「俺、何処から来たんだっけ？」

当然ながら、覚えていたらこんな発言はしないわけで。

当然ながら、つまり、全然覚えていないわけで。

当然ながら、もう何度目かも分からない程のピンチなわけで。

「……ハァッ」

とりあえず、これまた何度目か分からない溜息。
ふと思ったんだが――溜息にはなんとなく、安心感が有ると思わないか？

確かに、溜息は不幸、というか不安的象徴であるという様な風潮が在る。
だが、このようには思えないだろうか。溜息は不安其の物であると。

つまり、溜息を漏らす、ということは、不安を吐き出すことと同義であり――
溜息は、不満を退き、幸福を残す為のものであると。

そう考えれば、どうしようもなく不安な時。抗いようもなく不幸な時。溜息が、『つい』出てしまうことの説明にはならないか。

あぁ、分かっているさ、こんな考案は字稼ぎ、元い現実逃避であると。

俺はこんなことを考えながら、一歩も動けないでいた。
動ける筈が無い。無闇な無意味は創らない方が良い。こういった場面での行動とは、何処であろうと、悉く死亡フラグに繋がるからである。
例えるなら、料理下手が料理を失敗させるのは、目分量に頼ったり、自己アレンジを加えるからである――というようなものだ。

料理がレシピ通りにやれば失敗しないように。
人生もテンプレ通りに生きれば、敗北はしないんだ。

それが、絶対的な勝利やメリット。ＨＡＰＰＹＥＮＤに繋がるかは分からない、が。
敗北も勝利も無ければ、人生は引分組だ。
実際それは『悪くない』。
だから俺は常に、引分を目指すのだ。

「この場合は無意味だがな！」

この場合、行動しないという行動にも意味がない。
何故なら、助けが来る確率が０になった瞬間（とき）、死という確率が確立するからだ。
つまり、助かるかは分からないが、助からない確率は普通に有る、ということだ。

では逆に、行動した場合――適当にでも、動いた場合は？

まず、死という確率は、１００とは言わずとも極端に上昇するだろう。これは回避不可能だ。

だが同時に助かる可能性も上昇する。

射命丸かにとりに逢えれば大吉。
俺が分かる道に来れば中吉。
言葉が通じる相手に見つかれば小吉。
言葉の通じない妖怪に見つかれば大凶、といったところか？

要するに俺が何を言いたいのかというと。

「とりあえず……歩くぞ！」

前に後ろに右に左に斜めに。
俺はのんびりと、歩き始めた。
まさかこの後、あんなことになるとも知らずに……
「おい誰だよ、不吉なナレーション追加した奴!?」

＊

出れねぇー……進んでいるかも解らねぇー……
どれほど歩いたかは分からないが、長く歩いていることは分かる。
それでも全く景色の変化が見られない気がするのはどういうことなのか。答えは明確だ。やはり俺は方向音痴なんだ。
救いの無さ過ぎる答えに、自分自身呆れていると、どこからか物音が聞こえた気がした。
その時の俺の感覚は言うならば完全なる『デジャヴュ』。
そして元より殆ど無かった安心感が崩れ去っていくような気がした。
「あれ、こんなところで珍しいね」
草を掻き分け、俺の元にやって来たのは一人の少女。随分とフランクである。
……その猫耳は萌えでも狙っているのだろうか。
俺としては、猫より犬派だが。
「あぁ安心してください。猫も好きですから」

「何の話？」
「さて、ここでクイズです」
優勝賞金商品は、無いけど。
「突然だね」
「俺は何の話をしているでしょう？」
「はい！」
はいどうぞ、猫耳少女。
「解りません」
「おや奇遇ですね。俺もです」
「ところで貴方、道に迷ったんでしょ？」
中々鋭いね。
「ここにいるって、そういうことだから」
「ここは何処なんですか？」
「迷い家」
迷い家、ね。
ここに迷い込んだら、もう帰れないなんて展開は勘弁してもらいたいな。

「ここに迷い込んだら、もう帰れないけど」
「驚異的なフラグ回収の速さですね」
同時に俺の感情も壊れていくよ。
「まぁ落ち着いて」
「落ち着けませんよ、普通はね」
俺達二人――というか、一人と一匹の方が正しいのか？
まぁいい。俺達二人を、沈黙が包んだ。
別に、居心地の悪い沈黙ではなかったが、決して、良い空気ではなかった。
沈黙を破ったのは――――――
「これからどうするつもり？」
猫耳少女だった。
「人生は常に迷い道ですよ。迷い家程度では狂いません。だから……別にどうもしませんよ」
猫耳少女は何も言葉を返さなかった。
そして、再び二人の間に沈黙が流れる。
今度は――長い。

どちらも動かず、表情を歪めることすらしない。
安心出来る緊張感――この沈黙からは、そんな感覚に陥った。

先程、どうもしないと言ったが……俺は馬鹿でも完璧でもない。多分いつかはどうかする。
今はその時を待つ。時が流れるのを待つ、というのも。中々良いものだ。

だが、俺のそんな感情は、破られる。

「ねぇ」

またしても沈黙を破るのは猫耳少女だ。
これは――会話の主導権を、相手に渡しているように思える。

「貴方、名前は？」

その質問は、予想外だった。
俺の名前を聞くメリットが見つからない。俺が彼女を打ち負かすわけもないし、時間稼ぎも有り得ない。
その微々たる動揺を、一切顔に出さず、言葉だけを濁す。

彼女の言葉は正しくただの『質問』だった。
とても強制力の有るものじゃない。彼女自身も、強制を求めるような雰囲気ではない。
彼女の能力も分からないし……

ここは、言わないのが正解だろう――――――

「おや、これはすみません。俺は、日常生というものです。お見知り置き――は、求めませんが、宜しくお願いします」

俺は、正解を選ぶ程、ぬるくない。

正解だろうが不正解だろうが。俺が求めるものはいつだって――

普通だ。

「知ってるよ」

じゃあ聞かないでくれ。

「――え、知ってる？」

もしかして――

「ストーキングの趣味は無いけど」

「人の台詞の横取りは、良くないですよ？」

「私は橙」

橙？どこかで聞いたことの有るような名前だ。

まぁ、覚えやすくて良い名前じゃあないか。

「心にもないことを」

「心で思ったことなんですが……」

「私は八雲藍様の式だから」

なんだ藍の知り合いか。

大方、あの二人のどちらかが話したのだろう。道理で。

「八雲家で、俺の事を？」

「聞きもしたけど。見たから」

あれ？俺は逢った記憶がないんだけど……

「前、家に行ったらいたのよ」

それで見ず知らずの俺の事を紫か藍に尋ねたと。道理で。

「道理で、沈黙の中に安心感が有る筈です」

「私は別に貴方に敵意はないし」

有ったら困る。

「藍様の友人だし」

そうだよ。俺が死んだらあいつ等悲しむ……それは自惚れか。だが、ある程度は慕われていると思う。

「でも、ここに迷い込んだらもう脱け出せないのでしょう？」

「いや、別に」

設定はどうした。

「設定とは、変える為に有るんだよ！」

力説すんな。というか、その理論を認めたら、色んな人に怒られる気がする。

「帰りたい？」

それは勿論――と、言い掛けて。口を紡ぐ。

「……ごくっ」

生唾を、飲み込んだ。

「どうしたの？」

「少し、御願いを聞いてもらっても宜しいでしょうか？」

「お願い？」

「そ、その耳！弄らせてもらえませんか？」

デジャヴュ再び。

どうやら俺は、結構動物好きらしい。勘違いしないでいただきたいのは、動物好きであって、そういうプレイが好きなわけではない。絶対に。

「えー……」

軽く引かれた気がする。実はここまで、初会話から十分程である。

「お願いします！一生のお願いここで使用するので！」

相変わらず、軽い一生だ。などと嘲笑う者がいるかもしれない。
変態!!変態!!変態!!変態!!などと、軽蔑する者もいるだろう。

「だけど、ここで引けない覚悟が有るんです！」

「そこまで!?」

俺は橙の突っ込みを無視して、戦闘体勢――土下座に入る。

「……何で？」

何故、かと聞かれれば。理由は無い。
理由は無いが。猫耳は有る。
そして何より――

「そこには愛が有る!!!」

「会話が成立しない！」

言語の成立なんて、実に曖昧なものだ。本当に通じているのかなんて、誰にも分からない。

「いや、小難しい話にしても納得しないから！」

「チッ……」

「舌打ちされた!?」

俺は何度も来る突っ込みを避けながら、土下座を崩さず、頼み込む。

「お願いします橙さん！少しだけで、いいですから!!!」

本当は一時間有っても足りないが……もう、やらせてくれるなら文句はない。少しだけ！先っちょだけでいいから！

「じゃあ……少しだけ」

やった、意外とすんなり！

「やっぱり駄目！」

「ど、どうしてですか!?」

一度言ったことを覆すなんて！人、いや猫としてどうよ!?

「今、『計画通り』みたいな顔してたから！」

なぁっ！こ、ここに来て、表情を変化させてしまうとは……不覚ッ！

「それじゃ、私はこの辺で。あっちの方を真直ぐ歩けば帰れると思うよ！それじゃ！」

橙は帰り道を指差して、忽然と姿を消してしまった。

「いや、消えた。というよりは……高速移動って感じか？」

まぁ、どちらでもいい。

とりあえず、これでやっと帰れる――

それでいいのか？

このまま、帰って、お仕舞いか？
もう逢えるかも、分からないのに。
俺のやろうとしてることは――逃げじゃないのか？

いや、ここで帰れば全てが終わる。
それならそれで――――――

終わらない。
『未練』が残るから。
『後悔』に囚われるから。
終われない。

「あぁ、そうか……」

単純なことだ。
俺は触りたいんだよ。あの耳が。

「なら、諦めるなんて後味悪すぎだろ……！」

俺は、大きく深呼吸して、綺麗な空を見上げた。
輝く太陽は、俺を、応援してくれているように感じた。
そんなことは無いのだろうが――そう思ったのだ。
なら、それでいい。

俺は、ニヤリ、と口端を吊り上げる。

そして、ゆっくりと――

「『普通』一度した発言を覆すなんて良くないだろ？」

希望を、呟いた。

＊

「――――ふぅ。ちゃんと帰れたかな？」

「すみません。少し寄り道がしたくなりまして」

「え？――えぇ!?」

何故、ここに？疑問で埋め尽くされた表情を浮かべる橙。

「いえ。やはり……一度、頷いたのだから、実行に移さないと、俺の気が済まない――澄まないので」

「い、いやというかどうやって付いて……」

まぁ、どうでもいいじゃない。それより触らせてよ。

「……ハァッ。まいった。じゃあ少しだけ」

遂に、橙が落ちた。どうやら、俺の熱意に根負けしたようだ。それ

じゃあ思う存分――

「いただきます！」

礼儀は大事だよな。

しっかりと挨拶を済ませ、さっそく、可愛らしく震える猫耳に優しく触れる。

「ひゃっ！」

甲高い声を上げる橙。

だが、その声に拒絶の念は入っておらず、受け入れてくれていることが分かった。

それなら、もっとしっかりと臨まないと逆に失礼だ。

「もう少し、激しくしても宜しいですか？」

「う、うん……」

許可を貰ったところで、俺はスッ、と息を吸ってから、耳を優しく撫でていく。

「ふっ、うぅん……んっ」

撫でることにも慣れて来たところ見計らい、俺は少し力を強めてみる。

「んんぅ！……はぁ、はぁっ……」

少し、藍を思い出す。

彼女も可愛らしく声を上げていたなぁ、と。

あぁ、いけない。今は彼女との時間だ。
俺は暫く耳を撫でた後、ふと思い立ち、ふぅっ、と耳に息を吹きかける。
「ひゃうんっ!?……ひゃ、あ、あぁん……ちょ、ちょっとそれは……」
「嫌でしたか？」
「駄目ですか？って聞かないところに悪意が無い？」
「いえ、好意なら兎も角、悪意なんて有り得ませんよ」
まぁ、嫌だ。とはっきり言わない感じからして、嫌ではないのだろう。
「でも、触るだけなんて言ってませんし……息を吹きかけるのも、弄るのうちに入りません？」
「でも、少しだけ。って言ったし。そろそろ終わりでいいんじゃない？」
怪訝そうな顔で言ってくる橙。
それに対して俺は。
「終わった方が、良いんですか？」
「……質問に質問で返しちゃ駄目って、教わらなかった？」
「質問返しに質問で返すのは、良いんですか？」
俺はにこやかに返し、返答を待つ。

「……貴方って、意地が悪いわね」

だから、俺は一般人だと、何度言ったら分かるのだろう。

よしここは、旨く丸め込んで――――――

「……さーん」

「ん？」

どこからともなく、聞き覚えの有る声が聞こえた。

自分の耳を頼りに、声がする方を振り向くと。

「生さーん！」

「あぁ、射命丸か。悪いが今いそが……ひでぶっ!!!」

デジャヴュ三度。いい加減にしてくれ。

俺は、見事に蹴りがクリーンヒットした腹を撫でながら、ゆっくりと立ち上がる。

「いってぇ……何しやがる射命丸！」

「なんとなくです！」

「もうその台詞は聞き飽きた！常識を学べ！」

全く、俺は今、これ楽園タイムだというのに……

ギャーギャー五月蝿い射命丸を無視して、橙の方を振り向く。

さて、さっそく交渉の再開を……

「あれ？」

橙がいない。

前にも後ろにも右にも左にも斜めにも。

「おい、射命丸。橙はどこに行った？」

「あやや？最初から生さん一人でしたよ？」

俺一人だった？まさか、そんな筈は……

「もしや、逃げられたか？」

いや、もしやも何も、そうだろう。射命丸に気を取られている間に逃げたんだ。

能力を使えば、追いかけられないことはないだろうが……止めて置こう。気分も萎えたし。これ以上追いかけて行ったら、犯罪者になりかねん。

俺は軽く溜息を吐いた後、騒音に目を向ける。

「で？」

「で、とは？」

「いや、何の用だ？」

「何も有りません！見かけたので！」

「消滅しろ」

「機嫌悪っ！」

主にお前の所為だ。
「ハァッ……お前は大吉じゃなく、大凶だったか」
「何の話です？」
「いや、お前に一生不幸が降り掛からないかなーという話だ」
「私何か悪いことしました⁉」
「悪いことはしてないが……生まれてきたのは、失敗なんじゃないか？」
「存在否定⁉今のは冗談でも許されませんよ！」
「あぁ、すまない、言い過ぎた。お前にも価値は有るよ」
「例えばどんなです？」
「……どうでもいいけどさぁ」
「話逸らしに来やがりましたね」
「ティッシュの箱の構造を考えた人は天才だよなぁ」
「確かにそれは思いますけど、本当にどうでもいいですね」
「まぁ、冗談だよ。お前は良い奴だと思うよ」
「……本当ですか？」

「嘘だ」

「そこは嘘でも最後まで徹してくださいよ！」

仕方がないことだ。
人というのは、嘘吐きだからこそ成り立つんだよ。
嘘を吐かない人間はいない、というのは確かにその通りだが――
寧ろ、人は嘘を吐かなくてはならない。の方が良いと思う。
そうして初めて、人間として成立するのだから――――

「格好付ければいいと思ってません？」

「そういう、お年頃なんでね」

高校生なんて、そんなものだろ。
これでいい、これが普通だ。

「あ……喜べ。お前にも価値が出来たぞ」

「何ですか？」

「俺今、道に迷ってるんだよ……案内してくれ」

「豪く上からですね」

「お願いします。射命丸様！」

「よし、じゃあまずは足をお舐め？」

「消えろ」

「もっとオブラートに包んでください！」

「これでも頑張ったんだぞ？オブラートに包まず言ったら、お前がショックで死ぬかもしれん」

「そこまで!?そんな酷い暴言なんですか!?逆に聞いてみたいですよ！」

言ってやろうか？

「怖いのでパスです」

意気地無しだな。

「無意味な意気地は要りません」

「それもそうだ」

「じゃあ、行きましょうか」

「おぉ、道案内は任せたぞ」

「任されました！」

何だか――橙にはまた逢える気がするな、なんとなく。

と、ここでフラグを建てて置けば、まだチャンスは有る！俺は、諦めないぞ！

そうして、どうでもいい時間はまた、過ぎて行く――

あ、寝床ちゃんと用意出来てるかな、大丈夫かな？

# 普通っぽい番外編

## 【八雲紫と日常編】

空は青い。
雲は白い。
水は冷たくて、お湯は熱い。
これは、俺でなくとも、小学生でも基本的に誰でも知っている様な、自然の常識である。
それこそ、こんな事は動物だって知っている。

人を殺したら捕まる。
小、中学校は義務教育。
だからと言って、高校や大学も出ていて損は無い。
これは、人間――もう少し詳しく言うなら、日本人の作られた固定の常識である。
気儘に生きる野生動物には関係無いし、このくらいの事は、学ぶ気が無くても日本人なら基本知ってる。

それが――常識。

「まだ有るわよ？常識」

「……心を読むのは、世界的常識に反していると思うが」

「口に出してたけど」

え、本当かよ。考える事に没頭し過ぎていた気は無かったんだが……気を付けるようにしよう。

「まぁ、嘘だけど」

こいつの言葉を鵜呑みにするのは金輪際止める事にしよう。

先ず、疑って入るのが、こいつに対しては良さそうだ。

「あぁ……で？他の常識とは？」

外国人の常識や動物の常識。妖怪の常識も有るなんて言わないよな。そんなことは当然の様に知っているぞ。

「個人の常識よ」

「例えば？」

「そうねぇ例えば……『目玉焼きには何をかけるか』とかね」

随分とショボイ例だ。だが、確かに解りやすい。

醤油にソース。マヨネーズにケチャップ、塩。人夫々、皆違う答えや同じ答えが返ってくるだろう。

その答えの中にも「基本は醤油だけど他でも良い」とか「ケチャップ以外は考えられない」とか、様々だろう。

「だが、それを常識というには無理が無いか？」

そんなの、感性や感覚の違いだろう。出るのは当たり前だ。

「どうして？人間のルールだって何処かの個人のモノで、それが広

まっただけでしょう？」

「それとは訳が違うぞ。例えば、俺がお前に命令してもお前は俺の言うことを聞かないだろうが、お前より強いものが命令したら聞く、少なくとも考えるだろう？そういう事だ」

「私は生の命令聞くわよ？」

「ほう？なら俺に個人の常識とやらを納得させてみろ！」

「いいわよ？それじゃ」

紫は呟くと、いきなり俺の肩を掴んで座っている自分の膝に乗せた。

「……何のマネだ？」

「意外と冷静ね？ドキドキしたりしないの？」

「物凄くドキドキしてるが、表面上に出していないだけだ」

「器用ね……まぁそれより、こういう事よ」

何が？

「膝枕に貴方はドキドキしてるみたいだけど、膝枕にドキドキしない男性だっているでしょう？これが個人の常識――というか世界かしら？そういうモノよ」

「――――否」

断じて否。

「膝枕に興奮しない男はいない」

「流石にそれはないでしょう」

「有る」

俺は膝枕をして貰っている体制の儘、キメ顔で話し続ける。傍から見るとシュールかも知れない。

「膝枕とは母性の象徴なのだ」

「母性の象徴？」

「そう、膝枕に詰っているのは『温かさ』そして『優しさ』」

小さい時、泣いた子供を慰めてくれたお母さんの、あの時の抱擁。

「それに通ずる、温もり」

少しバランスが悪くて、寝辛いけど、でも温かさを感じれる。

「愛」

そう――真心。

「柔らかな掌で、頭を撫でてくれたりなんかしちゃった日には、俺の鼓動が決壊するね」

「結局何が言いたいの？」

「膝枕は素晴らしい――――――」

＊

【八雲藍と日常編】

楽しい時間とは、過ぎ去るのが早く感じるものだ。
逆に、苦しい時間や辛い時間程、過ぎ去るのが遅く感じる。

たった、一分。平等な一分という時間でも考え方に依っては、一秒にも一時間にもなりえる。

「ふと思ったんだが」

「思わなくていいよ。面倒だから」

人をそんな口を開けばよく分からないことを言う脇役みたいに。

「その表現、微妙に分かり辛いな」

「例えば――人は生きていると同時に死んでいるのです。そう、それは感覚や感情等が齎す、錯覚かも知れません。ですが、死んでいる事が錯覚なのではなく……生きている事、我々が、今現在、歩んでいる

この人生こそが錯覚だったら、と考えると――中々興味深いですねぇ。こんな感じ」

「あー……なんとなく分かった」

矛盾ばかり表現として出していれば中二病っぽくて格好良いなんて思ったら大間違いだ。実際それはかなり寒い。暇潰しに読んでいたライトノベルや、なんとなく見たアニメなんかで『生きている意味は何か？』なんて意味不明な哲学やられても、面倒なだけだ。

まぁ、この小説はやるけどな。意味不明な哲学。

昨今の小説なんて――それも、駄作者が書く駄文的二次創作なんてそんなもん。

「生。それ以上は流石に」

「あぁ御免。予想以上にキーボードを打つ手が張り切った」

「それで、さっきの話は？」

「さっきの……あぁ。いやふと思ったんだがな『時は金なり』という言葉が有るだろ？」

「ＴＩＭＥ．ｉｓ．Ｍｏｎｅｙか」

「何故英語表記にしようと思ったのかは分からんが、それで合ってる」

「有名な諺だな。それがどうした？」

「あぁ。この諺を考えた奴って幸せだったんじゃないかな、と思って

さ」

「何で？」

「だって辛かったら、時間早く過ぎろよ、時間なんていらないよとか思うもんじゃん？だから結構幸せな人生で、時間が過ぎるのを早く感じてたから大事だ。とか言ったんじゃないかなって」

「中々、面白いけど……実際どうでもいいな。いい言葉だから現代まで残ってる訳だし。それに、お前風の言葉を使うなら『普通、幸福と不幸は平等』だろ？それを時間の中で如何に有効活用出来るかが問題なんだ」

「今、俺風と言ったがそれは違うな。俺的に言うなら『幸福よりも不幸が人生』だ」

「何故そう思うんだ？」

「間違えない生物なんて存在しないからだよ。百の人生の間、五十の幸福と五十の不幸が与えられるのかも知れないが、幸福というのは少しの間違えで充分不幸に成り得るし、逆に不幸を幸福へ変換するのはとても難しい。だから元の平等が有れど、不幸の方が誰も絶対的に多くなると、俺は思う」

俺の言葉に藍は少し考える素振りを見せる。

「うーん……思ったことを其の儘言うならそうかも、いやそうだな」

他にも何か言いたそうだな？

「あぁ。別にそれで良いんじゃないか？」

「何故だ？」
「そう言われると難しいけど――そういうモノだと私も思うし」
何が、言いたいのか自分でも分からないというように、藍は頭を抱える。
「……でも」
そんな藍を見て、俺は微笑を浮べながら語り出す。
「小さな幸福で大きな幸福の様に喜べたり、不幸から幸福を見出せたりしたら、良いかもな」
「……それもそうだな。ところで私達、何の話してたんだっけ？」
「時間の話だけど……もういいや。それより、晩飯作ろうぜ」
「おっ。今日は何だ？」
「うぅん……何にするか？」
「私から一つ要望が有るんだけど、いいか？」
「何だ？」
藍はにっこりと、笑い、俺の顔を覗き込んで。
「ゆっくりと時間を掛けて沢山の美味しい料理作って……紫様を驚か

せよう!!!――――――」

＊

【香霖堂の平凡な日々】

「そんな、生さんの中で『Ｎｏ．１』だなんて……ポッ」

「誤解を招く部分だけ切り取るな」

頬を赤らめるな。自分で擬音を口にするな。気色悪い。

今俺は、香霖堂で射命丸文という鴉天狗の妖怪と対峙している。
ボケて突っ込んで――という日常生活での漫才は突っ込み側からすると疲れるだけで何ら楽しくない。

「で、新聞いかがです？」

「だから要らないって」

「ペットボトルも差し上げますから！」

「飲み物か……それなら考えても」

「空ですけど!!!」

「そんなオチだと思ったよ！」

いらないよ！誰が好き好んでリサイクルに出すもの貰うんだよ。自分で買ってにリサイクルしてろよ。

「そんな⁉いろ〇すですよ！」

「だから何⁉」

いや確かに、ボコボコ、って潰すの物凄く楽しいけどさ。

俺も初めてあの空きボトル潰した時「何だこれ！新時代の幕開け⁉」とか思ったけどさ。

というか、幻想郷にいろ〇す有るのかよ。

「じゃあじゃあ特別に――――――」

「いやいい。もうその手には乗らん」

「そうですか？幻想郷の事が載った本を差し上げようと思ったんですが……」

「――！」

幻想郷の情報。

それは、ここに来たばかりでこれからの当ても無い俺には喉から手が出る程のモノだった。

パソコンで有る程度調べる事は出来るが、ガセかどうかも判別できないし、そもそも幻想郷の外。というかゲーム世界の外である現実の情報よりも、現地の情報の方が当てになるのは当たり前だ。

「うぅん……」

「いえ？無理しなくても良いんですよ？えぇ、良いんです。一冊しか有りませんからねぇ……他の人にあげちゃいますか」

一冊しか無い。

この言葉が真実かどうかは解らないが、確実に射命丸は俺に揺さぶりを掛けている。

これに乗ったら、相手の思う壺――それは解っているのだが。

「先ず、金も無いしなぁ……」

「そこはご安心を！今払って頂かなくても後払い受け付けますから！」

以外にも良心的だ。いや違う。俺を安心させて緊張感を解した後。

「でも要らないんじゃ仕方が有りませんね！」

一気に揺さぶりを掛ける――

駄目だ。

俺はこんな作戦には屈しない。決して屈しないぞ――――――

＊

「まいどありー！」

あれから二分。あっさり屈した。
自分の精神力の弱さには、困ったものだ。
因みに面倒なので、金は今一括一年分払った。
え？どこから？そんなの――――――

「君って、鬼だよね……」

抜け殻の様になっている霖之助さんが呟く。
前の商品の時の件で脅した。この店に有るものだから、この店ごとでも良かったんですがねぇ？とか言って。
反論すれば充分論破出来るのに、払ってくれる当たり、結構良い人だよな。感謝感謝。金は返さないが。

「じゃあこれ！生さんにも！」

文が先程持ってきた号外を俺に渡す。
さっと眼を通すと大きな記事は人里の祭りの事――さっき霖之助さんも少し言っていたな。

「これって、誰でも出店が出来るのか？」

「はい、ちゃんと許可を出せば、ですがね」

ふぅん……脳内に留めて置くか。
まぁ、それよりも。

「そら、早く」

「あやや？何がです？」

「何がじゃないよ！幻想郷の事が書かれてるって本！」

「冗談ですよ！はい！」

文が手渡してきた本は、薄めで表紙にはカラフルに色々な事が書かれていた。

其の中で、俺はその本のタイトルを見た瞬間。固まる。

自分の中で時間が止まった気がした。

「これ――」

プルプルと震えながら声を絞り出す。

「これ、グルメ雑誌じゃねぇか！」

表紙には『里のおすすめグルメ』の文字。

「幻想郷の事の雑誌ですから！嘘は言ってません！」

「ぬぅ……」

それを言われると反論出来ない。

「私の勝ちです！」

「クソッ、やられた！」

俺は雑誌を床に投げ付けて、悔しさを表すように地団駄を踏んだのだった。

「というか、今回の一番の被害者は僕だよね？――――――」

＊

【人喰い妖怪と人乞い人類】

「――――――キャラ」

「は？」

魔法の森付近で、俺はふと、ルーミアに呟いた。

「キャラ変えてみないか？」

「藪から棒にどうしたのよ？」

ルーミアは途端に怪訝そうな顔付きになる。

「いやさ。一回も『わはー』とか言ってくれないなぁと思って」

「漫画の読み過ぎじゃない？そんなの現実で言ってる生物が居たら妖怪ですら引く」

ルーミアの冷静な突っ込みに苦笑しながらも、話を続けていく。

「俺の中でのルーミアはそういうイメージなんだよ」

「あんたって……そういうところ変だよね。『そーなのかー』なんて台詞に執拗に執着したり」

まぁ、本人からしたら意味が分からないか。

例えるなら、芸人に逢った時、普段やってくれるネタを披露して欲しい感覚というか――分かりにくいか。

というか、『そーなのかー』なんて台詞の場合。割と誰でも使うし、意識して遣ってる訳ではないだろう。余計に、か。

「そのー……手を異様に広げてるのはキャラ付けなのか？」

ルーミアのパッと見無邪気さが溢れていそうなポーズを指差して問う。

「聖者は十字架に磔られましたって言ってるように見える？」

「十字架（クロス）を好む中二病――という感じに見えるな」

というか、質問の答えになって無いんだが。

「別にキャラ付けじゃない。というか、キャラ付けって意識してやるモノ？」

「意識してやる奴も居るだろ」

「んー……」

ルーミアは顎に手を置き考える様な素振りをしたが……それ以上は、何も言わなかった。

――沈黙が流れる。

案税制の保障された沈黙なので、緊張感は無い。緊張感は無いが、何とも言えない気まずさは有る。

「……ツンデレとか？」

とりあえず沈黙を破ろうと、前振り無くルーミアに話を始める。

「何が？」

「キャラだよ、キャラ」

「まだ考えてたのか……」

それは、一度始めた話なんだから少しくらいで止めるのは勿体無い。

「ツンデレって……『べっ、別にあんたの為にやったんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！』みたいなやつ？」

「グハァッ!?」

余りの破壊力に吐血――は、しないが、吐血した様に倒れる。

「良い、感じだぜ……」

「付いていけない……」

ただ、一つ言わせて貰いたいことが有るとすれば。

「現象的ツンデレも見たいな」

「現象的ツンデレ？」

「元の方のツンデレだよ。つまり、今みたいな感情の二面性じゃなくて、感情の変化を表すツンデレ」

「例えば？」

「うぅん……挙げづらいけど。ずっとツンツンしていた相手が、時間の積み重ねで打ち解けて言って、最後にはデレてくれたら、それはもう破壊力満点なんてレベルじゃない」

「どんな感覚なの？」

「――兵器だ」

「そんなに⁉」

ツンデレで世界征服も夢じゃない。一瞬本気で思うくらいにはヤバイ。

「でも、今実演するのは難しいかなぁ……？」

「出来たら実演させられてたの⁉」

惜しいが、ルーミアのツンデレ的台詞が聞けただけでもよしとしよう。

「ちゃんと録音もしたし」

「いつの間に!?」

俺はパソコンを取り出して、先程のツンデレボイスをルーミアに聞かせる。

「一体いつ録音起動を……」

「あぁ俺、ルーミアとの会話は全部録音するようにしてるから！」

「気持ち悪い!!キモいじゃなく、純粋に気持ち悪い！」

全力で引かれてしまった。

「友達だろ♪」

「親友にも家族にも恋人にだってしないから！そんな奇行！」

ルーミアが口で言わずも視線で消去を要請してくる。

その視線は殺気の塊。正に虫どころか弱い人間くらい殺せそうな視線だった。弱い人間である俺はもう死にそう。

「甘いぞルーミア！このパソコンはルーミアの記録は完全バックアップが作られ、完璧なるセキュリティが施される仕組みになっている！具体的に言うと、俺ですら全データ消去は不可能！」

「無駄過ぎる技術力!?」

まぁ、能力を使えば消去出来るが……消去するつもりなんて全然無いし、黙って置こう。

「それよりルーミア――あの台詞、終わりに頼むよ」

「えー……」

「この通り！」

昔から大得意だった華麗なる土下座を見せ付けて頼み込む。

「じゃあ、一回だけ……」

「よし来た！」

俺はまるで、これから戦争でも始まるような緊張感で台詞を待つ。

「わはー。そーなのかー」

沈黙が流れた後、静か過ぎる森には、一つの単調な音が響き渡った。

『録音しました――――――』

# 椛舞うとき鐘は止む。

聞くところに依ると、空というものは青いらしい。
そして、夕方には赤く染まり、夜になれば、一面の黒になるらしい。
多分、空というのはおしゃれ好きなのだろう。一日、同じ格好で居る事が耐えられないのだ。
だが毎日同じものをローテーションしていると考えれば、実はずぼらなのかも知れない。
実際のところ、空がどんな性格かなんて知る術は無いので、妄想するしか無いのだが。
まぁ、空に性格なんて有る訳が無い。だって、空なんだから。とでも言ってしまえば、この妄想はそこで終了である。
だから俺は、そんな意味無き意味不明議論を繰り広げたいのでは無く、ただ、昼は空が青く、夕方は赤く、夜は黒い――――――

その常識だけを伝えたかったのだ。

俺の上は、今現在、闇に包まれていた。
厳密に言えば、完全なる闇では無く、所々に光も有る。それは星だ。
この事実から推測するに、今は夜なのだ。

夜の、妖怪の山を――俺は回っていた。

比喩とか、言葉遊びとか、そういうのでは無い。
『文字通り』、俺は回っていたのだ。

別に、地球は常に自転しているから、俺達も廻っているんだ。なんて理論としても機能しないような戯言を吐くつもりは無い。ただ俺は、端的に現在の状況を述べただけである。

「――道に迷った」

俺は山を周っていた。

何故何故何故何故何故何故こんな事に？

それは当然ながら俺の油断。

あの時射命丸（シャメイマル）に――

『分かる所まで来たから、もう大丈夫だ』

なんて言葉を発したのが原因なのだ。

甘かった。自らの方向音痴（運命）を甘く見ていた。

分かる道なら迷わないなんて誰が決めたんだ。誰も決めてない。

俺が決まっていると思い込んだだけだ。

俺の所為だから、誰にも文句は言えない。

空に輝く星は、自分を嘲笑っているように感じた。

「射命丸ー。河童さんー。橙（チェン）さんー」

この辺りの、どの辺りかには居るだろう知り合いの名を呼ぶ。

だが、返事が返ってこないから迷っているのだ。もし返事が返ってくる状況ならば、こんなところで彷徨ってはいない。

山の地理は把握し辛いらしい。だから仕方の無い事だと、自分を慰めつつ、歩いていく。

もう、どれだけ歩いたか。もう駄目だ。誰にも会えず、道も分からない――――――

こんなフラグの様な台詞を考えても、ここは現実。状況は変化無し。

もしこの世界が俺の人生が、御都合主義やＨＡＰＰＹＥＮＤに塗れた現実(幻想)なら、ここで何かしらのイベントが発生するのだろう。

だがリアルは俺に優しくはないらしい。

俺には主人公補正も御都合主義も、そして勿論難聴や躓き屋等というラブコメ属性も、皆無である。

それは普通である。普通であるから仕方の無いことなのだが……柄にも無く、フラグを建てたくなる。

失敗フラグも死亡フラグも要らないが、成功フラグ恋愛フラグ――エトセトラエトセトラ。

「――それが自由に出来たら苦労しないんだが」

諦めた。そんな馬鹿げた事を考えている様な余裕が有るならば歩く方が良い。

小さく息を吐いて、俺は歩を速めた。

にとりも待たせているだろう。心配掛ける事は、なるべくしたくはない。

もう既に夜なので、手遅れだとは思うが。

「辿り着いたら居ない、とか無いよな……？」

そんなのは、とんだドッキリにも程が有る。

だが有りそうで困る。

そうならない為に俺はただ、歩くしかない。

無心になる様に、俺は道を進んでいった――――――

＊

先程も言ったが、山の地理は把握し辛い。自分が何処まで歩いたのか、見当も付かない。
ただ、前に行ったり、曲がったりを繰り返して、体を疲れさせているだけの現状である。
能力の御蔭で疲れは無いのだが。

しかし、気力が回復している訳ではない。
最早俺の中では知り合いの名前を叫ぶ気力も余力も、残ってはいなかった。

「おーい。誰かー」

もう、知り合いで無くとも良いから、誰か人語が通じる相手で有れば良い。
最悪、野宿でも良い。そこを通った誰かが気付いてくれる可能性も有る。
現在、この状況に限り俺が求めているものは、普通では無くとも良い。変化だ。助かる可能性だ。それさえ見出せれば、後はどうとでもなる。どうとでもする。可能性に縋ったり、擦寄るのは、得意なんだ。

もう。何を考えているのか、自分でも理解出来ない様な事を考え始めたその時だった。

御都合主義が、起こった。

「――あれは……？」

人影。

人かは判らないが、そう見える影。

それが視界に入った瞬間。俺はそちらに向かった。全力で歩いた。

もう走る気は起こせなかったが、それでも、縋る事はするしか無かったので、なんとか、歩を進める事が出来た。

「あのっ。そこの……あ、れ？」

俺は確かに影を追った筈だが、俺が向かった先には、何も無かった。

少なくとも、人影に見える様なものは、何も。

見間違えか。幻覚か。そう思った時だった――

背筋が、凍った。

まるで、俺の後ろの世界が、全て、氷付けになった様な感覚に襲われた。

咄嗟に足を前に遣るが、動けない。

疲れで動けないのでは無い。首筋に、冷たさを感じてしまって、動けなかった。

鉄の冷たさ。俺の首筋に当たっていた物が、刃物で有る事を理解出来るまで時間は掛からなかった。

が。それを理解出来ても、何故、突然に、刃を当てられているのかなんて分かる筈も無い。脳をフル回転させ、必死に自分の状況を考えながら、身体を硬直させていた。

どれだけ時間が経っただろう。時間が止まっている気がした。それくらいに、状況に変化が無かった。

刃が俺の首を切り落とす事は無く。ただ、俺が何か行動を起こせる筈も無く。雲が流れる様子を、なんとなく、観察していた。
やっとの思いで、少しの反抗と言う様に、口を開く。
声は出ない。何を言って良いのかが分からない。
軽い調子で詭弁を吐いて遣りたかったが、そんな余裕を見せても、相手の逆鱗に触れたりして、刃を横にやられたら、そこで終了だ。
迂闊な事は出来ない。迂闊な事は言えない。
何も出来ない。少し顔をずらせば、相手の顔が見えるかも知れないが……いきなり、刃を突付けて来る奴だ。勝手な動きをすれば、どうなるか分からない。
分からない。勇気が出ない。だからと言って、何も行動しない訳には行かないが、如何せん遣る事も無い。
非常識な奴に対して、必死に常識を考えても仕方が無いかも知れない。でも、俺は何をすれば良いんだ？
……そうだな。清水の舞台から飛び降りる覚悟で話でも振ってみるか。清水の舞台から飛び降りる覚悟と言う表現を初めて遣うのが、刃を首筋に当てられた時になるとは思わなかった。
まぁどうせ、一度は失った命だ。それに、この儘彷徨っていたら、いつかは死んでいたんだ。
そうして、自己暗示を繰り返す。
ここに来てから、何度死掛けた。転生者である俺に取って、死は軽いものでしか無い。
よし。それなら、成る様に成れ。

「あの。俺に何の用でしょう？」

命が目的だ。なんて言われたらどうしようか。どうしようも出来ないね。チェックメイトという事にして諦めよう。『次回作にご期待下さい！』とでも入れて置けば大丈夫だろう。
俺の言葉に反応して、少し込めた力。刃物を持つ力が強くなった。初っ端から選択肢を誤ったのだろうか。

「――解っているだろう？」

女性の声。何だ？俺の二回目人生は女難に塗れているのか？そんなオプション設定は頼んでいない。

というか、今のは最悪な返しだ。

解るか、そんなもん。俺が何をしたと言うんだ。転生して色々有って迷っているだけだ。

そもそも、解っていたらこんなに苦労してない。こんなに時間を開けてから口を開くなんて面倒な事して無いよ。

「……さぁ？見当も附きませんね」

「……惚けているのか？」

酷い言い様だ。この状況で惚ける奴は多分居ないだろう。少なくとも、そんな奴はまともな人間では無い。

「まぁ良い。だが、私の事は忘れたと言わせない」

え。知り合い？

顔が見えていないから判らないが、言っている事を聞く分には知り合いらしい。

でも、こんな声。聞き覚えが無いんだが……

「顔を見せてくれたら、思い出すかも知れません」

「剣を退かせば、お前は逃げるだろう」

信用されて無いなぁ。一体、何をやらかしたんだ俺は。

「貴方の声は美しい」

「ん？」

「きっと、いや当然、必ず、貴方自身も美しいのでしょうね。あぁ！そんな人の事を忘れてしまったなんて。罪な人間です。俺は」

「お前……またか！」

また。またって何だ？

いや、前に有った事がもう一度繰り返される様。なんて言葉としての意味では無く。俺はこの女と知り合いらしい。前に会った時も、こんな話し方をしていたという事か？おいおい。本当に誰だよこいつ。

「すみません。俺は語彙が貧困なもので。似た様な話になってしまうのです。ですが、この気持ちは本当です。俺は貴方の顔が、貴方の美しい顔が見たい！」

もう良い。この儘で良い。俺のペースで持って行ければ後はどうとでもなる。

「嘘は吐きません。それに貴方も、この儘、俺が思い出せず話が進まないのは本意では無いでしょう？俺は今、走って逃げれる程の体力も有りません。大丈夫逃げません。保障します」

「……分かった。こちらを向け。剣は退けない」

チッ。まぁ良い。今はとりあえず、この女の顔を見て思い出そう。話を進めるしか無さそうだ。

剣が少しだけ首筋を離れる。だが、警戒は解けるどころか、寧ろ強

まったようだ。
俺はゆっくりと、後ろを向く。するとそこには、背にピッタリとくっ付いた、白髪の女の姿が有った。
女は俺の目を、キッ、と睨み付ける。どうやら相当に恨まれているらしい。
そこで気付く。あぁ。彼女は人間では無いらしい。
何故なら、人間には犬耳なんて附いていないからな。
そして気付いた事はもう一つ。俺は彼女を知っている。

「犬走、椛、さん？」

犬走椛（イヌバシリモミジ）。

説明を一応少し。
初登場時は東方風神録四面中ボスキャラで、確か種族は……白狼天狗。
山の見回りをしていて、天狗の中では下っ端らしい。
能力は『千里先まで見通す程度の能力』。内容は文字通りである。
こんなところか。俺だって、ある程度は勉強してきているのだ。その為、紹介の時にｗｉｋｉを引用した様になってしまうのは仕方が無い。そこに文句を言われても困るからな。建前的に『適当ですみません』と言う事しか出来ないからな。

ここで重要なのは一つ。俺は、彼女の事は知らないという事である。
忘れている訳では無いと思う。本当に知らない。情報は知っているが、幻想郷で、生で会ったのはこれが初めての筈だ。
だが。ちょっと待ってくれ。彼女はどうやら俺を知っているらしい。嘘を吐いている訳では無いだろう。詰まるところ、俺は記憶喪失なのだ。

――いや、無い無い無い。
流石にそれはフィクションが過ぎる。伏線も碌に張って無いのに。
別の可能性が有るとすれば。

「ストーキング……？」

「……」

「冗談です！冗談！だから剣に込めた力を弱めて下さい！」

完全に振り被っていた。一瞬で持って行くつもりだった。ハァッ……解ってはいたが、幻想郷（こ）には、常識人や常識妖怪はいないのか？あぁ。この分じゃ居ないな。今後登場が期待される、幽霊や妖精。後は、鬼なんかに淡い希望を持って置く事にしよう。

それで。変質者（ストーカー）でも無いと。まぁ、変質者と言うなら、性質が変わって、狂っているという部分で一致しているだろうが。

「申し訳有りません。俺は、貴方の事を思い出せません。一体、どこで逢ったんでしたっけ？あぁ。でも。美しい方だと言う考えは間違っていなかった様です。いえ。想像よりも遥かに美しい。そういう意味では読み間違えていたかも知れません」

「黙れ」

「解りました。あぁ。僕は何故こんな美しい方の事を思い出せな――」

「黙れ」

「……分かりました」

圧倒的。圧倒的にこちらが不利。さらに、未だに相手の素性も目的も掴めない。と来たもんだ。素性は掴んでるけど。

「私の事を知らないのなら、何故、私の名を知っている？」

「……」

「……おい。何とか言え」

「あ。喋って良いんですか？さっきは殺気を放って『黙れ』とか言っていたのに」

あ。冗談です。冗談抜きで冗談ですから。だから斬るのは勘弁して下さい。俺なんて倒しても、何のアイテムもドロップしませんし、経験値０ですし。斬るだけ無駄ですって。本当。

危ねぇ。死ぬところだった。『命なんて軽いものでしか無い』とか不道徳的に格好付けたけど、そんな事遣るものじゃあ無い。

「お前が私の事を覚えていないのも無理は無い」

おい。忘れているとは言わせないとか何とか、先程の台詞は撤回ですか。この野郎。

それにしても、どういう出逢い何だ一体？忘れていても仕方が無いけど、斬りかかる程のドラマが俺と犬走椛の間でどう起こったんだよ。

「天魔（テンマ）様」

「え？」

「天魔様と、話をしに来ただろう」

あぁ。行ったよ。

天魔が妖怪の山のトップだと聞いたから、というか調べたから、文を使って挨拶に行ったが。

「私はその話を聞いていたんだ」

まぁ。実際、行ったところで挨拶なんて出来る筈も無かった。そもそも、妖怪と人間とは交わるべきでは無いのだ。

確かに、行った時には天魔以外にも多くの天狗が居た。天狗以外の奴も居たのかも知れないが、見分けが付かない。

「へぇ……で。俺は一体、天魔様と、どの様な話を？」

流石にそれくらい覚えている。というか、今日の事だ。信じられないかも知れないが、妖怪の山編は、まだ一日経っていない設定なのだ。

だが、敢えて惚ける。忘れているで突き通す。理由なんて一つだけ。

「……」

犬走椛は怪訝そうに顔を歪めた。

そう。理由は一つ。犬走椛（こいつ）の反応を楽しみたい。

ここまで話を引っ張って来れたんだ。後は何とかなる。何とかならなくても、未来の俺が何とかするだろう。

だから、現在の俺は、未来で自分から恨まれる事となっても、直感で欲望で生きて行く事にしようと思った。

「実は俺。記憶喪失かも知れません。覚えていないのです。ですから、教えて頂きたいなぁ、と」

「……分かった」

私が見たのは。と、犬走椛はありがちに話を始めた。

知っている話を、他人の視点で聞くと言うのも、案外良い物だ。

「聞いているのか？」

「え？あぁ。ちょっと考え事してました。もう一度初めからお願いします」

「ハァッ……仕方が無い。私が見たのは――――」

＊

「――大好きです！」

「ハァ？」

告白した。

生は密かに、告白って、こんなに軽い物だっけ？と溜息を吐いた。

勿論、顔は一切歪めずに。

「いえ、すみません！つい、思った事を言ってしまって。自分に嘘が吐けないタイプ何です。私」

生は、それが嘘だ。と、少し前にどこかで思った様な台詞を心の中

で抑えていた。
一方の、突然に、告白された、天魔と言うと。
「え、えぇ？」
戸惑っていた。
妖怪の山なんて言う、物騒な名前の山のトップとは思えない、無様な慌て様だった。
だが、そこは流石トップを勤めている者という事か。それか、歳の所為か。顔に出すという事も無く、心も直ぐに落ち着かせて、生を見ていた。
「ですから。今の言葉は真の意思です！貴方の様な美しい方を見るのは初めてだ。西洋の人形の様に可愛らしく、一面の花畑の様に可憐で、季節の移り変わりの様に美麗で――」
これでもかと言うくらいに、相手を褒めまくる。辞書を引いて目に留まった言葉を適当に言っている様なくらい意味が解らない。解るのは、飽きる程に褒め称えているという事だけ。
だが、もう慣れたのか。天魔は殆ど戸惑わなかった。
「あぁ。自己紹介が遅れました！興奮してしまって。私、日常生（ニチヅネショウ）という旅の者です」
パンを銜えながら自己紹介をする主人公の様に、要するに爽やかに手早く自己紹介を終わらせる。何時の間にか、ジョブが旅人になっていた様だ。
「という訳で、お願いします！」
どこから出したのか。能力で出したのか。大きな花束を天魔に向

けていた。

「どういう事で!?私は何をお願いされてるの!?」

限界が来て突っ込んでしまった様だ。突っ込み欲には、流石の天魔も勝てない様だ。

逆に生は思った。勝った、と。このままギャグパートとして進めば、危険な目には遭わないと。

「紅い薔薇の花言葉は『熱烈な恋』。一目惚れに、相応しいでしょう？全部で、１０８本有ります。知っていますか？薔薇は本数で花言葉が変わるんです。１０８本は……『結婚しよう』。そういう意味です」

「一目惚れなんて、惚れるのが速いだけ。冷めるのも、速いものよ……」

ギャグパートの雰囲気に流されたのか、それとも、昔に何か有ったのか。天魔は達観した様に、生を諭す。

「１０８本の薔薇には……」

「え？」

天魔の声を無視して、話を続ける。

「１０８本の薔薇には、まだ、花言葉が有るんです」

「……」

天魔は何も言わず、ただ、生から目を背ける事もしなかった。

「『尽きる事の無い愛』。この気持ちは、一生、変わる事が有りません。どうか、私。いや、俺の手を、握ってくれませんか？」

そっと、生は右手を差し出した。

引き寄せられる様に、天魔は左手を出す。

そして、丁寧に、宝石の付いた綺麗な指輪を、天魔の薬指にはめる。

天魔が戸惑っていると、生は、ニコっと微笑んで、

「有難う。これから、宜しく」

と呟いた。

＊

「――天魔様を誑かすなど！」

「誑かす？誑かすって何の事です？」

それにしても、胡散臭いし行動が鼻に付く奴の話だ。その男は碌な人間じゃあ無いな。

「申し訳ありません。本当に記憶喪失の様で、本当に分からないんです」

「なっ。そんな嘘を！」

「本当です。証拠と言う訳では有りませんが、こんな夜に妖怪の山を彷徨う人間は居ないでしょう？」

昼でも居ないだろうけど。

「俺、道が分からずに、迷っているんです。本当に、ここがどこか分からないんです」

「何故、私の事を知っていた？」

「何となく、名前が出て来たんです。多分、記憶が錯乱しているのだと」

嘘は吐いていない。俺は迷っているし、顔を見た時、考えるより先に名前が出たのも本当だ。

「……」

あぁ。信じてないな。これは。少しは可能性として有るかも知れないと思っている程度か。

「ですが。他人事として聞くと、それは可笑しな話ですね」

「どういう事だ？」

まぁ、ノリがギャグだけど。その男の台詞は戯言の塊だよ。

「だって。その男は薔薇を渡して、薔薇の花言葉を教えて、指輪をあげて。それだけですよね？」

「どう考えても求愛行動――」

「違います。花言葉は『結婚しよう』でも、『結婚して下さい』と言った訳じゃあ無い。左手薬指は結婚指輪を嵌める位置ですが、そこに普通の指輪を嵌めてはならないという決まりは無い。『美しい』というのは、単なる社交辞令の様なものと捕えれば、どうでしょう？」

挨拶しに行って、社交辞令をかましながら、御近づきの印として、プレゼントをしただけだ。

「そんな理論が通る訳無いだろう！」

「でも、通す馬鹿が居るんですよ。この世には」

馬鹿みたいな奴が。嘘は吐いていないし、世界の決まりも無視していないと、自己を正当化したがる奴が。

もう、犬走椛は俺が記憶喪失なんかでは無いと、断定しただろう。そして多分、天魔にこの事を伝えるだろう。

だが、今のところはそれでも良い。彼女は天魔に伝える事を優先するだろうから、この場は逃れる。そして、彼女が向かった方向が天狗の拠点だ。そこの場所は何となく覚えているから、それで自分の居る位置を割り出せば良い。何だ。バッチリじゃないか――――――

刹那――視界が暗転した。

目が眩んだのだ。痛みで。目を開けていられなくなったのだ。

俺の身体が、ゆっくり倒れるのを感じる。微かに見えるのは、紅。紅。紅。血だ。血に塗れている。

俺は、斬られた？声が出ない。喉をやられたのか。痛みを感じている様な、何も感じていない様な、よく分からない感覚。

何故。斬られた。ここで。読み間違えた。失敗した。

簡単な話だ。俺は――死んだ。呆気無く。情緒無く。遠慮無く。

俺の存在を無にする為に。

犬走椛が息を荒げている。もっと冷静な奴だと思ったが、カッとなってやったというものか。きっと、純粋に尊敬していたのだろう。天魔を。だから、抑えられず、許せなかったのだ。

そうか。遠慮もしていたんだ。躊躇もしていたんだ。理解もしていたんだ。ただ、許せなかっただかなのだ。

なら、俺は、笑うしか無い。笑って許すしか無い。

意識が遠退く。あぁ。早いなぁ。人生の終り。調子に乗って遊び過ぎたか。

ここは、切り抜ける場面だよ、普通。転生者が、こんなギャグパートで死亡とか、普通じゃない。異常的だ。

……あぁ。そっか。フラグ、建ってたのか。フラグを考えても建たないとか言ってたけど。

俺、言ったじゃないか『死亡フラグは要らない』って。それ完全に、死亡フラグだろ。

でも、最期くらい、普通で良いのにな。こんな時なのに呆れる様に苦笑していた。

幻想郷（ここ）は、最期まで、異常だった。

そして――意識が途絶えた。大丈夫かどうかなんて、考える間も無く、死んでいた。